
花のうへの露（戦国BASARA）

南条武都

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

花のうへの露（戦国BASARA）

【Nコード】

N7974V

【作者名】

南条武都

【あらすじ】

「驚くほど強烈に、女を感じる」 戦国BASARAの小十郎とオリキャラ・朝顔のシリアス長編です。（自サイト、TINAMI掲載）

夜来の細雪が止み、ひんやりとした空気が頬を撫でる朝。小十郎は政宗の母、義姫のもとから、ゆっくりと帰路を辿っていた。

(早いところ、戻りてえもんだが)

残してきた仕事を思うと、のんびりしているわけにもいかないのだが、何しろ持たされた土産が馬三頭分にもものぼるもので、中には脆い菓子のだぐいがあるというから、むやみに急かすわけにもいかない。

(仲が宜しいのは結構な事だが、ここまでくると過保護だな)

義姫が根掘り葉掘り、息子の様子を聞きたがる様を思い出し、一人苦笑を口に上らせる。

本来ならこのような役目は、たとえば義直や左馬之介などが務めるはずなのだが、政宗が一番信を置く小十郎にこそ話を聞きたい、というのが義姫の要望だった。

『Ha、母上のたつての望みとあらばしかたねえ。小十郎、土産をたんまり持つていって、喜ばせて差し上げろ』

政宗自身からも命じられれば、否やもない。小十郎は山のような進物を整えて義姫のもとへ向かい、下にも置かぬ歓待を受けた。少し話をして辞するつもりが、是非にと強いられて一晩泊まることとなり、その次の日。ようやく出立して帰途についたのが、辰の刻(八時)である。

(まあ、昔のように険悪な状態であられるよりは、よほど宜しい事だが)

政宗が家督を継ぐまでの間にあったあれこれを思い出しながら、馬上に揺られる小十郎。その足下は半ば溶けた雪に濡れる山道で、耳に届くのは、蹄が枯れ葉を踏み分ける沈んだ音だけである。

(そろそろ春も近いな)

ぼそつ、ぼそつと重たい蹄の音を聞きながら、小十郎は考えに耽

った。つい先頃まで雪に埋もれていた奥州も、命芽吹く春に向けて日一日、その化粧をぬぐい去りつつある。露に濡れる木々を見る小十郎の頭の中は、しかし戻った後に控えている仕事のあれこれに占められていた。

（文の確認と……土産の仕分け……田の手入れに……ああ、孫兵衛が何か相談事があるといつてたな）

伊達の家政も取り仕切る小十郎の要務は数多い。奥州をその背に負う政宗の負担を少しでも減らす為なので、どれほど忙しくても苦にならないが、こうして仕事から身を離している時は、政宗が不自由していないか、何か遅滞はないかと心配で心が曇る。

（近々、文七郎辺りに書の手伝いをさせるか）

そんな事を思いながら、馬を進めて下り坂にかかった時。

ずっ……

「!?」

不意に視界が揺れて、身体が前面に引つ張られた。ひいん、と空気を裂く甲高い鳴き声が耳に届いた次の瞬間、馬体が勢いよく前のめりになる、否、踏ん張った馬の足ごと地面が斜面を滑り、その上三頭とも、荷物を背負った状態で連なっていたため、

「なっ!?!」

さすがの小十郎も身動き叶わず、咄嗟に馬体を挟む足を締めてしがみつくとしか出来なかった。しかも悪い事に、緩く湾曲したその道の先に、旅装の女が視界に飛び込んでくる。

「あぶねえっ、避ける!!」

口から出た叫びに女が振り向く。笠の下に隠れた顔の表情までは見えなかったが、坂を滑り落ちてくる馬たちに驚いたのか、女はびくっとして後ろにとびすさった。だが、

「あっ……!!」

足を下ろした先に地面が無い。きつく手綱を絞って馬の暴走を止めようとする小十郎の目の前で、女の姿は山道の端から、ぱっと消え失せてしまった。遅れて悲鳴と、枝葉の折れるばきばきと

いう音が、地滑りの合間に小十郎の耳へ届く。

「どーう、どうどう！」

坂を滑り落ちた馬が混乱状態であらぬ方向へ走り出しそうになるのを、小十郎はその膂力と卓越した手綱さばきで押さえ込んだ。道の端から飛び出しかけたところで何とか留まると、息を荒げる馬の上からひらりと飛び降りた。

(さっきの女は！)

膝をついて下を覗き込む小十郎の目に映ったのは、一丈ほど下がった場所にある茂みに埋もれた女の姿だった。腰の辺りを中心にめりこんで、笠はどこかに吹っ飛び、着物の裾が膝までめくれて、あられもない格好になっている。

「おい、あんた大丈夫か！！！」

まさか死んだか、と肝を冷やした小十郎が良く響く声で呼びかける、

「……ああ……いたたっ」

女は顔をしかめながら、茂みから抜け出そうともがいた。意識はあるようだが、腰がはまっっているせいで、身動きが取れないらしい。

「少し待ってる、今行く！」

下手に動けば、女を支えてる枝が折れて、更に落ちるかも知れない。小十郎は腰の刀と羽織を地面に置き、未だ落ち着かない馬たちを木立に繋いだ後、慎重に土の斜面へと足を踏み出した。

石や木の根っこを手がかりに、足先から斜面を滑り降り、小十郎は女のもとに辿り着いた。

「よし、あんた、起きられるか？」

「ああ、まあね……ん、しょっと」

小十郎が来るまで大人しく待つていた女は、その手を借りてゆっくりと身を起こした。足を踏ん張った小十郎が両手を使って引き寄せ、

「俺に掴まれ。このまま上にあがる」

茂みから引き出した女の腕を首に回させる。大丈夫かい、と女が眉根を寄せて苦笑した。

「あたしは結構重いよ？」

「これくらい、どうということもねえ。良いからしっかり腕に力を入れる」

「分かった。頼んだよ、旦那」

そう言つて女は小十郎にぎゅっとしがみついた。小十郎はその腰に手を回し、片手と足だけで登り始める。日々鍛錬を怠らない小十郎にしてみれば、女の身体は重さなど感じないほどだったが、一点だけ、……密着した女の胸元が、相場に立派なものだったので、その質量だけは意識せざるを得なかった。

(……こんな時に何考えてんだ、俺は)

前田の風来坊じゃあるまいし。己を恥じた小十郎は、浮かんだ雑念を振り払うと、斜面を登る手先、足先だけに意識を集中して、女の香しい匂いにも気づかないよう特に努める。

「むっ………！」

そうして女を抱えたまま、小十郎は斜面を登り切った。淵に手をかけて一気に身体を持ち上げ、まず女を、次に自分の身を道の上に戻し、一息吐く。

「大事ないか、あんた。驚かせちまつてすまねえな」

多少崩れて目の前に一筋落ちかかった髪をかきあげながら、小十郎は女を見、そして息を飲んだ。

あちこちに土や葉をまわりつかせた女は、年の頃、小十郎と同じくらいのようにだ。

声をかけられてこちらを見上げる目はぞろりと細かいまつげに縁取られ、ぬばたまのごとく黒々とした瞳が小十郎を映している。そのいかにも柔らかかそうな肉厚な唇、その肩に落ちかかるしっとりとした長い髪、着物の上からも分かるほど女らしい肉付きで、しなだれるように曲線を描く身体……見た目の何をとつても艶を含み、ぞくりとするような色気が見て取れ、小十郎は秘かにたじろぐ思いがした。

(こんな山の中にいるような女じゃねえな)

地味な紺の着物を身につけているが、どちらかといえば、花鳥風月を派手にあしらった華やかな衣装が似合いそうな、いかにも町の女という風である。

「ああ……ありがとうよ、旦那。何とか無事だよ」

小十郎の問いかけに答えた言葉遣いは、蓮つ葉で女の風体にも良く合う。乱れた着物を直し、ああ驚いた、と言いながら立ち上がるうとして、

「っ……!!」

女は不意に顔をしかめて地面に尻を落とした。ぎよっとして小十郎は女の腕を掴んで支える。

「おい、大丈夫か!」

「ああいや……大丈夫といたいけど、ちょっと無理だね、こりゃ」「怪我したか。どこが痛む」

「足が……」

「見せてみる」

途端、女は困惑の表情を浮かべた。

「そんな、見てもらうほどのものじゃないよ」

「だが、立てないんだろ。安心しろ、悪さはしねえ。簡単な手当なら俺にも出来るし、あんたが怪我したのはこっちのせいだ。少しは楽になるだろうから、看させてくれ」

「……ふう。分かった、じゃあ頼むよ、旦那」

不承不承と苦笑いを浮かべ、女は右足のすね辺りを示した。

小十郎がその足下に膝をつき、不作法にならないよう注意しながら着物の裾を少し開くと、白い足が露わになる。普通の時ならこれもまた目の毒になりそうな綺麗な足だが、落ちた時に打ったものか、あちこちに打ち身らしき赤い跡がついていて、見るも無惨だ。

（いや、それだけじゃない。これは……刀傷？）

打ち身を慎重に調べながら、小十郎の目にそれが映った。右足の脇から前面にかけて、傷痕が長く伸びている。

（躊躇ったのは、このせいかな）

恥じらいというより、困っている風だったのは、これを見られたくなかったのかもしれない。無理強いしてかえって悪い事をしたか、と思ったが、小十郎の手が足首近くの痣に触れると、

「いつつ！」

女がびくんと大きく震えた。

「ここか。……これは……いけねえな。捻挫どころじゃ済まなさそうだ」

小十郎は医術を学んではないが、鍛錬の合間に行う手当は慣れたもので、怪我の具合もある程度ははかれる。どうやら足の骨に異常を来しているらしい。

「折れてや……しないだろ？」

いつつ、と呻く女は言葉こそしっかりしてるが、その額に汗が浮かび、いかにも辛そうに顔を歪めている。

「ああ、だがおそらく、骨にひびが入ってる。これじゃ歩ける訳がねえ」

小十郎は衝撃を与えないように女の足を静かに下ろす。羽織を着、刀を腰にはいてから馬達のもとへ向かうと、下ろした荷物の中から

小太刀と紐を取り出した。女のところへ戻り、細い足首に添え木代わりと結びつける。

「とりあえずこれで我慢してくれ。この先に里がある、そこで医者に診せよう」

「そうかい、そりゃ助かる……うわっ!？」

そして腕を女の背中と足の下に回して、ふわりと抱き上げた。突然の事に女が驚いて暴れかけ、しかし足から激痛が走ったのか、いいうづうづ、と奇妙な声を漏らして縮こまる。

「おい、暴れるんじゃない。馬に乗せるだけだ」

「ああ、はい、分かった……。だけど旦那、頼むから、何かする時は、予告しておくれよ……。びっくりするじゃないか」

「それは、悪かったな」

「そうだよ。馬が落っこちてくる前にだって、今から落ちるぞとか言ってくれりゃいいものを」

無茶言つな、と小十郎は眉根を寄せた。確かに注意散漫だったかもしれないが、地滑りの予想などつくものか。むっつりしながら、荷物を下ろした馬の鞍に女を座らせると、女が不意に小十郎の顔を覗き込んで、

「やだねえ、冗談だよ。旦那にも馬にも、怪我がなくて良かったね」
黒々とした目を細めて笑った。間近で見た柔らかい笑顔、それと同時に、ふわりと何か甘い匂いが鼻をくすぐり、小十郎は一瞬身が強ばるのを感じた。

「……っ」

何だこれは。出会ったばかりなのに、驚くほど強烈に、女を感じる。支えにとくびれた腰を掴んだ掌に、吸い付くような柔らかい肉付きが伝わってきて、それが更に鼓動を早めてしまう。

「……旦那? どうかしたのかい」

馬の上で支えた姿勢のまま硬直してしまった小十郎をいぶかしみ、女が首を傾げる。その声で我に返った小十郎は弾けたように女から手を離すと、

「い、いや、何でもねえ。早いところ行くぞ、そう時間はかからねえからな」

自分も馬上の人となり、ざわつく心の裡を無視して、手綱を取ったのだった。

義姫の土産と旅の女を持って、小十郎は伊達屋敷へと帰着した。女の手当を館の者に託し、自身は真つ先に政宗のもとへ向かう。

「よお、小十郎。ご苦労だったな。母上のご機嫌はどうだった？」

政宗は自室で六爪の手入れをしていた。小十郎が参上した時は三本目にかかったところらしく、鞘を払った抜き身の刀に打ち粉を散らしている。

「はっ、ご母堂様におかれましては、お顔の色よろしく、政宗様のご壮健ぶりをお伝えしたところ、重畳なりと大層お喜びになられました」

下座に畏まった小十郎が応えると、政宗はそりゃGoodなことだ、と呟いた。普段母への好意をあからさまにしない政宗だが、その声には優しい響きが宿っている。

「どうやら土産物も山のようにならしたらいな。馬二頭に山積みだって？」

「はっ……」

まだ報告していないのに、なぜ政宗がそれを知っているのだろう。疑問で言葉が途中で切れてしまったのを素早く察し、政宗は粉を拭いて刀を置くと、そこでにやりと笑った。

「先触れの義直が言っただげ。土産のほかに、お前がMarvelousな女を拾ってきたと、ずいぶん大騒ぎしてやがったな」

「なっ……」

(義直の奴、余計なことを！)

義直の先走った報告はどうせ事実以上に膨らみ、政宗にいらぬ好奇心を抱かせるような内容だったに違いない。その証拠に、政宗はあぐらを組んだ膝に頬杖をつき、

「それで？ 小十郎。お前が拾ってきた大層なBeautyってのは、どういう女なんだ」

にやにやとからかう表情で尋ねてきた。普段諭されることの多い指南役の弱みを見つけたと、喜んでいられるのかもしれない。

(そんなものではないのだがな)

小十郎は一つ咳払いをしてから、さらに堅苦しく姿勢を正して、口を開いた。

「かの者は名を朝顔と申すそうです」

「朝顔。そいつはまた風流な名だな」

確かに、古めかしいと言っても良い名だ。小十郎は一つ頷き、続ける。

「女の一人旅にて、越後への途上にあつた由。道で行き合った際、こちらの馬が地面を滑り落ち、それを避けようとした彼女に怪我を負わせてしまったのです」

「そいつはまた、らしくないな」

「面目ありませぬ。傷浅からぬ故、ただいま医師にかからせております。政宗様におかれましては、かの者の怪我が治るまでの逗留をお許し頂ければと。無論、お手を煩わせるような事は致しませぬ」

「Hun、そりやかまわねえよ。お前の好きにしな」

「はつ。ありがとうございます」

頭を下げる小十郎の前で政宗は四本目を手に取った。目の前にかざして刃に刻まれた疵の具合を確認しながら、

「俺はお前がその女のところに入り浸つたつて文句はねえ。そんないい女なら逃すもんじゃねえぞ」

さらりとそんな事を言い出したので、

「なつ、何を仰いますか、そのような事致しませぬ！」

小十郎は焦つて思わず声を荒げてしまった。

* * * * *

「……参つたな、全く」

興味津々に女の事を聞きたがる政宗の前からようやく辞した小十郎は、額に手を当てぐったりしながら、廊下を歩いていった。時は午の刻限(12時)、昼餉の用意が出来たと女中が現れなければ、ま

だ捕まつたままだったかもしれない。

(政宗様もつまらぬ事を気にされるものだ)

義直がどれだけ朝顔の事を吹き込んだのか分からないが、何の縁もない通りすがりの女を連れてきただけで、ああも邪推されるとは(つきつきりで見ると見るような事はしないほうが良さそうだな)

勝手に自分の女のように扱われては、朝顔も困るだろう。怪我をさせてしまった故、本当は手ずから面倒を見るべきではあるのだが、と思ったところで小十郎は、前方の部屋から出てくる人影に気づいた。

「……それじゃ、私はこれで」

「ありがとうございます、先生」

「後でまた来ますよ。今はゆっくりお休みなさい。では……おや？」
部屋の中へ声をかけてからこちらに向き直ったのは、医者のお老人・稲尾だった。これは片倉様、と廊下に手をつき頭を下げる。

「お勤めから無事お帰りになられて、何よりです」

「じいさん、いきなり呼びつけてすまなかったな」

「いえいえ、片倉様のお呼びであれば、いつなりと。娘さんの手当は終わっておりますよ、どうぞ」

そう言つて稲尾は所作も静かに立ち去つていった。小さな老人の背中を見送つた後、小十郎は「朝顔、入るぞ」開いたままの障子から部屋の中へと足を踏み入れた。

「ああ、旦那。何かと手を焼かせちまつて、済まないね」

その小十郎を迎えた女 朝顔は、汚れた着物をこちらが用意した小袖に着替えて、布団の上で身を起こしていた。小十郎と目が合うと、上体だけ曲げて頭を下げる。

「よしてくれ、怪我をさせたのは俺だ。これくらい当然だろう。気にするな」

「そうはいつでもねえ……」

小十郎が畳に腰を下ろす前で、朝顔は苦笑いを浮かべて肩の髪を背中に払った。

「まさか旦那が、伊達の殿様にお仕えしてるとは、思いもしなかったから驚いたよ。言われてみりゃ、御名を聞いたことあったけどさ」「ほう、俺のことを知ってるのか」

「そりゃね、伊達には凄腕で有能なお人がいるってどこにいつても噂を聞いたからね。竜の右目と言ったら今、浮世絵でも人気の絵柄だそうだよ、右目の旦那」

「からかいの口調で言われ、それは初耳だ、と小十郎は頭をかいた。天下統一を目指して疾走する政宗に付き従い、あちこちを巡った故なのかもしれないが、市井でそんな事になっているとは、想像もしていなかった。何とも居心地悪い思っていると、朝顔がなお、わざとらしく恐縮した様子で肩をすぼめた。

「そんなお偉い方にこんなにあれこれしてもらっちゃあ、恐れ多くて声も出なくなっちゃまうねえ」

「……畏まる必要はねえ。政宗様にはもうお許しを頂いているんだ。あんたは何の気兼ねもなく、怪我が治るまでゆっくりしてりゃあいい」

「思わず語気を強めて言ってから、小十郎はふと道中の会話を思い出した。

「そういや、越後に行くつもりだったと言ってたな。急ぎの用件か？ 何なら、相手方に文を書くか」

「あぁいや、それは構わないよ。あちこち物見遊山をしながら、昔なじみの顔でも見に行こうかと思っただけだからね」

「朝顔はどうという事もない、と手を振って笑う。しかし小十郎は、その気安い様子を見て眉間にしわを寄せてしまった。

「女一人で、奥州から越後に向かうつもりだったってのか？ あぶねえな。豊臣秀吉が倒れてからこっち、あちこちで盗人山賊のたぐいが出没してるってのに」

「富国強兵の号令で集められ組織的に鍛えられた兵達は、豊臣秀吉が没した後、その大多数が浮浪と化した。

「帰る場所がある者はまだしも、豊臣軍の圧倒的な軍事力に屈して

国を焼かれ、仕方なく下った者達は、旗頭が倒れた後の居場所を失った。そして理不尽な己の運命を呪いながら、強盗略奪の狼藉を各地で行っているのである。

奥州では、情勢をいち早く察した小十郎が国境の守りを固め、村々に兵を派遣して巡回させ、不審者が入り込んでもすぐに捕らえて大事に至らぬように気を配っている。が、だからといって万事平和とは言えない。

このような折り、女の一人旅がどれほど危険かは、赤子でも分かる事だろう。しかし、朝顔は肩をすくめて、大丈夫だよ、と答えた。「あの山に入るまでは、北に向かう商隊と一緒に移動してきたんだよ。それに、盗賊に盗られて困るような値打ち物も持ってないし、問題ないさ」

「……………」
それはどうだろうか、と小十郎は沈黙した。金目の物はなくとも、どうしようもなく男心をそそのめた目であれば、山賊のたぐいに拐かされて、筆舌に尽くしがたい屈辱にまみれる危険もあるだろうに。

（危機感のねえ女だ）

もやもやと思い浮かびそうになったあれそれを振り払い、何はともあれ、と小十郎は咳払いをした。

「怪我が治ったら、あんたの行きたいところまで、供人をつけて送らせよう。それまでは自分の家と思って、ゆっくり養生してくれ」

「…………… ああ。何から何まで氣遣ってもらってすまないね、右目の旦那。今はお言葉に甘えて、休ませて貰うよ」

対して朝顔は、まだ済まなそうに眉根を寄せながら、それでも心からの感謝のこもった穏やかな声で、礼を言うのだった。

伊達屋敷に身を寄せて、はや七日。療養のために用意された部屋で、朝顔は退屈しきっていた。

「ん……ん、ん……っ」

午睡から目覚め、布団の中で身体を伸ばした。頭の上に広げた腕をだらり、と床に落とす、天井を見上げて、

「……あふ……暇だねえ……」

あくび混じりに一人呟く。

（上げ膳据え膳で、文句を言う筋合いはないんだけどさ）

布団の中で能う限りごろごろしながら、はあ、と大きなため息をついてしまう。

朝顔を怪我させた相手が伊達の副将、片倉小十郎景綱という大層な身分だからか、朝顔は伊達屋敷についたその日から下にも置かぬ客人扱いを受けていた。何から何までお姫様ひいさながら、事細やかにもてなされているのだが、それが逆に居心地が悪い。

（そんなに気を遣わなくとも構わないのにねえ）

朝顔にしてみれば、山でのあれは単なる事故で、誰が悪いというものでもない。

強いてあげるとすれば、周囲の地形を確認もせず、咄嗟にとびさった己の不注意こそ咎めるべきで、片倉がその責を負う必要などないと思っている。

（ありがたいけど、落ち着かないよ。困ったもんだね）

そんなに面倒を見なくてもいい、と一度ならず何度も世話係の者に言っているのだが、片倉様のお命じになられた事ですから、いつも拒まれてしまう。

されば彼の人に陳情しようかと思っても、片倉は初日からこれまで一度も顔を見せていない。まさか朝顔が呼び出したりもできず、かといって文でるるしたためたりと、大袈裟にしてはかえって失礼

だろうか、と思うと何も出来ず仕舞い。

結局こうして部屋で一人、うだうだしているしかない始末だ。

(やれやれ……早いところ、治ってくれりゃいいんだけど)

寝過ぎてだるくなつた身体で起きあがつた朝顔は、布団をめくつた。稲尾の丁寧な手当をなされた足は痛みも減り、少しは動かせるようになってる。それでも回復には一月かかると言われており、まだ完治にはほど遠い。

(それに……)

朝顔は思い立って、帯を緩めると、襟をはだけた。肌触りが良く、いかにも高そうな小袖の下は見慣れた身体が覗き、大きく前にせり出した乳で視界が遮られる。鏡が無い事にはだけてから気づき、朝顔は手探りでそ、と右脇腹に触れた。途端、粗末な包帯の下で、ずきりと痛みが刺さり、思わず顔をしかめる。

(こつちも、まだ時がかかりそうだ)

本当ならこちららも医師の先生に看てもらえば良いのだろうが、余計な詮索をされる事を思うと、口が重くなる。

(そもそもこいつのせいで、崖から落ちる羽目になつたんだよねえ) 怪我の痛みが気になってぼうつとしていたところに、突然馬が暴走してくるのが目に入ったものだから、何も考えずに動いてしまつたのだ。

(全く、あたしの勘も鈍つたもんだよ。……ん?)

やれやれ、とため息をついたところで、朝顔はぱつと廊下の方へ視線を向けた。ばたばたと騒々しい足音を立てて、誰かがこちらにやってくる。女中でも片倉でもなさそうな気配に、(誰だろうね?)と首を傾げながら、朝顔は襟を整え帯を直した。

程なくして、障子の向こうに人影が映り、

「あ、あの、朝顔さん。起きてますか？」

おずおず、と男の声が聞こえてくる。

「ああ、入って構わないよ」

聞き覚えのない声だと思ひながら言うと、やはり遠慮がちに障子

が開き、気の弱そうな顔の若者が、畏まって座しているのが目に入った。朝顔と視線が合うと、顔を赤くしてぱつと俯き、早口に物を言う。

「す、すいやせん、お休みのところ、お邪魔して!」

「いいや、構わないよ。ちょうど退屈してたしね。あたしに何か用かい?」

「あつ、へえつ、あのつ、ちょうどそこで浜さんに出くわしてつ、朝顔さんに新しい服持っていけつて頼まれやして!」

しどろもどろに言いながら、綺麗に置まれた女物の着物の山をずいっと差し出してくる。浜といえば、総白髪でかくしゃくとした女中頭の老婆だ。若い女中が怖がるような威厳のある女だったから、気弱そうなこの青年も顎で使われているのかもしれない。

「そうかい、そりやわざわざ済まないねえ」

顔を真つ赤にして衣装を差し出す若者の姿につい、くすりと笑いつつ、朝顔は葛籠くわごを指さした。

「手伝いついでに悪いけど、そいつはあれに入れてくれないかい。

この足だと、動きにくくてさ」

「へ、へえつ、し、失礼しやすつ」

若者は極力朝顔を見ないように顔を背け、ぎしぎしぎこちない足取りで部屋を横切った。急いで葛籠に服を入れると、「じゃ、そのつ、お邪魔しやしたつ!」またぎくしゃくした仕草で出て行こうとする。

(まあ、初いこと)

まるでカラクリ仕掛けのおもちゃのような動きが面白くて、口元の笑いを抑えきれずに視線で追っていた朝顔は、ふと一点に目を留めた。

「あ、ちよいとお待ち」

「え?」

目の前を通り過ぎる袖をつんと掴むと、若者が貼り付けられたように動きを止める。何事、と凍り付いた若者を見上げた朝顔は、口

の端を上げて微笑みながら、言った。
「あんだ、その服お脱ぎよ」

『What? 小十郎、お前今なんて言った』

『は』

『は、じゃねえ。あの女が今どんな状態か知りません、詳しい事は稲尾に聞いてくれ、だと? 自分で見舞いに行つてねえのか』

『それは……仕事を立て込んでおります故』

『No kidding! 留守にして溜めた分は二日で終わらせた。その後五日、お前はずっとGuestを放つておいたつてわけか』

『政宗様、そうお声を立てずに。朝顔の世話なら、浜殿が十二分に手配りをしております』

『Shut up, 小十郎。今すぐ女のところへ行け』

『何を仰せられます。この小十郎、政宗様のおそばにお仕えするのが勤めにございます。見舞いならば、後ほど』

『Ha, もうガキじゃねえんだ、四六時中俺についてる必要はねえ。それより朝顔の咲き具合でも見に行つてやれ。知ってる顔ひとつねえ場所に放り出されて、すっかりしおれてるかもしれないぜ』

(……慎重が裏目に出たか)

政宗にせつつかれ、小十郎は渋々、朝顔の部屋へと足を向けた。

小十郎としては、朝顔に構い過ぎて妙な噂を立てられぬように、と距離を置いていたのだが、それがかえって主の機嫌を損ねてしまった。

(せめてもう少し、日を置いて訪ねるべきだったな)

政宗の小言を食らったのも堪えるが、朝顔自身にも悪いことをした。

確かに、怪我をして満足に動けないというのに、知人の居ない場所ですら一人取り残されては、心細くなつていてもおかしくはない。せ

めて二、三日に一度顔を見に行くくらいはしておくべきだった。

(退屈させちまつてるかもしれねえ。謝らなきゃいけねえな)

そう思いながら、いつの間にか速い足取りで廊下を進んでいた小十郎の耳に、ふと、笑い声が届いた。

「ん？」

まだ遠くだが、なにやら楽しげな気配がかすかに感じ取れる。どうやら男のものらしいそれを聞いて、小十郎の眉間に一本しわが寄る。

また部下達が、昼間から仕事をさぼって遊んでいるのだろうか。

それなら見つけてどやしつけなければならぬ、と行き先を変更し、声が聞こえる方へと歩を進めた小十郎だったが、しかし、

(あそこは……朝顔の部屋じゃねえか)

たどり着いたのは、最初の目的地と同じ場所だった。障子を半分ほど開いた部屋の中から、楽しげに語らい笑う声が幾重にも重なり、響いていく。音を立てぬように気を付けながら、小十郎が障子の手前までそつと近づくと、中の会話が聞こえてきた。

「……にしてもさつきはびっくりしたっすよ。いきなり脱いで、なんて言われて、頭ん中真っ白になっちゃった」

「はは、そりゃ悪かったねえ。気になったもんだから、つい、ね」

(あれは……文七郎か？)

世話を命じてもないのに、なぜ朝顔の部屋にいるのだろう。そう思ったところで、

「いやあしかし、見事なもんすねえ姐さん」

「こいつは筆頭が好きそうな柄物だ」

「これ、都で流行りの柄っすよね？」

(良直、左馬助に孫兵衛まで？)

聞き慣れた声が次々と聞こえてきて、小十郎は面食らった。こいつら、こんなところで何をしているんだ？

「おや、よく知ってるね」

「へへ、婆娑羅者のダチに教えてもらったっす」

「まあ、今じゃ流行り遅れかもしれないけど。都はすぐ新しいものに取って代わるから」

「えーそうなんすか……ひとつ、筆頭に仕立てて差し上げたらいいんじゃないかと思ったんすけどね」

すると衣擦れの音がして、朝顔の声に苦笑が混ざり込む。

「そいつあちよいと、僭越じゃないかねえ。あたしみたいな野良者の仕立てなんて、伊達の殿様のお気に召すかどうか」

「そんな野良者なんて、何言っんですか、姐さん！」

義直が床でも叩いたのか、どん、と音が響く。

(……いかん。ぼうつとしてる場合じゃねえ)

それで小十郎は我に返った。これではまるきり、盗み聞きではないか。それに話が弾んでいるようだが、部下の怠慢をこのまま見逃すわけにはいかない。

「筆頭は身分なんかで人を差別するような事しやせんよ」

「そうっすよ！俺らみたいなのにも良くしてくれて、そりゃあ立派なお方なんすから！」

「……その立派なお方の部下が、ここで何してるんだ？」

会話の合間を縫って、小十郎はすつと部屋の前に立った。中にいたのは声の通りの面々で、

「ひっ……」

「か、片倉さま……」

小十郎の姿を目にした途端、ぱきーんと凍り付く。朝顔の床を取り囲んでどっしり腰をおろし、あまつさえ、茶菓子まで持ち込んですっかりくつろいでいるのを見て取り、小十郎の眉間のしわがさらにもう一本、深く刻まれる。そして、

「てめえら、怪我人の部屋に押し掛けて、油を売ってやがるとはい度胸だ！」

びりびりと空気を震わせる怒声はその口からほとばしり出た。

「うひいっ」

「む、むぐうっ!?!」

文七郎が縮こまり、饅頭を口いっぱいにはおぼっていた孫兵衛は喉に詰まらせて目を白黒させ、

「ち、違います片倉様っ」

「俺らはさぼってたわけじゃなくて……」

怒声に押されてのけぞりながらも、義直と左馬助が言い訳をしようとしたが、小十郎はそれを許さなかった。半ば開いていた障子をすぱーんと払いのけ、

「御託はいい、とつとと仕事に戻れ！」

『は、はいすみませんでした！』

小十郎の一喝に飛び上がり、四人は茶碗と菓子、それになぜか、幾枚かの羽織を手にして、どたばたと部屋を駆け出ていった。こけつまるびつ廊下を走っていくのを見送り、小十郎はやれやれ、とため息をついた。

（全く、油断も隙もあつたもんじゃねえ）

忍耐強いと自負している己でさえ揺らぐような、色気たつぷりの女が客人として現れれば、伊達軍の兵達が浮き足立つのは目に見えている。

そのため、朝顔の周りに男を近寄せないように気を付けていたつもりだったのだが、いったいどうしたものか。

「……ああ、驚いた」

改めて朝顔に目を向けると、床で身を起こした朝顔は、目を丸くし、胸を押さえて小十郎を見上げていた。視線が合うと、驚きの表情が微笑のそれに変わる。

「右目の旦那つたら、ずいぶんおっかないんだねえ。あんな風に怒鳴ったりしなくてもいいだろうに」

「……」

よく考えれば、怪我人の前で大声を出すのもいかなものか。

「……済まなかったな、騒々しくして。あいつらにも、後でようく言い聞かせておく」

いささか気まずい思いで謝ると、朝顔はあらいいなだよ、と手招

きした。招きに従って部屋に入り、腰をおろす小十郎。久しぶりに見る朝顔は初日よりは良い顔色で、はつらつと元気そうだ。肩をすくめて、笑う。

「あの子らは叱らないでやっておくれよ。あたしが集めたようなもんなんだから」

「あんたが集めた、だと？」

いったい何のために、と疑問に思ったところで、小十郎は朝顔の手元に気づいた。柔らかそうな指には針と糸、掛布の上には羽織が大きく広がり、その背には細やかな文様が縫われている最中だった。小十郎の視線の先にあるものに気づき、朝顔は布に針を刺して軽く持ち上げて見せた。

「さっきの子……文七郎といったっけね。あの子の裾が解れてるのを見つけたから、直してやってさ。ついでに何か繕いもんは無いかって聞いたら、色々持ってきてくれたんだ」

「何でそんなことを。あんたは客なんだ、使用人のまねごとなんてする必要はねえ」

すると朝顔は柳眉を潜め、心持ち唇の端をあげて苦笑した。

「ううん、でもねえ右目の旦那。ここで横になって日がな一日、天井の染みを数えてるだけってのは、退屈でならないんだよ。ただ飯ぐらいつても性に合わなくてね」

「む……」

退屈、という言葉に小十郎もまた、眉根を寄せてしまった。やはり、放置が過ぎたらしい。

「……すまねえな、あんたを放っておいちまって」

後ろめたさに居心地悪く感じながら頭を下げると、朝顔は慌てて寝床から手を伸ばし（離れていたので届かなかったが）、

「まあ右目の旦那、そんな事気にしないでいいんだよ。旦那は忙しいお人だろう、わざわざ手間とらせるのも申し訳ないからさ。いいからほら、頭上げておくれよ」

「いや……」

政宗の言った通り、見舞いにこれないほど忙しかったわけではないのだ。背筋を伸ばした小十郎は首を振り、

「あんたを怪我させたのは俺だ。俺が面倒見るのが、筋つてもんだらう。これからは毎日、こっちに寄らせてもらう」

きっぱり言い放つ。朝顔はますます困惑顔になった。

「いやだねえ、そんな四角四角に考えないでおくれよ。あたしの怪我なんて、どうせそのうち治るんだ。旦那みたいなお人が、そこまですぐに気にかける事ないんだよ」

よほど、こちらの手間をとらせるのが嫌らしいが、頑な過ぎる朝顔の言葉に、小十郎はぴくつと眉を跳ね上げた。

「俺みたいなのってのは、どういう意味だ？」

低い声で尋ねると、朝顔はそりゃあさ、と首を傾げた。

「右目の旦那は、伊達の殿様に厚く信頼されてる、立派なお武家様だろ？」

「だったら、何だつてんだ」

「何だつて……だからさ、そんなおえらい方が、あたしみたいな野良者の面倒見るなんて、ちよいと大げさすぎるよ」

それなら、と小十郎の口が、勢いで声を発する。

「文七郎達はよくて、俺の顔は見るのも嫌つてことか」

「ええ？」

途端、朝顔がぱちくりと目を瞠ったので、小十郎はハッと硬直した。

（なつ、俺はいつたい何を言ってるんだ！）

世話をさせるとしつこく食い下がって、拒まれれば俺は駄目なのかと拗ねるなんて、まるで子供の駄々のようだ。朝顔は遠慮しているだけで、顔も見たくないなどという他意は、恐らく無いだろうに。

「あ、いや、……その、今は忘れてくれ。意味はねえ」

カツ、と顔が赤くなるのを感じ、やや俯きがちになりながらもごもご呟く。しかし、瞬きをした朝顔は、

「……ふっ、ふふふっ」

口に手を当てて、小さく笑った。そして、袖に口元を隠し、長いまつげを伏せ、小十郎へ艶めかしい流し目をくれる。

「何言ってるんだい、久しぶりに旦那の顔が見られて、あたしはとつても嬉しいよ。それに、旦那みたいな良い男に、手取り足取り世話されるのが嫌な女なんて、いるもんかねえ？」

しかも、しっとり濡れるように甘い口調でそんな事を言い出したものだから、小十郎は背中にとつと汗が吹き出す心地になった。

「て、手取り足取りするつもりはねえが」

わざと妖しげな言葉を選んだのだろうと察しがついたが、その言葉遊びがもたらす想像は、やけに生々しい。

(か、考えるな小十郎！)

想像を振り払いながらもますます赤面してしまうのを隠すため、小十郎は明後日の方向に顔を向けた。

「と、とにかく、あんたが迷惑じゃなければ、面倒を見させてくれ。頼む」

不自然な仕草をこまかすように早口でそう言うと、

「わかった。旦那がそこまで言うってくれるんなら、好意に甘えらしようかね。……それにしても、旦那は真面目なお人だねえ」

朝顔は背を丸めてくっくっくっ、と笑い出しながら、ようやく了解してくれた。

……どうやら、からかわれたらしい。

次の日から約束通り、小十郎は毎日朝顔のところへ来るようになった。そして半刻ほど、他愛のない雑談をしていくだけなのだが、やはり一人でいるよりは楽しくて、動けずくさくさした気分が上向いてくる。それ故に朝顔はいつしか、小十郎の訪問を心待ちにするようになっていた。

「邪魔するぞ、朝顔」

その日も常と同じく、小十郎がやってきた。風通しに開けた障子から顔を出し、頭を軽く下げてから中に入る。帯に刺繍をしていた朝顔は針を止めて顔を上げた。

「ああ、いらっしやい、右目の旦那」

「具合はどうだ」

腰をおろして開口一番そういうものだから、朝顔はつい笑ってしまふ。毎日同じ事を尋ねられても、そうそう違う答えは出来ない。

「昨日の今日で、そうかわりゃしないよ、旦那。まあ大分楽にはなってきたね」

「そうか、そうだな。今、義直に杖を作らせてる。後少しで出来上がるはずだから、それがあれば自分で出歩けるようになるだろう」

「そりゃありがたいね。そろそろ寝たきりにも飽きちまったよ」

そう言いながら、朝顔は止めていた針を取り、縫い物を再開した。すつつつ、と迷いなく進む針に視線を注ぎ、小十郎がふつと表情を和らげる。

「しかしいつ見ても、あんたのは見事な細工だな。素人には見えねえが、お針子でもやってたのか？」

「ああ、やってた事もあるけど、元々針仕事が好きなんだよ。縫ってる間は頭がからっぽになって、心が落ち着くんだけ」

「ほお……そういうもんか」

そうだよ、と一つ頷く。縫い物は昔からの趣味で、暇さえあれば

黙々と、誰に頼まれたわけでもなくやっていた。集中していれば時間も忘れて熱中してしまうほどだから、今のように身動き叶わない時の暇つぶしにはちょうどいい。

「ここに来る前に、針子をやってたのか？」

「いいや。奥州の前は、三河で路銀稼ぎに、茶屋の手伝いをしてたよ。団子作りなんか教えてもらったりして、なかなか楽しかったね」

刺し終わりに糸を歯で噛みきり、針山に針を戻す。刺繍の出来を確認した後、朝顔は、刺繍した服を入れた螺鈿細工らでんさいこうの箱の中にそれを重ね入れて、うーんと伸びをした。

「こいつはこれで仕舞い。今日の分は、もうなくなっちゃったよ」

これで、小十郎が帰った後の無聊を慰めるものが無くなってしまう。浜さんにもっと無いか聞いてみようかねえ、と呟いたところで、小十郎がそれなら、と軽く身を乗り出す。

「少しばかり考えてみたんだが……あなた、ちょっと外に出てみねえか？」

「え？」

外に、と言われて心が動いたが、しかし朝顔の足はいまだ完治せず、自由に出歩けはしない。

「そりゃあ、閉じこもりつきりだし、外の空気も吸いたいけど」

「あなたの怪我の具合も良好なようだし、何だったら俺が里を案内してやるうと思っつてな。何しろ、あなたはまだ奥州をほとんど見ちゃいねえし、少しばかり気分転換にもなるだろっ？」

「右目の旦那が、案内してくれるっつのかい？」

朝顔はおやまあ、と思わず声を漏らした。このお武家様は、ずいぶんと碎けたお方だ。身分を思えば、朝顔の事などうっちゃっておいても構わないというのに、自ら案内役まで買ってでるとは。

(これが伊達の気風なのかね)

この間来ていた部下四人も、「筆頭」と「片倉様」をたいそう尊敬していたが、お二方と一緒に酒盛りをした、相撲を取っただけの、他の藩ではあまり無いような親密ぶりを語っていた。あれが本当な

ら、左馬助が言っていたように、伊達は身分の上下にさほど拘らない質なのだろう。

「派手な見所があるわけじゃねえから、無理にとはいわねえが」

そういつて苦笑する小十郎に、朝顔はいや嬉しいよ、と笑って頷いた。

「それならぜひ頼むよ、右目の旦那。庭の木の芽を数えるのにも飽きちまったからね」

こうと決めれば、小十郎の手配は素早い。ちよつと待ってる、と席を外してしばし後、なにやら気配がすると思つたら、庭先に馬をひいた文七郎が現れた。

「おや、文七じゃないか」

「どうも、姐さん。お元氣そうで」

へへ、と笑う文七郎。そこへ小十郎が戻ってきて、

「朝顔、あんたは馬に乗ってくれ。俺が手綱を引く。外は寒いから、これをまず着て……さて、御免」

朝顔に綿入れを着せてしつかり防寒させると、そのままひよいと両腕に抱き上げた。

「あつ、旦那、重くないかい」

不意の事に驚き、思わず声を上げる朝顔。最近すっかり食っちゃ寝だから、よけいな肉がついて重さが増してるんじゃないかなるか、と危惧したが、小十郎はどこ吹く風だ。

「牛に比べりゃ軽いもんだ、気にするな」

「……ちよいと、牛と女を比べるのはどうかと思うよ、旦那。だいたい、牛を持ち上げた事なんてあるのかい？」

いくらなんでも、自分と比較するのに牛は極端に重すぎる。妙なたとえに苦笑すると、なくもねえ、と言いながら小十郎は庭に降りた。砂利を踏みしめながら、

「この間、溝にはまった牛を持ち上げたな」

「ええ？」

冗談だろう、と思ったが小十郎の顔は真面目そのもので、嘘の様子は無い。しかし言われてみれば、自分の身体をすっかり支える小十郎の腕は、服越しても分かるほど太くがっちりしていて、牛の頭二頭くらいは簡単に持ち上げてしまいそうだ。納得して、朝顔は感嘆の声を漏らした。

「へええ、そうかい、そりやすごい。右目の旦那は金太郎みたいだねえ」

「金太郎？」

「だって、そんな大層な力持ちなんだ。きつとちいちゃい頃から、お山で熊と相撲の稽古をして鍛えたんだらう？」

「ぶっ」

朝顔のたとえに、脇で聞いていた文七郎が吹き出した。金太郎と小十郎の取り合わせが余程おかしかったのか、口を押さえながら、ぶるぶる笑いを堪えている。

「……何を笑ってやがる」

小十郎は朝顔を鞍の上におろしながら、文七郎を軽くにらみつけた。途端、文七郎はすいやせん！ と慌てて背筋を伸ばし、

「ど、どうぞ、片倉様、お気をつけて」

さつと手綱を差し出す。特別怒ったわけでもない小十郎は、それを受け取って鷹揚に頷き、

「そこいらを少し回ってくる。たぶん帰ってくる頃には身体が冷えるだろうから、葛湯の用意を浜殿に伝えておけ」

「はい！」

「よし。……それじゃあ行くか、朝顔」

そういつて静かに手綱を引き、先導し始めたのだった。

まだ春には早い時分、風は冷たい。しかし久しぶりに全身で外の空気を感じ、朝顔は生き返る心地だった。

「ああ、いい気分だ。晴れてて気持ちがいいねえ」
すう、と胸に思い切り息を吸い込み、吐き出す。

空は透き通るほどに青く、高い。頬にとげとげと触れる寒風はしかし、土やほのかに緑の匂いを含んで、ことさらほのぼのとした気分になる。ぼくりぼくりと静かに歩を進める馬もおとなしいもので、よく手入れされた鞍も座り心地が良く、良い外歩き日よりだ。

「ああ、そうだな。だが寒かったり、怪我が痛んだりしたら、すぐ言うんだぞ」

手綱をひいて歩く小十郎に注意され、朝顔は笑って軽く手を振った。

「わかってるって。右目の旦那は心配性だねえ」

そして横座りになった馬の上からゆっくりと、伊達の里を見渡す。屋敷の門を出ると目の前には、広大な田んぼが広がる。休耕の時期で細い雑草が生えた田のぬかるみには薄く氷が張り、どこかうら寂しい雰囲気か漂っていた。しかし整然と並ぶ水田地帯に、朝顔は感嘆のため息をもらした。

「ここいらは米どころと聞いてはいたけど、こんなに広い田を整えてるなんて、伊達の殿様は大したお方だね。ここまでするのは、たいそう手間もかかったろう」

伊達の領地は全国でも有数の米の産地だ。それは国主たる伊達政宗が率先して田と川の整備を行い、それを国外へ売る事で領地を豊かにしている故、と朝顔も耳にしている。

「ああ。政宗様はまだお若いが、民を心から思い、国にとって何が良いを常に模索しておられる。……素晴らしいお方だ」

小十郎の答えも熱がこもり、いかに主を大事に思っているかが、

声からも、真摯な表情からも伝わってくる。

（たぶん、伊達の殿様が立派なのは、このお人のおかげでもあるんだらうね）

それを馬上から見下ろし、朝顔はふつと笑みを浮かべた。年若い国主ではこの乱世に、思い悩む事はさぞ多かるう。それを支えるのはこの実直で、いかにも頭の切れそうな側近なのではないか。

（もちろん、文七達も縁の下の力持ちなんだからうけどさ）

下克上と声高に叫ばれ、無能な国主が家臣に追い落とされる事も珍しくない昨今、これほどの人物が一家臣に収まっているということは、それだけ伊達政宗という人間に魅力があるのだらう。そんな事を思いながら再び風景に顔を戻し、晴れ晴れとした心地で言う。

「ここは良い国だね、右目の旦那。こうも居心地良いと、去りがたくなっちまうよ」

「！」

と、小十郎の歩が一瞬乱れた。軽く目を瞠ってこちらを見たので「？」何事かと視線を返すと、すぐにそらされてしまう。

「……まだ万全じゃねえんだ、そう急いで出て行く事もねえだらう」
声の不意に低くなって、なぜか深刻さを増す。何か気に障る事を言っただらうか、と首を傾げながら、朝顔は言葉を継いだ。

「そりゃ今は自分で動けないけどね、怪我が治ったらの話だよ。このまま、いつまでもご厄介になってるわけにもいかないだらう」

「越後に行きたいからか。あつちはまだ雪深い。行き来にはあと一月二月はかかるんじゃないか」

「まあ、それは何とでもなるさ。急ぐわけじゃあないが、あまり一所にとどまっているわけにもいかないんでね」

何気なく言った途端、小十郎が顔をあげ、訝しげにしかめた。

「何だ、一所に落ち着けない訳でもあるのか？」

（おっと、口が滑った）

まずいところを突っ込まれた、と内心怯んだが、朝顔は表情を変えることなく、話を続けた。

「そうじゃないよ。ただ、あたしは旅暮らしのほうに合ってるって事さ。一つとところでのんびり過ごすより、明日は何があるか分からないような気ままな生き方が好きなんだよ」

「……そうか」

咄嗟の説明に納得したのか、小十郎はまた視線を前に戻した。それなら仕方ねえが、と呟き、

「とりあえず気を遣って、治ってもいねえのに慌てて出て行く必要はねえ。旅がそんなに好きならこの際、身体を労ってやれ」

真面目な口調で静かに言う。その言葉一つ一つに真心を感じ、朝顔はふ、と心和んだ。頬を緩め、

「右目の旦那は優しいお人だね。怖い噂ばかり聞いてたけど、当てにならないもんだ」

からかい含みに言うのと、小十郎はさつと顔を赤らめながら、同時にしかめ面になった。

「これくらい普通だろう。怖い噂ってのは何だ」

「そうだね、外で聞いた話じゃ、鬼の小十郎、逆らえばとって食われる、実は奥州の影の実権を握る黒幕で、暗愚な主を操って天下統一をもくろんでるとかさ」

「……どこのどいつだ、そんな事を言いやがったのは」

途端、小十郎の機嫌は真つ逆様に落ち、声に怒りがじわりと滲む。それに怯えた馬がびくびく、と耳をそばだて、身体を震わせた。これはまずい、冗談なのに通じないようだ。場を和ませようと、朝顔はおお怖い、とわざとらしく自分の身体を両腕で抱きしめ、

「又聞きの又聞き、井戸端会議の暇つぶしみたいな話さ。そう目くじらたてるもんじゃないよ、右目の旦那」

そういったが、小十郎は渋面のまま首をふった。

「俺のことはどう言おうがかまわねえが、政宗様を侮辱するような暴言は捨てておけねえのさ」

(おやま。真つ先に怒るのは、殿様の事かい)

てつきり鬼だの黒幕だの、好き勝手に言われたのが気に入くない

のかと思いきや、これは聞きしに勝る忠臣ぶりだ。

「……旦那みたいなお人に慕われてるなら、伊達の殿様は本当に立派なお方なんだろうね。出来る事なら一目、遠くからでもいいから拝見してみたいもんだ」

しみじみ、感心しながらそう言つと、小十郎は眉を上げ、小さく笑つた。

「なら、政宗様に会つてみるか？」

「……ええ？」

自分の身体の一部のように馴染んだ手中の重み、地面に向けて延びるその先端までを意識しながら、政宗はゆっくりと刀を正眼に構えた。

目はうつすら雪が残る境内に向けられているが、見ているものはそれではない。

息を吸う、吐く、風が袖を揺らし髪を撫でる、足の指に力がこもり草履の下にある石畳の固さを感じる、周囲の全てを染みいるほどその身を感じながら、竜の隻眼が見据えるのは、炎の赤を身にまとった青年武将の残像。

（真田、幸村）

身体の奥から熱がわき起こり始めるのを感じて、政宗は口を好戦的な笑いに歪めた。その上体をひねり、右腕を後ろにひいて顔の脇に刀を持ってくる独特の構えをとり、引いた右足のかわりに折った左膝にぐつと力がこもる。

（今のあなたは、オレをHeat upさせられるのか）

幻に問う政宗の頭にあるのは、小十郎から報告を受けた武田の現状についてだった。

先の戦で、上杉と共に凶ったような形で豊臣を討った武田の総大将、武田信玄は今、病に伏せているという。偉大なる主を失いかけている甲斐を今支えているのはむろん、信玄の意志を受け継いだ真田幸村だ。

（あなたの事だ、どうせ武田のおっさんが倒れて右往左往してるんだろう）

生まれた時より国を背負ってたたねばならなかった政宗にしてみれば、真田幸村は『幸せな人間』だった。

ただひたすら信玄を尊び、命じられるまま突進していくだけでいい、重責を負わぬ気軽な身分。

戦いの技量は負けず劣らず、まっすぐに向かってくる熱き魂は、普段感情を抑えがちな政宗をも熱くたぎらせるほどだが、背負うものの軽重がもたらす覚悟の差はいかんともしがたく、政宗はいつもそれが齒がゆくもあつた。立ち位置が異なる相手は、宿敵とは呼べない。

（だが、これであんたもオレと同等だ）

ぐ、と足に力をこめ、政宗は竜の目で睨みつける。

（来い、真田幸村。あんたがこねえなら、オレが行く）

何度もぶつかり合いながら未だつかない決着に、心がくすぶる。

ぎ、と齒を食いしぼり、政宗が今にも赤い残像に切りかかろうとした時。

「っ？」

研ぎ澄まされた感覚に蹄の音が引つかかり、緊張の糸がいきなり断ち切られた。馬がこちらにまっすぐ、向かってきている。

「……ああん？」

誰が来るのか、と刀を下ろし振り返ると、畑や田の間を長く伸びる道に人馬の姿が見えた。目をこらせば、手綱を引く男と、馬上の女が視界に映る。

（ありやあ、小十郎と……例の女か？）

小十郎自ら馬を引くような女など、（姉を除けば）他にあるまい。興味を引かれた政宗は身体ごと向き直り、彼らが緩い階段をのぼって自身の前にやってくるまで待った。

「政宗さま。鍛錬のさなか、ご無礼致します」

やってきた小十郎は常と変わらず、堅苦しい。政宗は浅く頷き、

「よお小十郎。何してるんだ、そっちは？」

「はっ。これなるは、先日ご報告いたしました朝顔にございます。

政宗様にぜひ一言ご挨拶を申し上げたいと言つので、連れて参りました」

「Hunn？」

それは殊勝なことだ、と女へ視線を向ける。綿入れをまとった女

は政宗と目が合うと、淑やかに視線を下げた。そして「旦那、下ろしておくれ」と小さく小十郎に声をかける。それが、身分が上の者に対して頭上から語りかけるのを嫌っての事と察し、政宗は手で制止する。

「ああ、いい。あんた足を怪我してるんだろ。オレは気にしねえから、無理するな」

「ですが……」

小十郎の肩を借りようと手を乗せた朝顔は困り顔になった。しかし政宗がじろつと見据えると、逆らっても無駄と悟ったか苦笑して、前のめりになつた身体を戻す。そしてあらためて、頭を下げた。

「ご挨拶が遅れてしまい、申し訳ありません。また上より、失礼致します。私は朝顔と申します。このたびは私などに滞在のご許可ばかりか、過分なおもてなしを頂き、大変ありがたく存じます」

「！」

朝顔の口上に、小十郎が驚いた様子で彼女を見上げる。

「オレは何もしちゃいねえ。礼なら小十郎に言うんだな。あんたの世話は、そいつに任せてある」

政宗はといえば、落ち着いた女らしい所作の朝顔に目を細めた。分厚い綿入れを着ているので身体の線はわからないが、少なくとも顔は美形だ。柔らかそうな頬にぼつりとした色気のある唇、高貴の眼差しを避けて視線が下がっているが、長いまつげが影を落とす瞳は伏し目だとより艶めかしく、つい顎を持ち上げてのぞき込んでみたくなる。

「Ha、I see。あんたは確かに、小十郎のTypeなんだろうな」

政宗はもつと線の細い、守ってやりたくなるような女の方が好みだが、朝顔のように、全身から馥郁ふいくと色気を漂わせるようなのは、確かに小十郎が好みそうだ。

「なっ……ま、政宗様、戯れ言を仰いますな！」

政宗の呟きを聞きつけ、珍しく小十郎が慌てだし、一方朝顔は首

を傾げて髪をさらりと肩に流す。

「たい、たいぷ？ ってなんだい、旦那。こつちの方言かい？」

こつそりと小十郎に語りかける言葉はぎつくばらんだ。先ほどの口上で小十郎が驚いたのは、常と異なる言葉遣いだっただからだろうか。ねえ旦那、と小十郎の肩をつつく朝顔に、小十郎はますます言葉を窮した。

「い、いや、それは、その……」

（おーおー、赤くなってやがる）

守り役の狼狽ぶりに政宗は思わずニヤニヤしてしまった。

幼い頃から面倒を見てもらい、今も忠実な家臣として常にそば近くにいる小十郎には、政宗も頭が上がらないところがある。その小十郎がまさか女一人のことで、これほど惑うとは……こんな面白い見物はなかなか無い。

「……ま、そいつは後で小十郎から聞き出すんだな」

地面に指した鞘を手に取り刀をおさめ、政宗は笑い含みに言う。

「小十郎の客なら、あんたはオレの客でもある。歓迎するから、ゆつくり療養していけ。何かあれば小十郎を使ってくれてかまわねえ。しばらく、あんたの専属にしてやる」

「政宗様！」

何を言い出すか、と小十郎が目をむいて声を張り上げた、それとほぼ同時に。

「……ひつとーうー！！」

遠くから呼びかけの音が届く。ぱつと目を向けると、ばたばたと砂埃をあげて、義直がこちらへ駆けてきている。前方に固めた髪を上下に揺らして走ってきた義直は、政宗と小十郎の前に膝をつき、

「筆頭、たった今、急ぎの文が届きましたっ」

両手で一通の書状を差し出す。刀で手がふさがっている政宗は小十郎に目で促した。それに応えて義直の手から書を受け取った小十郎は、裏にひっくり返して差出人の名を口にする。

「これは……政宗様、徳川家康からの文のようです」

「徳川だと？」

三河の武将がわざわざ何の用だ、とわずかに視線を上向かせた政宗は、一瞬気がそれた。小十郎の後ろ、馬上の朝顔が目に入ったのだが、その表情にはなぜか驚きの色が浮かび、

『とくがわいえやす？』

その唇が音もなく、言葉を紡いだのを見たのである。

(……………?)

瞬きをした次の瞬間には、朝顔は顔色を拭い、何事も無かったかのように目を伏せたが、

(……………何かあるのか。この女)

政宗の中で疑念の墨がぼつりと落ちて、じわりと広がり始めた。

書状が届いて二日後、伊達屋敷は新たな客人を迎え、緊張の空気に包まれていた。

やってきたのは、徳川家康その人。かつては織田、豊臣の配下となり忍耐を強いられ続けた若き少年であったが、今政宗の前に座したその姿は、見違えるほど立派な青年武将であった。

「久しいな、独眼竜！ 会見の申し出を受けてくれて、感謝するぞ」
はきはきと語る家康は背が伸び、がっしりと鍛えた体つきに変わり、兜を脱いで槍も手にしていない。

「ああ、そうだな。まさか本人がわざわざ出向いてくるとは思わなかったぜ」

上座に腰を下ろした政宗は常と変わらぬ口調で答えながら、目は絶えず家康の変化を読みとろうと見据えている。

（いったい、どんな心境の変化があったんだ？）

外見の成長もさることながら、迷いのない眼差しは、以前戦場でまみえた時よりも強く、揺るぎがない。他国の武将のもとへ大將がこのこの一人でやってくるといっても、以前の家康には無い剛胆さが見える。

もつとも、脇に控える小十郎から聞いた話では、家康は腹心、本多忠勝の背に乗って奥州に来たという。全身鎧に包み込み、その圧倒的な力で戦国最強の名をほしのままにする本多が居れば、一軍率いずとも臆することなし、ということなのかもしれないが。

（まあ良い。どんな腹積もりか、聞いてみようじゃねえか）

「さっそく本題に入らせてもらおうが……アンタ、同盟を結びたいって？」

政宗が水を向けると、家康はしっかりと頷く。

「ああ。奥州を束ねる独眼竜の協力を得る事が出来れば、こんなに心強い事はない」

「オレを同盟相手に選んだワケを聞こうか」

これまで親しく行き来した事はなく、むしろ戦場で刃を合わせるだけの相手なのに何故だ。その疑問を発すると、家康はニツ、と精悍な笑みで答える。

「独眼竜、お前は以前言っていたらう。自分が目指すのは、民の一人一人が笑って暮らせる国を作る事だ」と

「ああ……」

何かの戦の折りに家康から信念を問われ、そう答えた覚えがある。「その考え、ワシも同じだ」

家康はぐつと拳を握りしめ、力強く輝く目でまっすぐ政宗を見返す。

「ワシは、長く続く戦の日々をもう終わりにしたい。明日を願う者達の明日が奪われ、絆を失い悲しむのは、もうやめにしたいんだ」「フン」

やめにしたいと思うだけで戦をとめられるなら、誰も苦勞はしない。今更何の世迷い事かと鼻を鳴らすと、家康は身を乗り出して、言葉により力を込める。

「独眼竜、お前にもあるだろう。何かを大切に思い、守りたいという絆が」

その眼差しがちらり、と控えの小十郎を見る。それに気づいた小十郎は一瞬、家康と視線を交わす。

「民を思い、仲間を思い、国を思う。それは誰しも持っている絆だ。お互いを思い合う大切な絆を、他の者達とも結ぶ事が出来れば、天下太平の世は夢ではなくなる。もう誰も苦しまなくていい、そんな世が作れるはずだ」

家康は政宗に視線を戻し、清々しく思いを語る。

「独眼竜、そのためにワシはお前に会いに来たんだ。願う未来は同じはず。ならば共に手を取り合い、皆のために明日を勝ち取るう」

「……………」

家康の熱弁に政宗は唇を真一文字に結んだ。そして一つ息を吐き

出し、脇息に肘をおくと、低い声で語り始める。

「黙って聞いてりゃ、まるで夢みてえな事を言ってるが、絆つてのはそんなに大事なもんなのか」

「それはワシが語らずとも、お前自身が知っているはず……」

「ならあんたはなぜ、豊臣を抜けた？」

「！」

ハッ、と息をのむ音がここまで聞こえてくる。目を瞠る家康に、政宗はさらに言葉を重ねた。

「それほど絆が大事だと言うなら、あんたは豊臣にいる間も当然、その周囲の奴らと絆を結んで和したはずだ。だが、現実はどうだ？

あんたは豊臣が崩壊した途端、あっさり見切りをつけ、天下取りに名をあげた。我こそが天下に相応しいとばかりにな」

「……………」

「自分達だけじゃなく、他の連中とも絆を結べば、天下太平の世になる？ That's ridiculous! テメエで出来もしねえことを他人に説いたところで、てんで説得力がねえぜ」

「政宗様！」

語気鋭く言い放った政宗は、その勢いで立ち上がった。そして小十郎の諫めを聞かずに愛刀の鞘を払い、空気を裂いて、家康の眼前に切っ先を突きつける。

「おきれいな建前でどうにか出来るほど、世の中は甘くねえ。あんたがオレと手を組みたいと本気で思ってるのなら、まず口先だけじゃねえ、あんたの力を見せてみる。話はそれからだ」

「……………独眼竜」

眼に触れそうなほど間近に迫った刃に目を細め、家康は小さく咳いた。その声は先より弱く、悔いがにじむ。

「……………お前の言うとおりだ、独眼竜。力のみ尊び、戦をもって全てを平らげようとする秀吉公を、ワシは止められなかった。もっと早く心を決め、秀吉公と向き合っていれば……………公にも違う未来があったかもしれない」

「は、たいそうな自信だな。あんたにあのBoss猿を改心させる力があつたつてのか？」

「独眼竜、秀吉公は決して、魔王信長のように心なき人ではなかった。むしろ人としての心があるからこそ、それを堅く鎧い、守ろうとしていたのではないかとワシは思っている。秀吉公を止められなかったのは、ワシの罪だ。ワシの悔いだ」

続く言葉は、力強さを取り戻す。その目に刃を写しながら、家康は政宗を見上げた。

「だから今度こそ、ワシは迷わない。諦めない。命がつなく明日を信じて、皆に呼びかける事を止めない。絆の力をもって天下を統一する決意を^{ゆるが}せはしない」

そこで不意に家康が動いた。正座の足を素早く立ち上げて後ろにとびしさり、

「！」

咄嗟のことに刀を構えた政宗と小十郎の前で、再度畳を蹴って障子を開け放ち、縁側に飛び出す。

「徳川家康！」

「お前とむやみに事を構えるつもりはない、今日のところはこれで失礼する！」

庭に飛び出した家康を追って小十郎がいち早く続いたが、しかし不意に突風と耳を破るような爆音が鳴り響き、目の前に黒い固まり……本多忠勝が飛来する。急降下してきた本多が巻き起こす風に庭木が激しく揺さぶられる。風の壁に阻まれ、たたらを踏む政宗達の前で、家康は忠勝の背に飛び乗り、

「ワシは一度や二度で諦めたりはしない。いずれまた会おう、独眼竜！」

快活に言い放つと、そのまま空のかなたへと、飛んでいってしまった。

「……ちつ。相変わらずCrazyな連中だ」

本多達の消えた方角を見上げ舌打ちし、政宗は刀を鞘に納めた。

庭から縁側に戻る小十郎を見、どう思う、と問いかける。

小十郎もまた刀をしまいながら、

「徳川は元豊臣の家臣、加藤清正や福島正則らを引き込み、日々勢力を拡大している模様。今はまだ周囲の様子をうかがって身を潜めているようですが、いずれ油断ならぬ相手となりましょう」

「ふん……手を結んだ方がいいと思うか？」

庭を見据えながら問うと、竜の右目は今はまだはかりかねます、と首を横に振った。

「今少し、徳川とその周辺に関する情報を集めて参りましょう。あのような理想を語るにつけ、徳川は少々危うい。そもそも徳川はただでさえ、武田と上杉進軍の折りに一兵も動かさず、豊臣の裏切り者と呼ばれております。下手に手を結べば、奥州もまた卑怯者のそしりを受けかねません。ここはこの小十郎にお任せ下さい」

そうか、と頷きながらふと思い出した事があり、政宗は小十郎へ顔を向けた。

「小十郎、そっぴや一つ確認したいんだが」

「は、何でございましょう」

「あの女、朝顔。あいつあ徳川と何か繋がりがあるのか」

「……は？」

思いがけない問いだったのか、小十郎は間の抜けた声を漏らした。

「どうなんだ、あの女の素性は聞いているのか」

「……いえ、そう詳しくは聞いておりませんが……政宗さま、何故そのような事をお聞きになられるのです」

小十郎にしては珍しい。この用心深い男は、常と異なる事態にあたってはそれが政宗の害にならぬよう、少し過剰とも言えるほどに反応するというのに、あの女に関してはそれが無かったらしい。

「いや……」

もしか、政宗が考える以上に、小十郎は朝顔に心を寄せているのだろうか。そう思うと政宗は珍しく言葉が詰まった。しかし小十郎の次を促す眼差しに、ただな、と渋々口を開く。

「……あの女、徳川家康の文を見た時、ほんの一瞬だが、驚いた顔を見せてたんでな。ただの旅人なら徳川の名を聞いただけで、そう過敏に反応することもねえだろうと……まあ、それだけなんだが」

「それは……気づきませんでした」

小十郎は背を向けていたので、あのとときの朝顔の反応を知らずとも無理はない。しばし沈黙を挟んだ後、

「……それは私の手落ちでございました。朝顔に関しても早急に調査を致しましょう。では御前、失礼を」

事務的な口調で言うと、一礼し、政宗の前から辞した。

背を向け廊下を歩いていく小十郎の背中を見送った政宗は、雲が低く広がる空を見上げて目を細め、

「……ちっ。嫌な天気になりそうだ」

忌々しげにそう呟いたのだった。

雲が少しずつ空を覆い始め、遠くから湿った匂いが風に乗ってやってくる。

(遠からず、雨になりそうだね)

その光景を縁側に座して見上げ、朝顔は目を細めた。冷えすぎて雪にならなければいいが、と足をさする。手厚い看護のおかげで足の怪我は順調に回復しており、こうして、自分で床から這い出して縁側に移動できるようにもなってきた。

しかし少し冷えると足がしびれて、じくじくとした痛みに悩まされる。それは腹の傷も同じで、自分の手でこっそり手当をしているものだから治りが遅く、今はどちらかといえばこちらのほうが悩みの種だった。

(全く、嫌な痕を残してくれたもんだよ)

わき腹をさすりながら忌々しげに思ったとき、朝顔の耳が足音を聞きつけた。

(ああ、右目の旦那が来る)

もうすっかり聞き慣れたそれに嬉しさ半分、しかし気がかりも半分の心地になる。

会えるのは嬉しい。無沙汰を紛らわせてくれるし、小十郎が何かと気を遣ってくれるのは有り難い。

しかし、二日前、伊達政宗のもとに届いた文を思い、この平和な地に何か事が起こるのでは、と心が沈む。

(何事もなけりゃいいんだけど)

そう思いながら、朝顔は訪いおもひを待った。程なくして廊下の先に小十郎の姿が現れ、

「……朝顔？ 何をしてるんだ」

驚きを声に滲ませながら、そばまでやってきた。ああ旦那、と初めて気づいたように顔をあげ、朝顔は縁から垂らした足をふらふら

振つてみせた。

「見ての通りさ。寝床から庭を眺めるのも飽きちまつたんでね」

「まさか、自分で動いたのか。呼べば侍女に手伝わせるものを」

朝顔一人、しかも布団がめくられたままになっているのを見て取り、小十郎の眉間にしわが寄る。まるで子を案じる母のようだと微笑しながら、朝顔は肩をすくめた。

「いつまでも人の手を借りてたら、身体がなまけちまうよ。おかげさまで具合もいいんだ、このくらい平気だよ、右目の旦那」

「……ならいいが」

節度を守った距離を置いて、小十郎も廊下に座る。端然とした風姿はいつ見ても清々しく、朝顔は心華やく思いがした。

（良い男つてのは、女の良薬だねえ）

義理堅く、細々（こまごま）と優しい男に尽くされるといふのは、良い気分がするものだ。つい口元が緩めつつ、そういえば、と朝顔は疑問を發した。

「さつき、なんだか妙な音が聞こえたけど、何かあったのかい？」

「妙な音？」

「ああ。花火だか、爆弾だか、とにかく何か爆発するみたいないな……
凄い音だったから、音女が驚いて茶をこぼしちゃったよ」

側についていた侍女の名を上げて答えを請うと、小十郎の顔にさつと緊張の色がよぎった。間を置いて、

「ああ……ついさつき、徳川家康が来ていてな。帰り際に本多忠勝が飛び込んできたから、あんた達が聞いた音つてのはそれだろう」

徳川家康。聞き知った名にやはり、と胸騒ぐ思いがしたが、朝顔は努めて平静を保った。へえ、と物珍しげに目を丸くする。

「それはまた、お偉い方がいらしてたんだねえ。それに本多忠勝といえは、戦国最強と有名なお人じゃないか。ねえ旦那、本多忠勝つてやっぱり、通り名のように強いのかい？」

「そうだな、直接刃を交えた事はないが、あの強さは桁外れだ。あれに一对一で渡り合える者は、そう多くはないだろう」

「伊達の殿様も大層お強いと聞いてるけど」

「むろん、政宗様が負けるはずがない」

「迷いもなくはつきり、断言する。本多の評判は多く耳にしていたから、こりゃ盲信な、と朝顔はひそかに思ったが、小十郎は言葉を継いだ。」

「しかし、そう簡単に勝てる相手でない事は確かだ。ましてや徳川家康も以前とは見違えて、より力を増したようだからな」

「へえ。そついや、徳川の殿様は最近急に逞しくなっていたねえ。あんまり格好良いもんだから、娘達がきゃあきゃあ騒いでいたもんだよ」

「以前見た光景を思い出しながら言うと、小十郎が身じろぎ、目を細めた。」

「あんた、徳川に会った事があるのか？」

「ん？ いいや、無いよ」

朝顔はぴりつと背中が痺れが走るのを感じた。これは気をつけねばならない話題だ。間を取るために足をさすりさすり、朝顔は言う。

「せいぜい、遠くから見かけたくらいだね。ほら、ここに来る前に三河にいたと言っただろう？」

「ああ……」

「右目の旦那も知ってるんだらうけど、徳川の殿様は気さくな性格らしいからさ。時折城下に姿を現しては、その辺の団子屋でみたらし食べたりして、皆と気安く語り合ったりしてたよ」

「なら、あんたの居た茶屋にも来たんじゃないのか。確か団子も作ってたんだつたな」

まさか、あの男と顔を合わせるような下手を打つつもりはない。心中呟きながら、朝顔は首を振って笑った。

「街のはずれにあるような小さい店だったからさ、殿様が足を運ぶようなものじゃないさね」

「本当か？ 言葉を交わした事もないのか」

「そりゃそうだろ。いくら気安いお方でも、お武家様にほいほい近

づくほど、厚かましい女じゃあないよ、あたしは。

……にしても、旦那」

「何だ」

「徳川の殿様の話になると、随分絡んでくるねえ。何か聞きたい事でもあるのかい？ 今言った通り、あたしは何にも知りやしないよ」

話題を変えるためにも軽く探りを入れてみると、小十郎はそういうわけじゃねえ、と否定したが、その目がほんのわずか、動いた。

（おや。含むところがありそうだね）

普通なら見落としてしまいそうなその動きに気づき、朝顔はさらに気を引き締めた。ここは一つ、探りを入れておくべきだ。小十郎が自分に対して何か疑念を抱いているのなら、早々に暴いておいた方が、お互いの為になる。

「なら、どういうつもりなんだい。世間話にしちゃ、ちよいとしつこかった気がするけど」

そう思った朝顔は、廊下に手をつき、小十郎の方へ身を乗り出した。不意に距離を詰められたせいか、小十郎がびくつとして、心持ち上体をそらす。

「……どういうつもりも何も、単なる雑談のつもりだが。なら逆に聞く、あんたは探られると痛い腹でもあるのか」

身を引きつつ、その声は平静だ。そして真理をついてもいたが、易々と首肯するわけにはいかない。

「そういうわけじゃあないさ。ただ旦那が、あたしが徳川の殿様と関わりを持つてるのか、なんて言うから、どうしてもそんな事考えたのかと思ってるね」

「それは……」

小十郎は口ごもった。何かを考える目つきを床に向けて沈黙した後、首を振る。

「いや……ただ、俺はあんたの事を何も知らねえ。だから、気になつて仕方がねえってだけだ」

「……へえ？」

朝顔は思わずどきりとして、低い声で相づちを打った。気になつて仕方ないなどと、まるで告白のようではないか。

「……！ いや違う、今のはおかしな意味はねえ、変な風にとつてくれるなよ」

朝顔の相づちで意味深な言葉になっていると気づいたのか、小十郎が突然慌てて否定する。それまで落ち着いていたのに、言葉一つに慌てふためく態度の差は何とも滑稽で、警戒に張りつめた朝顔の心がつい緩んだ。

（あら、かわいいお人だねえ）

笑つてしまいそうになるのを堪え、朝顔はおやそうかい、と呟いた。そして、腕と無事な足を張つてずりつと移動し、身をしながら小十郎のすぐ目の前に近づく。

「右目の旦那はそんなに、あたしが気になつて仕方ないのかい？」

そして、しっとり湿った声を小十郎の顔に吹きかける。うっ、と呻いて相手はさらにのけぞつた。

「よ、よせ、近づくな」

その頬がカツと赤く染まり、朝顔の肩を掴んで後ろに押し戻そうとする。だが朝顔はその手に触れ、指先から手首にかけてつとなぞり、着物の袖の中にまで手を滑り入れた。

「っ……！」

ぞくぞくと震えを走らせ、小十郎が眉根を寄せて息を飲んだ。

（……やだね、そんな顔しないでおくれよ）

それを見た朝顔は、身体の熱がじわりと上がるのを感じた。少しからかうだけのつもりだったのに、つい、その気になつてきてしまう。このまま先に進めたらどうなるだろう、という期待と、それはやっではいけない事だと諫めの言葉を胸に潜めながら、朝顔はさらに身を寄せた。がっしりした太い腕の、緊張に張つた筋肉をさすりながら、

「ねえ……右目の旦那、どうなのさ……？」

紅潮する小十郎の顔をのぞき込み、その頬に走る傷跡に、唇が触

れるか触れないかの近さで甘く囁いた、その時。

(……誰か来る)

その耳が遠くの足音をとらえた。紛れもなくこちらへ向かってい
るそれにすうつと気持ち冷め、朝顔はちえと舌打ちしたい気分で、
身を引いた。

「……なあんてね、驚いたかい？ 旦那」

するりと手を離し、先と同じ位置に戻した朝顔は、打って変
わって明るい笑みを浮かべてみせた。

「う……ああ？」

小十郎は頬に血を上らせたまま、硬直している。その様にとつと
う我慢できなくて、朝顔はつい、ぷーっと吹き出してしまった。

「旦那みたいな男に気になって仕方ないなんて言われたら、たいて
いの女は勘違いしちまうじゃないか。頭からバリバリ食われたくな
かったら、言葉にや気をつけなきゃだめだよ」

言いながら流し目をくれると、小十郎はハツとして、

「あ、あまりふざけてくれるな、朝顔。こういう冗談は苦手だ」

ばつが悪そうに視線を避けて呻く。そりゃ悪かったね、とくすく
す笑う朝顔。そこへ、

「……片倉様！ こちらにおいででしたかつ」

ばたばた忙しく走ってきたのは、左馬之介だった。その姿を認
めた途端、すつと上司の顔に戻った小十郎は、

「静かにしろ。客人の前でみつともねえ」

ぴしゃりと叱りつける。すいやせん、と謝りつつ、左馬之介はち
らつと朝顔を見、

「あの、ちよいと急ぎの知らせがありやすんで……」

言葉尻を濁す。どうやら、こちらには聞かれたくない話らしい。

それと察した小十郎は、すぐさま立ち上がった。

「分かった、今戻る。……そういうわけだ。またな、朝顔」

「ああ、ありがとうよ、右目の旦那。さっきの続きをしたかったら、
またおいで」

「っ、だからそういう事を言うなっ」

からかいの言葉にまた動揺する小十郎が、いちいち可愛い。くすくす笑いながら、朝顔は小十郎達を見送った。

小十郎と左馬之介は連れだつて廊下を足早に歩いていく。角を曲がりお互いの姿が見えなくなったところで、朝顔は目を閉じて、耳を澄ました。聞かれたくない話とあれば、逆に聞きたくなってしまふのが人の常じゃないか。

「……………があつて……………」

「何？ 見張りは……………」

特に集中すれば、小十郎と左馬之介の会話を拾うくらいの事は出来る。

「……………で……………皆殺し……………不明で……………」

(皆殺しってなんだい、物騒な話だね)

しかしさすがに全部は聞こえないので、朝顔はいつそう集中した。会話は続く。

「……………手がかり……………」

「生き残りの……………一人……………速すぎて……………」

「……………速い……………居合いでも……………のか？……………」

(居合い！)

どくん、と心の臓が大きく高鳴り、息が詰まる。カツと目を見開いた朝顔はしばらく、像のように身体をこわばらせていたが、やがて短く、速い呼吸を繰り返し、

「……………くっ」

ぎり、と歯を食いしばった。

勘違いならいい、関係なければいい、だがそうと思いこんで見過ごせない言葉だ 「居合い使い」というのは。

動揺しながら、朝顔は再び耳を澄ましたが、二人はもう遠くへ行つたらしく、足音も聞こえなくなっている。

「……………」

耳から手を離し、ふー、と大きく息を吐いた朝顔は顎を上げた。

暗い曇天を見つめるその眼差しは刃のごとく鋭く尖り、黒々とした闇が感情の色を飲み込んで消し去りつつあった。

異常の知らせを受けた小十郎は、すぐさま政宗へ報告にあがった。二人は机の上に地図を広げ、向かい合つてのぞき込む。

太い線で奥州のおおまかな地形が描かれた地図には朱のばつ印が描かれ、それは小さなものも含めて五つを数えた。小十郎が筆をひくと、政宗の眉間にしわが深く刻まれ、声に怒りが帯びた。

「小十郎、これで全部か」

同じく地図を見下ろし、小十郎も沈痛の面もちで頷く。

「はい。村が三つ、そして見廻り組が二組、全滅していたそうです。その中で北見の村の者がかろうじて獣道をたどって逃げ、ちょうど出くわした別の見廻り組に保護されました。その者に先ほど、詳しく話を聞きました」

「敵はどいつだ。葦名か、二階堂か、岩城か」

奥州統一にいたるまで、幾度となく戦った者共の名をあげたが、小十郎は首を横に振った。自身でも信じがたい思いで続ける。

「いえ、どれでもありません……そもそも、村を襲つたのは軍ではなかったと申しております」

「ああん？」

「襲撃者は、ただ一人。瘦身の男のみであったそうです」
「……何だと？」

馬鹿な、と政宗が吐き出すようにいい、小十郎も同様の思いだった。

襲撃を受けた村は三つ、しかも僅かに一日、二日の間を置いて立て続けに襲われている。いくら小さな山村とは言え、三四十人で構成されており、位置も離れている。それらを数日のうちに一人で全て滅ぼすなど、たやすい事ではない。

あまつさえ、その内の二つの村には、豊臣の残党に備えた伊達の見廻り組が駐留していた。手練れの者達で組織されていた武装集団

を、複数相手にして全滅せしめるなど、たった一人でなし得ることか。

(だが、現実には起きてやがる)

小十郎は奥歯を噛みしめた。普通ならあり得ない事だが、たとえば政宗のように、文字通り一騎当千の武将であれば成せる仕業だ。襲撃者が何者かまではまだ分からないが、何にしても、ただ者でないことは確かである。

「小十郎。そいつの足取りは追えるか」

「ただいま、手の者をやつて山狩りをしております。他の見廻り組には各地で守備を固め、異常があればすぐさま知らせるようにと伝えおきました」

「そいつのしつぽを掴んだら、すぐ俺に知らせろ」

「政宗様」

静かに怒りを燃やす政宗を小十郎は案ずる。民を己の血肉がごとく大切に思っている政宗にしてみれば、為すすべもなく殺された民の無念に、腸が煮えくり返る思いだろう。政宗はぎり、と手を握りしめ、切り裂くように吐き捨てる。

「なめた真似しやがつて。骨の髄まで後悔させてやる」

いきり立つ政宗とは反対に、小十郎はあくまでも冷静さを保った。地図を引き寄せて片づけながら、

「では、陣触れをいたしましょう。知らせが参りましたら、すぐ動き出せるように」

そう答えたが、政宗が言下に否定する。

「Wait、小十郎。敵は一人なんだから。それなら俺とお前だけで十分だ。徒党を組んでたつた一人に群を成して押し寄せるなんざ、みつともねえ」

「お言葉ですが、政宗様。いまだ敵の正体は知れておりませぬ。村人の話では一人であったということですが、その背後に大軍が控えていたら、どうなさるおつもりか」

目撃した者が嘘をついていると疑っているわけではないが、襲撃

の混乱の最中、見落としがあつたとも限らない。小十郎の慎重論に、しかし政宗は気楽に肩をすくめてみせた。

「それならそいつら諸共、ぶったぎってやるさ」

「なりませぬ。あなた様は奥州を背負つて立つお方なので。怒りに駆られて無謀な真似をなさいますな」

「小十郎。止めても無駄だ」

政宗はしかし、ぴしゃりとはねつけた。腰にはいた刀の柄に手を起き、雷のひらめくような目でこちらを見据え、告げる。

「こいつは俺が始末をつける。竜の目が黒いうちは、誰であろうと見逃すつもりはねえ」

「政宗様……」

これは説得など無理かもしれない。なかば諦めながらさらに言葉を重ねようとした小十郎だったが、その時ほんの僅かな違和感を覚えた。「！」考えるより先に身体が動いて、一足飛びに障子に飛びつき、勢いよく開く。

外はすでに夜となり、庭は闇の中で静寂に沈み込んでいる。空気は昼よりも湿り気を帯びてひんやりと頬を撫でた。小十郎は目を鋭くして素早く庭や廊下を見回したが、特に異変は見られない。

「どうした、小十郎」

不意の事に訝しみ、政宗が尋ねてくる。小十郎は障子を閉めて、部屋の中へ向き直った。

「……失礼致しました。なにか気配を感じたように思いましたもので」

「Fuh?」

政宗が顔をしかめて鼻を鳴らす。気にくわない、と言いたげな様子に、小十郎は頭を下げた。

「念のため、屋敷の中も見回らせましょう。何者かが潜んでおるやもしれませぬ」

敵はどこに潜んでいるのか分からないのだ。用心に用心を重ねて、悪い事はあるまい。今度は政宗も反対せず、

「ああ。もしS p yを見つけたら、思いっきり締め上げてやれ」
不敵な笑みを浮かべて鷹揚に頷いた。

そうして、出陣の準備と屋敷内の探索で騒然とし始めて、しばらく後。

忙しく立ち働く小十郎のもとに思いもかけない知らせを持ってきたのは、女中頭の浜だった。

「小十郎様。お忙しいところ申し訳ありません、急ぎお知らせしたき事がございます」

白髪で厳しい顔つきの浜は昔から、小十郎や政宗を影ながら支えて続けてきている忠義の者だ。当然信用も絶大なもので、小十郎がその呼びかけに否やを言ういわれはなかった。

「どうした、浜殿」

戦ごとの時に陳情してくるとは余程だろうと、愛馬を従者に手渡して向き直る。すると浜は声を潜めて、

「朝顔様が、屋敷のどこにもおいでにならないのです」
そう告げたのだ。

「……何だと!？」

背中に冷たいものが駆け抜け、つい声が張った。その声の大きさに自分で驚き、口を手でふさぐ小十郎。浜は落ち着いた様子で続ける。

「先ほど夕餉をお持ちしたのですが、部屋にいらっしやらず、手分けをして皆で探したのですが、一向に見つかりませぬ。まさか屋敷の外に出られたのか、と先ほど門守に確認致しましたところ」

(まさか)

じわりとわき起こる疑念に、身体がこわばる。

「……門から出た者は居なかつたのですが、当番を代わる際、庭で怪しげな者を見つけたそうです。思いの外身軽だった為、残念ながら塀を乗り越えるのを取り逃してしまった、との事ですが……」
『何者かが潜んでおるやもしれませぬ』

自身の言葉が蘇り、冷たい予感に鼓動が早まる。

「その曲者、黒装束に身を包んでおりました故、面相はしかと分からぬも、あれは確かに……女であった、と。そう申していたのです」
「……それが、朝顔だと言うのか」

努めて冷静に言つたつもりが、僅かに声が震える。その動揺に気づいているのか否か、浜は目を伏せて、

「分かりませぬ、ただ時が合います。真偽は不明ではありますが、ひとまず小十郎様のお耳に入れておかねばと思ひまして」
淡々と告げる。

「……………」

小十郎は暫時、目を閉じた。

徳川のことと芽吹きつつあつた疑惑の芽が、むくむくと大きくなつていく。喉の奥に何かが詰まるような息苦しさを覚えながら、小十郎はカツと目を開き、顔を殊更に引き締めた。

「分かつた、浜殿。屋敷内の探索と警備をより一層、厳しくしておく事にする。報告ご苦労だつた」

「はい。政宗様も小十郎様も、お気をつけ下さいませ」

ぴんと伸びた背筋を綺麗に折つて頭を下げ、浜は屋敷に戻つていく。

それを見送つた小十郎は、愛馬の首に触れ、眉間のしわを深くした。じつと屋根向こうの空を睨みつける。その脳裏に浮かぶのは、つい先頃、自分をからかつて艶やかに笑う朝顔の姿。普段と何も変わりなく、笑っていたというのに。

(……朝顔、おめえは何者だ。いったい、どこに消えた?)

重苦しい疑念を胸に抱いた小十郎に呼応するように、見上げた曇天からぽつりぽつりと雨が降り始めた。

闇に覆われた森に、雨が降る。枝葉にふれ、さわさわと衣擦れの
ような音を立てる雨は冷たく、じわりじわりと体温を奪っていく。

(雨は嫌いだ……篠突く雨など、以ての他だ……)

山道を進みながら、男は心中で呻いた。濡れるのも構わず、前髪
からぼたりぼたりと雨粒を垂らしながら、ゆっくりと、しかし躊躇
いなく足を進める。

(……このような雨の中、どれほど身体を冷やされた事か……)

目の前に蘇るのは、累々と屍が転がる戦場に降り注ぐ雨、そして
その地に倒れ伏した主の姿。

(秀吉様……どれほど、無念であられたらろうか……)

力を失い、親友を亡くし、失意のままに臨んだ戦で敗北し……た
った一人で崩じたその無念はいかばかりだろうか。

(秀吉様……秀吉様……秀吉様……)

あの戦では男自身も血を吐くような思いで戦ったが、押し寄せて
くる軍勢に為す術もなかった。

幾千幾万の敵を斬り、数え切れぬほどの傷を負い、それでも這う
ようにして戻った男の目の前で、主は命を散らした。

(秀吉様……半兵衛様……お二方の無念、私が晴らします……)

ずるり、とぬかるむ土に足を埋めながら、男は暗くよどんだ闇に
切れ長の目を据えて、誓う。

(私が……邪魔するものは全て斬り捨て……何もかも……)

あの絶望的な瞬間から、何度となく心に刻みつけている誓いを繰
り返す。

(何もかも奪い尽くして……あの憎き……)

あの憎き者共を全て滅する。その時を思い、暗い喜びと絶望的な
怒りにハアッ、と白い息を吐き出した瞬間。

……ヒュッ……

そば降る雨の中、僅かに空気を切り裂く音を耳が拾った。

「！」

反射的に身体が動き、白刃が閃いた。光が走った瞬間、ギインツ！と硬質な音が響きわたる。目にも留まらぬ速さでふるった刀で払い落としたそれに、男は目を見開いた。その瞳が捉えたのは、地面に突き刺さる八寸の針。

「これは……」

これには見覚えがある、いいや、決して忘れるものか！ 激情のあまり男はぎりり、と歯を食いしばった。怒りが冷え切った指先にまで熱をたぎらせ、絶望に沈んでいた心が沸騰する。

「……そこかああああっ！！」

喉から発作的な叫びが迸り、男は本能の示すまま刀を振るった。超人的な膂力で振るった刀の軌跡は光の刃となって、男の眼前に広がる闇を払った。森の木々を切り倒し、太い幹の木が半ばからずれ、めきめきと音を立てながら倒れた。その木で羽根を休めていた鳥や、穴ぐらで眠っていたリスが驚き、鳴き声をあげる。

闇の中で影となって逃げまどうそれらには目もくれず、男は不意に開けた空を見上げた。その目は今倒した木から切り離された、黒い影の姿を追い、鋭く輝く。

「……見つけた！」

歓喜のような、憎悪のような声を張り上げ、男は地面に降り立った影を睨みつけた。狂気に似た満面の笑顔で、高らかに咆吼する。

「とうとう……貴様を見つけたぞ！」

「……やはりお前か」

対して答えたのは、低く、冷たい殺意に満ちた声。それは、影を切り取ったような様相の人間だった。

影のように思われるのは、頭から足の先まで全て黒の装束に包まれている故で、かろうじて見えているのは口元だけだ。その上は、何の模様もない黒の仮面で覆われており、何の感情も読み取れない。

「ここで何をしている、石田三成」

黒装束が淡々と尋ねる一方で、男 三成は刀を鞘に納めながら、
気持ちを高ぶらせて叫ぶ。

「知れた事だ、貴様を殺しにきた」

「……」

「さあ頭を垂れる、許しを望んで希え、そしてその首を刎ねられる
！」

「……断る。お前に下げる頭などない」

「私ではない、草下の秀吉様に謝罪しろというのだ！」

激昂した三成は、大一大万大吉の紋が刻まれた柄頭を突きつけ、
叫ぶ。

「貴様のせいで、秀吉様がどれほど苦しまれたかつ……半兵衛様が
どれほど心残りであられたかつ……！ その罪は貴様の死を以てし
ても購われる事はないっ、ひと思いに殺してなどやるものか！ そ
の身に千の、万の死を刻みつけてやる！！」

突きつけた刀が震え、揺れる手元から滴がしたたり落ちる。憎悪
の固まりを突きつけられた黒装束は、しかし何の動揺を見せなかつ
た。

「……下らぬ」

「何だと!？」

「お前の憐憫につきあつつもりはない。竹中半兵衛は病に冒され、
余命幾ばくもなかった。豊臣秀吉はあまりにも多くの者に憎まれず
ぎていた。あの時でなくとも、いつかは反乱が起きていただろう」

「貴様っ……」

「いずれ崩れ去る楼閣だった。瓦解が早いか遅いか、それだけの話
だ」

「貴っ様……黙れ、妄言を囁るなあっ!!」

怒りのままに身体が動く。地面を抉る勢いで走り、三成は黒装束
の目前で、悠長にも見えるほどの動作で刀に手をかける。そして、
「消えろっ、消イえ失せるオオオオオ!!」

怒号を上げながらその手から閃光が放った。一撃必殺の光が黒装

束の首を狙って走り、今しもはね飛ばすかと思われた時、影が消えた。

「！」

手応えのないまま刃が空を走る。それが振り切る前に三成はぼつと上を降り仰いだ。黒装束は三成の頭上を飛び越え、腕を交差させる。握りしめたその拳から生えるように針が何本も飛び出し、鋭く空気を裂いて、三成に向かって放たれる。

「くっ！」

背後からの攻撃を視界の端にとらえ、三成はその場で膝を折った。身体を深く沈めたその頭上を、光の針が飛び越し、カカツと堅い音を立てて木に突き刺さる。

「そんなもの食らうか！」

叫んで三成は足を張って身を翻し、地面に着地したばかりの黒装束に迫った。その姿がかき消えるような速さで懐に飛び込み、刃先を影の中へと突き立てる。

(とった！)

確かな手応えに、三成は一瞬笑みを浮かべた。しかし刀を通じて伝わってくる感触は、人のそれではない。

「なにっ」

確かに貫いたと思われた黒装束は木に姿が変わり、三成の刀はその幹に深々と刺さっていた。

「くっ……！」

憎悪に突き動かされるまま力任せに突き刺した刀はすぐに抜けず、三成の足がそこに縫い止められる。まずい、と背筋に冷たい予感が走った時、

「せんはがらす
千羽鴉」

闇の中から滑り込むような声が耳に届き、次の瞬間、無数の針が頭上を埋め尽くし、雨よりもなお激しく、耳障りな金属音を立てて降り注いだ。

「ぐああああっ……！」

ドドドド、と地面が揺れる勢いで針が襲いかかってくる。避ける間もなく、かろうじて頭を庇った三成の全身を針が襲う。鎧に覆われた箇所はほとんど針を弾き返したが、その下の服がのぞく関節部分にいくつも、鋭い痛みが突き立つ。

「うっ……くっ……」

周囲の地面が針で埋め尽くされ、三成の立っている場所だけ地面がのぞく。全身のあちこちに針を生やした三成が呻くと、その前に黒装束が影のにじみ出るように現れる。静かな声で言う。

「……手と足は貰った」

「貰っ様、……!?!」

不意にかたく柄を握っていた手から力が抜け、ずりりと滑り落ちた。足も言うことを聞かなくなり、勝手に折れて、どさりと投げ出すように地に膝をつくはめになる。

「なにを、したっ……」

僅かに指先は動かせるが、鉛のように重く、手も足も動かない。まるで自由にならない己の身体に苛立ちと怒りをたぎらせ、三成はぎらぎらと輝く目で睨み上げる。対して黒装束は無の仮面で見下ろし、

「……奥州の村を襲ったのはお前か」

反対に質問を投げかける。夢に見るほど憎い相手を前にしながら、何も出来ない事に猛烈な怒りを抱き、ぎりぎり歯ぎしりをしながら呻く。

「村、だと……何の事だっ」

「……数日前、ここより南に位置する村が壊滅した。それもたった一人、瘦身の男によって、次々と襲われ、皆殺しにされたと聞いている。たった二、三日で、しかも離れた位置にある三つの村を潰滅せしめる……お前なら、出来ぬ事もないだろう」

「だったら、どうしたというのだっ……!!」

黒装束の言う事に思い至り、三成は吐き捨てるように肯定した。

あの村々の連中は三成が豊臣の家臣と知った途端、口汚く罵って石

を投げつけ、鋤すきや鍬くわなど貧相な武器を持って彼を追い払おうとした。それが、三成の逆鱗に触れた。自身はどう言われようと構わなかったが、命すら捧げて崇拜する主を侮辱し、あざ笑う者共を無視して去るなど、到底出来ない事だった。

「秀吉様の名を汚す者は、誰であろうと許さないっ！！ この私がっ、全て斬り捨てるっ……………！！！」

三成の答えを聞いて、黒装束は唇を横に引き結んだ。顔の表情は全く分からないが、その身から氷のように冷たい気配が吹き出し、手がすっつと上げる。

「……………そうか。ならば、死ね」

平坦ながら鋭く刺すような殺気を帯びた言葉を漏らす、その指先から針が伸びた。そしてそれをそのまま勢いよく振り下ろす。

「ううああああああっ！！！！！」

避ける間もなく、眼前に針が迫る。こんな下衆に不覚を取るなどあり得ない。怒りに全身が燃え立ち、針で縫い止められた腕を動かそうと、三成が吠えたその時、

ギーン！！

目の前で火花が飛び散り、針が消える。同時にハツと息を飲み、黒装束はその場から後ろにとびすさった。手に新たな針を握り込み、ぱつと右手に向かつて構える。

(何だっ)

眼前に飛来し、針を弾き飛ばしたのは小太刀だ。それを視認した三成は、飛んできた方角、黒装束と同じ方かたへ視線を向けた。その目に映ったのは、

「こんなところで二人きりのPartyとは、寂しいもんじゃねえか。オレ達も加わらせてもらうぜ」

森の中から現れた、二人の男だった。

馬に乗った男達のうち、言葉を発した一人は蒼い陣羽織を纏っており、兜には高々と天を指す弦月の前立て、その右目を眼帯で覆った奇妙な風体をしている。馬上で腕を組んだその男は三成と目が合

うと、不敵に笑って言った。

「さあ、教えてもらおうか。てめえらのどっちが、オレの目を盗んで、奥州で悪さをしてやがるのかをな」

「さあ、教えてもらおうか。てめえらのどっちが、オレの目を盗んで、奥州で悪さをしてやがるのかをな」

笑いの中に怒気を含んだ政宗の声を聞きながら、小十郎は小太刀を放った手を下ろした。襲撃者を追って分け入った山中、ようやく見つけたと思つたが、目の前には二人の不審者がいる。

一人は雨の夜にあつても目をひく白銀の髪をした瘦身の男。目撃者から聞いた風体に似ている、おそらくはこちらが村々を襲撃した男だろう。政宗もそれは分かっているので、男から目を離そうとしない。

故に小十郎はもう一人を見据えた。今相手を殺そうとしていたそれは、闇の中に溶け入るような黒装束を身にまとつてゐる。その手にした針のように細く、しかし鋭い殺気がなければ、うっかり見逃してしまいそうだ。

(……あいつは何者だ)

男を殺そうとしていたのであれば、少なくとも仲間ではあるまい。その身のこなしからして、ただ者でもあるまい。

(黒装束の不審者)

だが、そんな人物がつい先頃、伊達屋敷に現れているのを小十郎は知つてゐる。浜が仄めかしたそのの正体も。

「……っ」

手綱を握りしめ、小十郎は目をきつくした。自分の考え通りであつて欲しくはない、そう願ひながら。

「誰だっ……貴様はっ……」

地面に膝をついた男が切れ切れに呻く。その身体にはそこかしこに針が突き刺さり、身動きがとれないらしい。だが、こちらへ向けた眼差しは怒りと殺気でぎらぎら輝き、全く戦意を失っていない。政宗はハッ、と鼻で笑つて馬を下りた。足元でばしゃ、と泥水が跳

ねる。

「そいつあこつちの台詞だ。人の土地に入り込んで、勝手に派手な Fight をやらかされちゃあ、良い迷惑なんぞな」

言いながら刀を抜き、顔の脇まで持ち上げて、構えた。同じように下馬した小十郎もまた、いつでも刀が抜けるように気を張る。その目は、政宗の背中に怒気の気配が高ぶるのをとらえていた。

「オレは奥州筆頭、伊達政宗だ。……名無しを斬るつもりはねえ、いっぱしの男を気取るなら、あんたも名乗りを上げな。それから War dance と洒落こもうじゃねえか」

「黙れっ……失せろっ、貴様に名乗る名などないっ……！」

対して瘦身の男もまた怒気を発して叫んだ。ずず、と足を引きずり、強ばった腕をぎりぎりを持ち上げ、

「私が欲しいのはっ、貴様の首ではないっ！ 私の邪魔をするな、消えろ、さもなくば貴様も斬る！」

「！」

わめいた男の全身から赤黒い光が立ち上り、烈風のように吹きすさび、いや増す。今にも爆発しそうな気の固まりに、政宗と小十郎が身構えたその時、黒装束が動いた。

「シッ！」

地面を蹴って一陣の風のように走り男へ迫りながら、気合いを込めて、手にした無数の針を放つ。小十郎の目にもとらえ損ねるほどの速さで、針は吸い込まれるように男に襲いかかり、

「ううおおあああああっ！！」

しかし獣のような咆吼をあげた男は全身から吹き出す気で、身体に刺さった針もろとも、それを全てはじき返した。自由を取り戻した身体を翻して、木に突き刺さった刀の柄を握り、

「刻まれるおおおおっ！！」

渾身の怨念がこもった叫び声を叩きつけながら、刺さった木の幹ごと切り倒した。そして自由になった刀を、そのまま黒装束へ叩きつける。

「っ!!」

とどめの一撃を入れるつもりだったのか、真つ向から男の間合いに飛び込んだ黒装束は、それをまともに食らった。神速でふるわれた刀は無数の光となって黒装束を切り刻み、空に弾き飛ばす。黒装束は抗する間もないまま、森の闇の中へ突っ込んで、そのまま奥に消え失せた。

「小十郎!」

政宗は刀を抜いて瘦身の男に向かって駆け出しながら、小十郎の名を呼んだ。

そつちは任せた、正体を見極める。

短い呼びかけに込められたその意図を即座に察し、

「御意!」

小十郎は身を翻して森へと飛び込む。刀の鞘を払って、用心深く気配を探り進む。と、前方からばきつ、と枝の折れる音が聞こえた。

「!」

ハツと構えると、しばしの間を置いて、黒装束が現れた。先ほどまでの敏捷な動きが嘘のようにその足取りは鈍く、刃に裂かれたか、衣服のあちこちが破け、その仮面にもひびが入っている。

「……」

黒装束は小十郎の姿を認めたたためか、僅かに口を動かした。しかし、絹糸のように降り続く雨にさえ紛れてしまうほどの小さな声で、小十郎の耳には届かない。

「……答える。てめえは何者だ」

油断無く構えながら、小十郎は静かに問うた。黒装束は答えない。肩で息をしながら、再びその手に針を生み出し、ぐつと腰を落とす。(離れられたら、あの針にやられる。一気に懐に入らなきゃならねえ)

間合いを計りながら、じり、と踏み出す足先で、水を吸った土がじわりと染みる。しんしんと冷え込む空気に心さえ凍りつくように思いながら、小十郎はなおも問う。

「伊達屋敷に忍び込んだのは、てめえなのか」

「……………」

黒装束は答えない、しかし僅かにその気配が動揺した。それを認め、小十郎は息苦しさを覚えて齒を食いしばった。恐れながら、しかし半ば確信しながら、問う。

「信じたくねえが、やはりてめえは………… おめえの正体は…………」

だがその問いは最後まで発する事は出来なかった。

「！」

不意に黒装束の姿がかき消える。小十郎は一瞬見失ったが、水の跳ねる音を聞きつけ、そちらへぱつと顔を向けた。黒装束は闇の中を縫うようにして小十郎の右手を駆け抜け、先ほどの場所に向かう。土をはね飛ばして疾走するその姿を認め、小十郎は咄嗟に足下の枝を拾い、

「せいっ！！」

勢いよく投げつけた。それは風を切り闇を飛び抜け、

ガッ！

固い音を立て、過たず黒装束の足を打った。

「うあっ！！」

悲鳴が上がり、体勢を崩した黒装束は勢い余って木の幹に激突した。衝撃で枝葉が揺れてたまった雨粒が降り注ぎ、ばらばらと音を立てる。それを頼りに駆け寄った小十郎は、木の根本に崩れ落ちた黒装束を見つけ、一瞬躊躇いに足を止めた。

「くっ……………」

だが、黒装束が枝をぶつけられた足　右足を引き寄せて呻くのを、頭の芯がすうと冷えるのを感じた。服の切れ目から、添え木を入れた包帯が巻かれているのが見えたのだ。

（………… 間違い、ねえ）

薄ら寒い確信を抱きながら小十郎は歩み寄り、黒装束の前に膝をついた。息を切らし、小十郎の接近を拒むように黒装束は針を持つ腕を振るう。しかし力ない攻撃をあっさり捕らえ、小十郎はゆっく

りと左手を伸ばした。

ひび割れた仮面をつかみ、指先に力を込めると、かちりと音がして外れる。全く模様のない黒の面の下から現れたのは 長いまつげに覆われた黒目がちの、小十郎の心をどうしようもなく揺さぶる、あの美しい瞳。

「 朝顔……なぜ、おめえが……」

「は……旦那……バレちまった、ねえ……」

轟く思いで囁くと、黒装束 朝顔は青白い顔色で息を荒げながら、それでもいつものように柔らかく、笑ってみせたのだった。

ギアーン!

高い音を立てて刃と刃がかみ合った。そのまま互いに一寸もひかぬつばぜり合いとなり、ぐずついた地面に足がめり込む。刀ごしに瘦身の男とにらみ合いながら、政宗は二ツと口の端をあげた。

「どこに行くつもりだ、あんた。Danceの相手はオレだぜ?」
「貴様あつ、意味の分からぬ事を言うな、どけっ!」

黒装束を追おうとしていた男は、政宗に足止めを喰らい、ギリギリ音を立てて齒軋りした。身からわき起こる殺気を隠しもせず、憎悪の固まりのように言葉を吐き出す。

「なぜあの女を庇う、貴様、あれの味方か!」

(……女、か)

より一層力を込めて押してくる刀に抗しながら、政宗は自分の頬がぴくりと動くのを感じた。

あの黒装束が何者かは分からない。しかし出立前、小十郎が不審者の侵入を報告してきた際、その正体があの客人なのではないか、と言っていた。

(もしそうなら、Ironnicなこった)

小十郎は今、どんな気持ちで黒装束に向き合っているのだろう。その心境を思うと哀れな思いがする。しかし、政宗はすぐに振り払った。

あの黒装束の正体が何であれ、決着をつけるのは小十郎自身だ。目の前の男に意識を戻して、ハッ、と笑い、

「別に庇ってるわけじゃねえ、オレがあんたと話をしたいだけさ」

「話だと……私には貴様と語る事など無い!」

「そう言うなよ、こっちは聞きたい事が山のようにあるんだぜ」

「失せろ!」

吐き捨て、男は刀を弾いた。後ろに跳んで政宗から距離を取ると、

鞘に刀を納め、柄を握ったままぐつと腰を下げる。居合いの構えだ。確か村を襲った男も、居合いのごとく、目にもとまらぬ剣閃で全てをなぎ払ったという。

目を引く風体といい、確かにこの男が奥州の村々を襲撃した者なのだろう。確信を深めて顔を引き締める政宗に、男はいきり立ち、怒鳴る。

「たかが一兵卒が私を阻むな、邪魔をするなら斬る！」

「……一兵卒、だと？」

名乗りを上げた武将に対して答えもせず、さらに軽んじる言葉を叩きつけられ、政宗はカツとなった。襲撃の報を聞いてからずつと心中にくすぶっている怒りを押さえかね、柄を握る手に力を込めて唸る。

「言っじゃねえか……そういうあんたは、どれだけのもんか、分かったもんじゃねえがな」

「何だどっ」

「北見、志の森、久地の村を襲ったのは、あんただな」

断じて答えを待つと、男は知らんと即座に言った。政宗の苛立ちはさらに募る、この男は己で関心を持つ物以外は目に入らないらしい。

「ここから南にある三つの村だ。うち二つには、オレの部下達がいた」

「……ああ、あれの事か。あの女も村の事を聞いていた……なぜだ、なぜ貴様らは、それに拘る？」

「さっきの黒ずくめが何考えてるかは知らねえが、ここはオレの国だ。大事な民を殺されて、へらへら笑ってられるわけがねえだろ」

「貴様の国だろうと何だろうと、知った事か！ あの者達は秀吉様を貶し、あざ笑った。卑しき身で秀吉様に暴言を吐くなど、愚劣の極みだっ！ 死してなお許し難い！」

秀吉の名を口にしながら男は感情を高ぶらせる。対して政宗は目を細め、平坦な声で呟いた。

「なるほど、あなたは豊臣秀吉の元部下か」

「元ではないっ！ 私は秀吉様の左腕だ、秀吉様のご威光は今なお衰える事はない！」

「だが、死んだ」

ばさりと言葉で切りつけ、政宗は刀を静かに鞘へ納めた。身内に燃え立つ激情のあまり、顔から表情が抜け落ち、白晳の仮面のようになる。

「死んだ奴をいつまでも持ち上げて、関係ない人間に八つ当たりするなんざ、あんた、救えねえな。あの Boss 猿もこんな後継者しかないんじゃないや、てんで浮かばねえ」

「何だどっ……！？」

政宗の言に男は怒りのあまり震え、声を限りに叫ぶ。

「貴っ様ああ！ 私を通して秀吉様を侮辱する気か！ あの女より先に、永遠に暴言を吐けないようその口を縫いつけて、首を刎ねてやる！！」

「やれるもんならやってみる」

政宗は腕を交差させた一瞬後、その両手で六の爪を掲げた。雨粒を纏って輝く、さえ渡った刃を構え、

「無力な農民を一方的に切り刻んで、楽しかったか？」

声を一段、低くする。

「何の罪もねえ人間を斬って斬って斬りまくって、満足したか！」
そして一息に前へ飛び出した。

「奥州筆頭、伊達政宗！ 推して参る！」

名乗りを後に残し、蒼い風は瞬く間に男の懐に飛び込み、下からすくい上げるように刃を振るう。

「っ！！」

男は間一髪、刀でそれを受け止めた。しかしすぐさま反対側から、獣の爪のように銀閃が襲いかかる。

「うあっ！！」

抗しきれず、男は吹き飛ばされて、先の黒装束のように森の中へ

突っ込んだ。後を追う政宗の前で、男は足を震わせ立ち上がりながら、がなる。

「貴様に……貴様などに、この私がっ……!!」

どうやら黒装束から受けた攻撃のせいだ、まだ思うように身体が動かないらしい、足下がおぼつかない。弱っている者に追い打ちをかけるのは政宗の信条に反するところもあつたが、今回は相手が相手だけに、攻撃の手をゆるめるつもりは無かつた。

「H A A A A A ツ!!」

白刃を幾重にも閃かせ、怒りのまま叩きつけた勢いでどつ、と地面が揺れる。政宗の身体が稲光のように青白い輝きを纏つた。光を帯びたその切っ先は残像を残しながら、目にも止まらぬ速さで男を切り裂いていく。

「ぐあああああっ!!」

政宗が刀を振るう度に木や茂みが、雨のしぶきと共になぎ倒されていく中、男は為す術もなく弾き飛ばされた。もはや怒りの形そのものになってただひたすら刀を振るう政宗は、地面に叩きつけられて血を吐き出す男に向かって、

「これで仕舞いだ! Rest in Peace!!」

喉も裂けよとばかりに声を張り上げた。カツと周囲が一瞬真昼のように明るくなり、政宗の身体は雷が如く輝いて、男に向かって飛んでいく。光となって襲いかかる政宗に、男は目を見開き、

「秀吉様っ……!!」

救いを求めるように、あるいは絶望したように叫んだ。その姿はあつと言つ間に光に包み込まれ、

「うあああああっ!!」

天を裂くような絶叫が響きわたつた。男の身体は血の糸を幾重にも引いて空を飛び、

「!!」

ハツと政宗が息を飲んだ時には、不意に現れた崖から下に、落ちていた。

「Shit!」

急いで駆け寄り崖から眼下を臨むと、白銀の男は闇の中へ飲み込まれ、その姿が見えなくなってしまうた。崖下は闇夜の森となっていて、いくら目をこらしても、一度見失った男を発見する事は叶わない。

「……ちっ」

政宗は舌打ちして、熱を帯びた刀を全て鞘に納めた。完膚無きまでに叩き潰した後、身元を確かめようと思っていたのだが、つい我を忘れてしまった。

（野郎……少なくともしばらくは動けねえだろうが）

万が一、復讐を掲げて再度、奥州の民を殺されては困る。徹底した山狩りを行わなければならぬ、そう思いながら崖に背を向け、己の技で木々がなぎ払われて出来上がった道を戻り始める。

と、その向こうからやってくる人影が目にと留まった。

「小十郎」

「政宗様。御身、大事ありませんか」

霧雨に濡れ、普段はきつちり整えた髪をわずかに乱した小十郎が、静かな足取りで近づいてくる。ああ、と答えた政宗は、しかし小十郎の言葉よりも、他に注意を奪われた。

小十郎はその両腕に、黒装束の『あの女』を抱えていたのだ。

「小十郎、そいつは……」

そばまでやってきてようやく姿が判然とし、政宗は眉根を寄せた。最初見たときは男か女か、顔も分からない出で立ちだったが、今黒装束はあちこち破け、その下の白い肌をのぞかせている。雨で服がまとわりつく身体の線は、確かに女のものだ。そしてその目を覆っていた仮面は今取り払われ、苦痛の表情で目を閉じる女の顔。紛れもない、朝顔の面が露わになっていた。

「……気絶をしているだけです。足の怪我と合わせ、先ほどの戦いでさらに傷を負った故でしょう」

小十郎の答えは淡々としている。表情は常にも増して厳しく、私

情を一切窺わせない鉄仮面のようになっていたが、政宗にはその心中が推し量れるように思えて、再び哀れを覚えた。

「素性は、聞いたのか」

無意識に声を和らげて尋ねると、小十郎は首を横に振る。その顔から雨の滴が落ちた。

「いいえ、その間もなく気を失ってしまったので。屋敷に戻りましょう、政宗様。この者が先の男と関わりがあるのであれば、尋問せねばなりません」

そう言い、先に立って歩き始める小十郎。一切の感情を排した物言いにたまらなくなり、

「小十郎。お前は大丈夫か」

政宗はつい、その背中に語りかけた。数歩進んで足を止めた小十郎は、半身振り返り、

「何がですか。政宗様」

全て拒絶する、強くも恐ろしい眼差しで、真っ直ぐにこちらを見つめてくる。

(聞いてくれるな、って事か)

「……いや、何でもねえ」

政宗は察し、言葉を翻した。二人連れだつて雨の道を歩き出し、馬の元へ戻りながら、胸中複雑な思いに顔をしかめる。

朝顔が素性の知れない闖入者である事に一番動揺しているのは、小十郎だろう。

自分が拾ってきた女がどうやらただ者ではない。政宗を何よりも第一に考える小十郎にしてみれば、そんな不審者を主のすぐそばに居させた事は、悔やんでも足りないだろう。ましてその女に心惹かれていたのであれば、己の慢心を責めて止むことはあるまい。

(……ちつ)

愛刀の柄を握りしめ、政宗は奥歯を擦り合わせた。

己が出陣して、村を襲った不届き者を成敗すれば晴れるだろうと思っていたもやもやは、男にとどめを刺せなかった事に加えていや

増し、胸苦しくなるほどだった。

熱い。身体が燃えるように熱い。

「う……くっ……」

息が苦しい。は、と息を漏らして目を開く。ぼやける視界は薄闇で、何も見えない。

(ここ、は……)

どこだろう。考えようとしたが、頭がぼうつとして働かない。からからに乾いた喉に唾を飲み込み、起きあがるうと肩に力をこめたが、

「いつ……!!」

全身に激痛が走り、どっと冷や汗が吹き出した。身体がばらばらになるような痛みにあえぎ、激しく息をつきながら、自分の身体をかろうじて見下ろす。

記憶にある限り、最後に袖を通したのは、黒に近い濃紺の衣装だったはずだが、今は灰白色の小袖に変わっている。視界を遮る胸は呼吸にあわせて激しく上下しており、その動きで襟元がずれていた。谷間が覗く胸元に包帯が巻かれているのを目に留め、疑問を抱く。

(手当が、されてる……?)

そうと意識してみれば、怪我の全てが治療されているようで、体中にじわじわと薬が染みてくるのが分かる。かろうじて動かした右手で触れたわき腹も、さらさらした柔らかい包帯に代えられてるようだ。

(どうして……)

全身の熱と頭蓋に刺さるような痛みには耐えかね、ハアハアと息を荒げながら、目を動かして周囲を見る。

闇に慣れた目に映るのは、土壁だった。ごっごつした岩と土を固めて作った、明らかに人工のそれを目で追っていくと、背の高い格子にたどり着いた。太い木を組み合わせて大きく空いた穴にはめた

格子の向こうには、槍を手にした兵が一人立っていた。壁にかけられた松明の灯りで、周囲がぼんやり照らされている。

(……士卒……?)

そこでようやくこの部屋が何なのかを理解する。どうやら自分は牢に横たえられているらしい。

もしやあの男に捕らえられたか、と思ったが、即座にその考えを捨てる。こちらを憎みきっているあの男の事だ。わざわざ牢に閉じこめ、しかも傷の手当をするなんてややこしい真似はするまい。

(じゃあ……誰が……)

こんな事をしそうな相手は誰か。回らない頭でゆっくりと考え始めた時。

「……目を覚ましたか。朝顔」

低く鼓膜を振るわせる声が、牢の静寂の中に響く。胸にすうと刃を差し入れられるような寒気を覚え、朝顔はそちらへ顔を向けた。緩く、笑みを浮かべる。

「ああ……やっぱり、あんたかい……右目の、旦那」

「……具合はどうだ」

兵を下がらせ、二人きりになったところで。しばし沈黙した後、小十郎は口火を切った。

松明の灯りは奥まで届かず、盛った土の上に筵を敷いた寢床の様子は、しかと見えない。だが、

「上々さ……また、先生の世話に、なっちまったのかね。有り難い、ことだよ……」

答える声は震え、弱々しい。

当然だろう、朝顔が全身に負った傷は数多く、そのどれもが重傷だ。

しかも怪我を看た稲尾によれば、朝顔は元々足以外にも、わき腹に深い傷を負っていたそうで、よくこれで動き回れたものだ、と感嘆混じりに言わせるほどのものだったらしい。

(ましてこんなところじゃ、上々じゃあいられないだろう)

土と岩の牢は冬の冷たい空気を含んで外よりもなお寒く、怪我人には辛い環境だ。そう思うと哀れを催したが、小十郎はその感傷をすぐに振り払った。

「尋問の前に死なれちゃ困るんでな。口が利けるのなら、てめえが何者か、奥州で何をしようとしているのか、洗いざらい喋ってもらうぜ」

ことさら冷淡な口調で告げ、松明を取って牢の鍵を開けた。重い扉を片手で開けて中に入る。

壁の燭台に松明をかけて奥へ目をやると、炎の灯りが届くようになつた床の上で、朝顔が身を起こしてこちらを見ていた。

これほど冷えるというのにその顔は紅潮し、汗が浮かんで息も荒い。目の下にくまが浮かんだ病的な表情で、朝顔は小十郎と視線を合わせ、ふつと笑った。

「察しの良い、旦那の事だ。あたしの、正体なんて、だいたい、分かってるんだろ？」

「……あの身のこなしを見りゃあ、俺じゃなくても分かる。てめえの正体は……」

「ああ。あたしは　しのびさ」

しゅん、と音を立てて、その手中に手妻のごとく針が現れる。ハツとして刀に手をかける小十郎。しかし朝顔はくつと喉を鳴らし、すぐそれを消した。大きなため息と共に、

「ただし、元、だけどね」
言葉を付け足す。

「……元しのび、だと？」

予想とは少しずれた答えに顔をしかめながら小十郎が呟くと、朝顔は立て膝に肘を寄せ、けだるげに顔をうつむかせた。

「ああ……そうさ。しのびなんて、因果な商売、とつくの昔に、廃業したよ」

「信じられねえな」

哀れを誘う仕草に流されまいと、小十郎はぴしゃりと切り捨てた。柄から手を離さないまま睨みつける。

「足と腹に怪我をしながら、馬で一刻はかかるあの山に行き、あれだけ戦^やつてみせた。政宗様と俺の話盗み聞きしたのも、てめえだろっ」

後半はカマかけだったが、朝顔はこくりと頷いてあっさり認めた。さらさら音を立てて髪が落ちる。

「居合い使いが、今、どの辺りに、いるのか、知りたかつたんで、ね」

「てめえの前では話さなかつたはずだが、どこで襲撃の件を知つた。それに 今日一日で、これだけの事をしたんだ。屋敷に来てこれまで、てめえを疑う人間はほとんど居なかつた。誰にも気づかれず内情を探るのは、容易い事だつたらう」

何という怠慢か、それこそ自分が一番警戒しなければならなかつたのに。齒噛みしながら、小十郎はより強く言い募る。

「答える、てめえはこの手のものだ。ここで何を探っていやがる」
「……………」

俯き、髪影に顔を隠した朝顔は、じつとして言葉を発しない。ぴんと緊張の糸が張つた牢の中に、沈黙が広がつた。

じじじ、と松明の燃える音だけが響く。小十郎と朝顔の影が炎の揺らぎに従つて生き物のように形を変えるのが、どこか不気味だ。

そう思つてしまうのは、今日の前にいる女が、得体の知れないしびだからだろうか。油断無く、いつでも切り捨てられるように柄を握りしめる小十郎。

その気迫に当てられたか、やがて朝顔は顔をあげた。

まだ息を乱してはいるが、存外落ち着いた様子でゆっくり壁にもたれかかると、

「……………信じる、信じないは、右目の旦那の自由さね。あたしは、しのびを、捨てたんだ。奥州^{（奥州）}で、悪さをしようなんて、これっぽっちも、考えちゃ、いないよ」

「そんな言葉一つで信じられると思うか」

「だから、そいつは、旦那の自由だって、言ってるだろ？ 信用ならないって、思うんなら、殺しゃいい。簡単な、ことさ」

淡々と言葉を吐く。熱を帯びたその顔はひどく疲れ切っていて、何もかもどうでもいい、と言いたげな投げやりさがあった。

「だいたい、あたしを屋敷に、連れ込んだのは、旦那じゃあないか。こっちはずっと、世話になる気はないって、言ってたのにさ」

「む……」

言われてみればそうだ。朝顔は伊達屋敷に連れてこられた後、しきりに恐縮して世話される事を嫌がり、動けるようになったらすぐ出て行きそうなそぶりを見せていた。

「それがてめえの手だったんじゃないか」

信じたいと心が揺らぐのを感じ、それをごまかすように尖った台詞を吐くと、ハッ、と朝顔は短くあざ笑った。

「本気で、旦那に、取り入るつもりなら、そんな面倒な事、しやしないよ。しのびだった頃の、あたしの武器は、針だけじゃあ、無かつたんだからね」

そういつて手を持ち上げると、自分の首に当て、絡みつくような仕草でゆっくりと撫で下ろし、緩んだ合わせの上で意味深に止めてみせる。その下で呼吸にあわせて揺れる胸の扇情的な動きに一瞬目を奪われ、小十郎は血の気を上らせた。

（見るな、馬鹿野郎っ）

慌てて目をそらし、しかし一方で、朝顔が仄めかしたもう一つの武器は確かに効果的だ、と屈辱的な思いで実感した。

もしあの艶めかしい身体で誘惑されていたら、さしもの自分も我を失っていたかもしれない。ちょうど今日あったように、と思い至って、小十郎はハッとした。まだ顔が熱いのを自覚しながらも目をきつくして、再度、朝顔をねめつける。

「それなら、今日のは何だ」

「あれ？」

「俺がおめえの部屋を訪ねた時、……妙に絡みついてきたじゃねえか」

「ああ……別に、意味は、ないさ。旦那が可愛い事を、言うから、からかってやった、それだけだよ」

朝顔は軽く肩をすくませ、それからぼってりした唇の両端を上げて笑う。

「あの程度で、ふらつくなら、あんたを、いいなりにするのは、随分楽そうだねえ……たまには、女をお抱きよ、旦那。我慢し通しじや、身体にも毒だし、こうして、怪しい女が、旦那をたぶらかすかも、しれないんだからさ」

「うるせえ！俺は、そんな話をしにきたんじゃねえ、軽口はそれまでにしろ！」

カツとなつて発した怒号が、牢の中に響きわたる。びりびり空気を震わせるそれに、朝顔は反射的に身を縮こまらせた。しかし、恐れ気配など微塵も見せず、

「よしとくれ……旦那の大声は、頭に響くよ……聞きたい事があるなら、もっと、優しくしてくれなきゃあ、話す気にも、なれやしな
い」

辛そうに顔を歪め、壁にことりと頭を預ける。口は達者だが、身体の方は衰弱して耐えられないらしい。陰影を濃くしたその顔を見て、小十郎は冷静さを取り戻した。

（そうだ、落ち着け。こいつからあの男の事を聞き出さなきゃならねえんだからな）

咳払いをして気を取り直し、再び口を開く。

「……てめえが元しのびだつてのは分かった。ここで悪さをしようという気がないつても、とりあえず信用する」

「ああ……」

「ならもう一つ、聞かせてもらおうか。あの白銀の男、あいつは何者だ。てめえは何故、怪我の身を押しつまで、あの男とやりあつて
たんだ」

「……………」
その疑問を耳にした途端、朝顔の表情が変わった。すう、と感情の色が消え失せ、土牢の寒々しさよりもなお冷たい、氷のような殺気がじわりとその身からにじみ出す。

これはあの黒装束がまさに放っていた気配だ。息を飲み、思わず刀の鯉口を切って身構える小十郎だが、

「……………あれは、石田三成。豊臣秀吉の狗だった、けだものみたいな男さ」

朝顔の殺気は全て、名を口にした男にのみ、鋭く向けられているようだった。

「……石田三成。聞き覚えのある名だな」

朝顔の殺気に顔をしかめながら、小十郎は記憶の糸を辿った。そう遠くない日、その名を耳にした気がする。朝顔はそうだろうね、とため息混じりにいった。

「先の武田上杉による豊臣侵攻の折り、戦場で殺戮の限りを尽くした男だよ」

「ああ……あれか」

その噂は、戦の地、大阪より遠く離れた奥州にも確かに届いていた。

かつての威容を失い衰弱した豊臣軍は、戦のはじめから劣勢を強いられていた。豊臣から裏切り者、脱走者が続出する中、しかしただ一人、飽くことなく刃を振るい、数え切れないほどの兵を屠った武将がいた。それが石田三成という名だったはずだ。

（石田三成……確か、豊臣秀吉の一の部下だったか）

一度思い出せば、蔓草を引くように、石田の情報が掘り起こされていく。小十郎が調べた限り、石田三成という男はどんな戦でも自ら先陣を切り、卓越した剣術で戦場を支配して、圧倒的な勝利を主に捧げていたという。

「石田三成についちゃ、豊臣秀吉が死んでから、行方不明になったと聞いているが……そいつが何故、奥州くんだりまで来て、てめえを殺そうとした？ どうも尋常じゃねえ有様だったか」

狂うがごとく怒り散らし、全身全霊を込めて朝顔に殺意を叩きつけた石田は、もはや常人の思考を捨てているようにさえ見えた。いったいどんな恨みがあれほど人を狂わせるのか。

薄ら寒い思いをしながら小十郎が問うと、額の汗を拭って、朝顔は目を閉じた。落ち着いた声音で、涼やかに答える。

「それは あたしが、豊臣を、滅ぼしたから、だよ」

松明の炎が揺れ、足下の影を踊らせる。大きく伸び上がったそれに飲み込まれるのでは、そんな錯覚をしながら、小十郎は痺れたように朝顔を見据えた。

「おめえが……豊臣を？」

あまりにも思いがけない告白で動きを止めた頭を振り、馬鹿な、と呻く。

「何を言つてやがる。豊臣秀吉を討ち取ったのは、武田信玄と上杉謙信だ」

言つた後に、朝顔がしのびだという事を思い出し、眉根を寄せて付け足す。

「それともてめえは、どつちかに雇われて、裏工作をして豊臣を陥れたつてのか」

強大な勢力であつた豊臣を滅ぼすなど、女一人で成せる事ではない。むろん後ろ盾があつての事だろうと検討をつけたのだが、朝顔は首を横にふつた。目を伏せ、淡々と言う。

「しのびたるあたしの最後の主は、豊臣だつたよ」

「何だと？」

先の言葉とは全く逆の立場ではないか。小十郎は思わず驚きの声を上げた。

「それならてめえは、雇い主を裏切つたつていうのか。……なら、やはり武田上杉侵攻の時に……」

情報を流すなりして、裏から豊臣の崩壊に手を貸したのか。しかしここでも朝顔はそうじゃない、と否定する。

「右目の、旦那。あんたは、その戦の前、豊臣軍が、奇襲を、受けたつて話、知つてるかい？」

「……ああ、聞き及んでいる。加賀の前田慶次が、大阪城に殴り込みをかけたつて奴だろう」

前田慶次という風来坊は、以前縁あつて知り合つた男だ。軽薄だが、嫌みのないさっぱりした気性は政宗にも気に入られており、時

折顔を出しては、茶飲み話をしていく仲でもある。

「たった一人だつてのに鬼のように強くて、豊臣の兵を片っ端から蹴散らし、仕舞いには豊臣秀吉を殴り倒して、半身不随にさせたんだつてな」

しかも大阪城に備蓄されていた金品を強奪し、貧苦に喘ぐ町民に全てばらまいたと言うから、あの婆娑羅者も派手な事をやらかしたもんだ、と呆れ感心したものである。

「豊臣秀吉が武田上杉に敗北したのは、その時の怪我と、もう一つ。軍師の竹中半兵衛を失った故と聞いているが……」

語りながら徐々に嫌な予感を覚え始め、声が揺らぐ。まさかと思いながら、小十郎は朝顔を見下ろした。

「そいつに、てめえが関わっていたつてののか、朝顔」

「……………そうだよ」

間を置いて、吐息を挟みながらも、揺らぎのない声音で答える朝顔。

「その、殴り込みの、お膳立てを、したのが、あたし、なんだよ」

「……………前田をそそのかして、言いように使つたつてわけか？」

あの女好きの男であれば、朝顔の色香にあつさり迷いそうだ。もしそうなら前田が情けないし、前田を誑かしたのなら、この女が腹立たしい。

そう考えて言葉を尖らせる小十郎へ、朝顔は影のある笑みを向けた。

「……………前田の、旦那は、元々、豊臣秀吉に、禍根が、あつたのさ……………。そいつが、うまいこと、あたしの、思惑と、重なつたつて、だけだよ……………」

禍根。暗い言葉だ、前田慶次には似合わない。反射的に思い、女への反発もあつて嘘だと決めつけようとした小十郎だが、

(そういえばあの男は時折、妙に寂しげな顔をしていたな)

「……………前田は、豊臣とどんな因縁があつたんだ？」

淡い記憶を思い起こして尋ねたが、朝顔は苦笑した。

「そいつは……あたしの口から、言うわけにや、いけないね……。
知りたかったら、前田の、旦那に、お聞きよ……教えて、くれるか
は、分らない、けどさ」

それは尤もだ。なら、と小十郎は目をきつくして問う。

「その代わりじゃねえが、てめえの思惑とやらを聞かせてもらおう
か。てめえはなぜ、豊臣を裏切った」

「……………」

壁に背中を預け、浅く息をついて朝顔は黙っている。その表情は
熱を帯びて赤らみ、目が潤み、どこまでも儂げで、そして美しい。

「前田から強いて聞き出そうとは思わねえが、てめえは別だ。黙り
がきくと思うなよ」

二度と惑わされまい、と気張る小十郎は自然と声が低くなり、そ
の身から冴えた気がわき起こる。それに当てられた故か、朝顔は僅
かに目を細め、

「……豊臣に、居た頃……あたしは、ある戦場で、石田に、会った
んだよ」

大きな吐息とともに言葉を吐き出す。

「あの男は、豊臣の、一番槍でね……いつでも、どこでも、鉄砲玉
みたいに……飛び出していった。あたしは、裏の仕事 情報収集
やら、偵察が、主だったから……あいつと、顔を合わせる、ことな
んで、そう、無かった」

当時を思い起こしているのか、その目が遠くなる。

「あの日、あたしは、竹中半兵衛の命で、降伏を、促す書を、持っ
て行った。だけど、相手方は……あたしを、捕らえてね。痛めつけ
て、豊臣の内情を……聞き出そうと、した」

「……………」

「丸二日……散々な目に、あつて……もう死ぬかと、思った時……
石田が、来た」

石田の名前を紡ぐ朝顔の聲が、不意に冷える。

「てめえを、助けにきたのか」

「いいや……ただ、殺しに、きたのさ　豊臣秀吉の敵を、全てね」
朝顔は呼吸を乱し、俯いて呻いた。

「あの時の、事は、忘れられない……一面、死体だらけ、だったよ……女子供も、容赦なく、皆、殺された」

「……」
思わず口をつぐむ小十郎。髪をかきあげ、朝顔はかすれた声で笑った。

「そりゃあ、あたしだって、綺麗な手じゃあ、ない……あの男を、人殺しと、罵る権利なんか、ありやしないよ。……だけど……」
くしゃり、と髪を握り込み、怒りと恐れをにじませて、囁く。

「あんな……あんな、ひどい事を、する奴に、好き放題、させてるような、豊臣秀吉を……あたしは、許せなかったんだ」

「……朝顔」
力なく頭を垂れ、かつての惨劇に憤り、かつ恐怖して身を縮こまらせる朝顔はどこまでもか弱く、儂げで、今にも消えてしまいそうだ。（これが、朝顔の手なのかもしれない）そんな猜疑心を抱きながら、それでも胸が締め付けられるような思いで、小十郎は名を紡いだ。

朝顔の言葉は続く。

「だから……あたしは、豊臣を、裏切った。それだけじゃあ……ない。豊臣そのものを、つぶすために……前田の旦那や、武田上杉に話を持って行って、色々、手を配った。だから……分かっただろ？　石田が、どうして、あたしを、殺したいほど……憎んでるか」

しのびが裏切り、敵に通じて、主を貶めた。その事実を知ったのなら、忠誠心厚い石田が捨て置くわけがなからう。しかし、

「それならてめえよりまず、直接豊臣に刃を向けた相手　前田や、武田、上杉を殺そうとするのが順なんじゃねえか」

指摘すると、朝顔は軽く肩を上下させる。

「もちろん、あの男は、そのお方たちも、殺すと、言ってるよ……。ただ、手の届くところに、居たのが……あたし、だったって、だけ

さ……」

「……そうか。てめえが一つところに留まれねえ理由は、石田が先に外歩きをした際に引つかかっていた疑問が氷解する。

あんな男に追われていたのなら、一つの場所のじいっとして居る訳にいかないだろう。今度は朝顔も首を縦に振る。

「……細かい事を、よく覚えてるねえ……。あの男が、こつちを……探してるってのは、知ってたからさ……。前田の旦那とは、三河の手前で、別れたけど……多分そのまま、あたしの後を……追ってきたんじゃ、ないかね……」

「だが、足を怪我して、身動き出来なくなった、か……」

それなら朝顔がこれほどの傷を負ったのは、自分のせいでもあるのではないか。自責の念に駆られかけ、小十郎はハツとした。

（いけねえ、すっかり朝顔に同情しちまつてるじゃねえか）

今の話がどれだけ真実を含んでいるかは分からない。そもそも、全て嘘かも知れない。

この女は伊達屋敷にいる間、小十郎にさえ正体を気取らせなかった。夜の森で対峙した時に見た身のこなしは、怪我をしているとは思えぬほど俊敏で、相当な手練れであるのは違いないだろう。

（騙されるな）

今はしおらしくしているが、傷が癒えた時、政宗にあの針を突きつけるはずがないと、どうして言えようか。

「……だが、あれだけ動けるようにはなってたんだ。てめえなら、石田が近くまで来ると知った時点で、遠くに逃げる事が出来ただろう」

気持ちに引きずられて声もよそよそしくなる。朝顔は足を引き寄せ、膝に顎を乗せ、

「……そりゃ、出来た、けどさ。そう、したら……あの男が、行く先々で、人を、殺して、回るじゃないか……」

消え入りそうな弱い声が細々と漏れる。

「もつ……あんな光景は……見たくない、んだよ……ましてや……」

この、奥州で……の、殿様が……文七……右目の、旦那がいる、この、国で……」

「朝顔……？」

どうも様子がおかしい。とげとげしい警戒心を抱いたまま、小十郎は近づいた。いつでも刀が抜けるように緊張しながら、ゆっくりと朝顔に近づき、

「おい、どうし……」

そろりと伸ばした手が、小袖に触れるより先に、ふっと朝顔の身体が傾いた。

「！ 朝顔！」

どさり、と土の床に身を投げ出したのに驚き、身を乗り出しているぞき込むと、その目に赤色が飛び込んできた。

「……しまった、傷が開いたか……！」

着物の脇腹に滲む血を見て、小十郎は舌打ちした。

相手は不審な女だと心を鬼にして尋問を強いたが、朝顔はつい先ほど手当を受けたばかりなのだ。あれだけの傷がそう簡単にふさがらるわけがなく、ましてやこれほど長々と語りをしていけば、身体に障って当然だ。

「おい！ 今すぐ、稲尾のじいさん呼んでこい、急ぎの患者だ！」

小十郎は牢の外へ出て、離れたところに待機していた兵へ怒鳴った。慌てた兵が、矢のごとく飛び出していくのを見もせず部屋へ戻る。

そして、ひゅうひゅうと弱い呼吸を繰り返す朝顔の身体を仰向けにする。今や血の気が引いて、青ざめている頬の汗を拭おうと手を近づけかけたが、

「……っ」

躊躇って、引込めた。立ち上がって避けるように一歩下がり、歯をかみしめて、苦しむ朝顔を見下ろす。

（おめえの言葉のどれを、信じればいい）

石田三成がこの奥州で凶行を繰り返すのを、止めたかった。最後

の言葉は、小十郎が知っている、情細やかな朝顔のそれだった。しかし今の小十郎は、頭から受け入れる事が出来ない。

(朝顔……おめえの本当の顔は、どっちなんだ)

主を裏切り、人殺しも厭わない、冷徹なしのびと、艶やかで人なつっこい朝顔と。

両極端な二つの面を持つ女を前に、小十郎は猜疑と情愛が入り乱れて息苦しくなり、きつく拳を握りしめていた。

奥州の空を覆った黒雲は始め雨を、やがて細雪を降らせた後、風に運ばれて消えた。地面に薄く積もった雪も溶け去り、今宵はさえ渡った月が空を飾っている。

その夜、政宗はその明かりを浴びながら、月見酒を楽しんでいた。開けた障子に寄りかかって立て膝に肘を置き、ゆるりゆるりと杯を進めていたが、

「小十郎」

腹心の部下が廊下を渡ってきたのに気づき、手を止める。自室に下がった政宗を小十郎が訪ねてくるのは、事が起きた時だけだ。

「お休みのところ、申し訳ありません。政宗様」

折り目正しく膝をつく小十郎へ頷き、

「どうした。何かあったのか」

促すと、小十郎はぴんと背筋を伸ばして、口火を切った。

「石田三成の件、報告に参りました」

「まさかまた、どこか襲われたっていうんじゃないかねえだろうな」

石田と対決した後、政宗はあの山の近隣へ、特に強固な部隊を派遣し、嵐潰しに探索を行わせていた。政宗自身も、このところ毎日馬を駆って熱心に探したのだが、その消息は杳として知れなかった。これでまた悲しい報告を聞く羽目になつては、悔やんでも悔やみきれない。そう思つて顔をしかめた政宗だったが、小十郎は否と云う。

「石田三成を見つけたのは、南東の千木ちぎへ派遣した見回り組です。

石田自身は政宗様との戦いで負った傷が癒えておらず、容易く捕らえられたそうなのですが」

そこで今度は小十郎が眉間にしわを刻む。

「そこへ石田の味方らしき、面妖な男が現れ、あつと言う間に石田を連れ去ってしまったのだそうです」

「面妖な男？　どんな奴だ」

「見た者の話では、全身に包帯をまとい、空を漂う無人の輿に乗り、その周囲に赤子の頭ほどもある大きな玉をいくつも浮かばせた、何とも不気味な男だったそうです」

「……そいつは何の J o k e だ？」

面妖も面妖、まさか部下が嘘の報告をしまいが、幽霊か妖怪かと思つような風体ではないか。

小十郎も今一つ信じかねているのか、首をひねってはいるが、

「ただ、その男を石田は『刑部』と呼んでいたそうです。……豊臣軍にあつて、刑部少輔に任ぜられた者と言えば、大谷吉継がおります」

「大谷吉継……そいつは確か、病人じゃなかったか」

以前は、良策を持つて国を治める賢君と評判の男だったが、ある時不治の病に冒され、表舞台から姿を消したと政宗は記憶している。「左様。しかし、このたびの男が大谷であれば、いかなる力によつてかは分かりませぬが、己で自由に歩く術は手に入れたようだな。

少し調べてみましたが、大谷は石田と懇意にしており、豊臣亡き後、残つた者を束ね、石田軍として組織している由。石田はあの通りですから、実質的な指導権を握っているのは、おそらく大谷の方でしょう」

「H u n ……石田は体の良い御輿の飾りか。道理で、ずいぶん身軽に出歩いたもんだ」

本拠地の大阪から奥州まで、仮にも大将を勤める男が一人で、主の敵を追い続けるなど、尋常ではない。豊臣を失つたばかりの軍の志気にも関わりそうなものだが、そこは大谷という男がうまい具合に計らっているのだろうか。

「ともあれ、石田と大谷は国外へ逃亡した事は確認致しました。これより後、一層監視を強化し、二度とあのような惨事を引き起こさぬよう、手配り致しますとございます」

「ああ、ご苦労だった。……小十郎、ついでといつちや何だが、今日徳川からまた、会見の申し出があったな」

ふと思ひ出して口に出すと、小十郎は居住まいを正した。

「左様でございますな。書の内容は、以前と代わりなく、戦の世を無くす為に手を結ぶというふうなものでしたが」

阿呆の一つ覚えのようだと、と苦笑いをしながら、しかし政宗は以前とはやや異なる思いでその書に目を通した。掛け値無しに本気で絆の力とやらで麻布のように乱れる日ノ本を沈めようというのは酔狂きわまりないが、相手が徳川というところに政宗は興味を引かれた。

「徳川といやあ、以前は豊臣の配下にいたな。あの男……石田三成と交流があったか、知ってるか、小十郎」

「徳川と石田が、でございますか。さて……豊臣の配下にあつて、どちらも武勇を誇つておりますれば、共に要の戦に投じられる機会は多かつたらうとは思いますが」

そこまで調べがついていないのか、小十郎は首をひねる。

「しかしもし豊臣時代に親交があるうと、豊臣の没した後は断絶状態でしょう。何しろ徳川は豊臣秀吉の負け戦で、助勢せず静観を通しました故、裏切り者のそしりを受けております。どんな理由であれ、豊臣を裏切った者を、あの男が許容するとは思えませぬな」

「Hun……」

猪口を畳に置き、政宗は顎に手を当てた。

「なら、石田の敵は武田上杉のみならず、徳川も含まれるつて事だな」

「……石田の敵であればこそ、徳川と手を組む。そのおつもりですか？ 政宗様」

小十郎は主の意図を組み、慎重に言葉を選ぶ。政宗は膝の上に頬杖をつき、ニヤリと笑ってみせる。

「野郎はこのオレに喧嘩を売りやがったんだ。石田に殺された連中の為にも、敵討ちなんてくだらねえ事で、戦を起こそうなんて奴を

放っておけねえだろ」

かつて、人質に捕られた父もろともに敵を射殺し、その後酸鼻を極める戦で心を限界まですり減らした政宗であるからこそ、敵討ちがどれほど徒花か、よく理解している。あの時の事を思い出せば、今の石田を見逃せるわけがない。

「……左様にお考えなのであれば、徳川と同盟を結ぶのは良きお考えかと存じます。」

奥州は織田の侵攻より立ち直ったばかりで、戦にはまだいささか不安が残るところがございます。さて同盟となれば、石田と対するは上杉と武田となりましょうが……」

「上杉は武田のおっさんが倒れてからこっち、すっかり一線から退いて隠居の身。武田は真田幸村を頭に奮闘かむしてるようだが、あいつと同盟するってのは、どうもな」

長年の宿敵として幾度となく対決してきた相手だ。憎んでいるわけではないが、今更手を取り合うという選択肢は、政宗にはない。小十郎もそれは理解していて、頷きながら、

「私の方で調べてみましたが、徳川に付き従う者は日々その数を増している模様。本多忠勝を擁している点も考慮すれば、今の徳川は伊達の同盟相手として、不足はありますまい」

「ああ。このところ屋敷に閉じこもりつきりで、身体がなまっちなつてるからな。ここいらでそろそろ、派手にPartyといこうじやねえか、小十郎」

政宗の言葉に、小十郎はしっかと頷いた。

「政宗様の背中はこの小十郎がお守り致します。存分になされよ」
決まりきった、それでいていつも口にする誓いを新たにしよう
なその言葉に、政宗は微笑をもって応えた。しかし、用件を終え下
がるうとする小十郎に、政宗はもう一つの気がかりを投げつけた。

「小十郎、朝顔はどうしてる」

「っ」

びく、と一瞬震えた後、小十郎の顔からすうつと表情が抜けた。

「……一時は命も危ぶまれるほどでしたが、稲尾の尽力により、持ち直して小康状態となっております」

固い声で応える。政宗は目を細めた。

「あれからもう四日経つが、意識はまだもどらねえのか」

「は……何分、容態は一進一退でありますれば……」

「世話は十分にしているんだろうな？ 小十郎」

念のため確認すると、小十郎は目を伏せながら、はいと言った。

「稲尾の進言もありました故、身柄は元の部屋に戻し、昼夜問わず、付き人をつけております。目を覚ませばすぐ、知らせが参りましよう」

「そうか。ならいい。……身上はどうあれ、あいつは奥州のために命を張ってくれたからな。恩を仇で返すわけにもいかねえ。薬の類^{たぐい}を惜しむな、必ず命を救ってやれよ」

「……は。ご命令とあらば、しかと心得ました」

「……」
小十郎は無表情だが、苦しそうだ。先ほどまでとは一変、ぴりぴりと張りつめた空気を発する小十郎を、政宗は哀れに思った。

「……小十郎。お前、朝顔に惚れてるのか」

このままでは、生真面目な腹心がいずれ壊れてしまつかもしれない。それを危惧し、からかう時以外では触れる事を避けていた質問を、政宗はあえて口にする。

「……滅相もございません」

びしり、と音がしそうなほど緊張しながら、小十郎は固く言い放った。無表情は崩れたが、苦悩の色が強く浮き出、滅多に見ないような険相になっている。無理はするな、と政宗は氣遣った。

「惚れちまったなら、それは仕方がねえだろ。自分の気持ちを押しつぶすような真似はするなと、言ったのはお前だぜ、小十郎」

かつて苦難に面した時にかけられた言葉を返してみたが、小十郎の頑なな態度は崩れない。

「この小十郎が何よりも尊ぶは、政宗様の御身のみ。女人にうつつ

を抜かず暇などございませぬ。まして、あのようなしのびの者に心を許すなど、天地が逆さになってもあり得ませぬ」

「……小十郎」

政宗は小十郎の、一種狂信的なほどの忠誠心を知っている。自身が優れた力を持ちながら、下克上を企むでもなく、政宗の器量を信じて、ただひたすらにその身を捧げる忠臣を、政宗は己の失った右目とも、兄とも思い、大事にしている。

だが、だからといって、小十郎自身の望みをも捨てさせたいわけではなかった。

「……朝顔に騙されたのが、よほどShockだったらしいな」

「っ、政宗様」

怒りにも似た苛立ちを声に滲ませ、政宗は立ち上がった。聞き捨てならない、と目を見開く小十郎に向け、

「今のお前は視野が狭くて、てんでなつちやいなえぜ。Partyもいいが、まずはためえの始末をつけてきな。それが出来なきや

今のお前に、俺の背中が守れるのか？」

政宗は冷たく聞こえるほど強く言い放つと、部屋に入り、ぴしゃりと障子を閉めた。そのまま外の気配を窺うと、

「……御前、失礼を」

間を置いて、小十郎の影が動き、静かに廊下を立ち去った。それを隻眼で見送った政宗は、ため息をついて床の徳利を拾い上げた。くいと煽って残りを干し、

「Get up early、朝顔。……ああして、お前を待つてる奴がいるんだからな」

何も見えない、真っ暗。自分の体が消え失せて、心だけ浮いているような感覚だ。時に見える世界はぐるぐる回っていて、何一つ捕らえられない。気持ちが悪い。吐きそうだ。頭蓋をヤスリでこすられているようで、激しい痛みにも何もかも投げ出したくなる。

今にも自分が全て無くなってしまいそうで怖い。けれど嬉しい。このまま消えてしまえたら、どれだけ幸せだろう。そう思う合間に、光の瞬くがごとく、懐かしい光景がちらつく。これまで目にしてきたもの全てが一時とどまってはすぐに消え去り、目まぐるしい。

死ぬんだろうか。

無感覚と激痛に翻弄されながら、うつろに思う。自分は死ぬんだろうか、だからこんな昔の事を思い出すのだろうか。それなら、早くしてほしい。

もう、何も見たくない。

次々現れる光景から目をそらしたくてたまらない。嫌だ、何も見たくない、全て消えてしまえばいい。

誰か

意識は再び奥へ押し込められ、急速に遠ざかっていく。闇の中でもがきながら、叫ぶ。

早く、とどめを刺しておくれ

その願いを最後に、全てが黒に塗りつぶされた。

.....

夜の森は静寂に沈んでいる。月が姿を隠した今宵は、一寸先も見えないような暗闇だ。が、自分には何の障害にもならない。なぜなら闇は己が住まう場所だから。

「シッ」

口から鋭く息を吐きながら木の枝を蹴って、体を前に押し出す。

枝葉をのばす木々の黒い影が、視界の中で線となって前から後ろへ流れ去り、次々と風景が切り替わっていく。

びゅうびゅう鳴る風の間へ滑り込むように、しばし空中を跳んだ後、目の前に次の枝が迫ってくる。

「！」

とその時、違和感が警鐘を鳴らす。ちらつと左方へ視線を流すと、同じように樹上を移動しながら、こちらの後をついてくる人影が見えた。

(チツ)

舌打ちしつつ、枝に着地してさらに跳ぶ。空を舞いながら後ろの気配を探ったが、まだ、こちらが気づいたことを察した様子はない。ならば、と次の着地地点に定めた木に向けて、体勢を調整する。かくんと高度が下がり、体は枝に届かず、目前で落ち掛かった。

そのまま落下する、というところで腕を伸ばし、枝をつかんだ。しゅるつと撫でるようにその手を下方向に滑らせ、枝を軸に体を回転させる。視界がぐるりと上下逆さまになる中、宙で身をひねって背後に向き直った。そして枝の上に体が浮かんだ瞬間、交差させた手中に針を握り込むと、

シュッ！

一気に腕を振り、後に続く影に向かって放つ。

「うわぁっ!?!」

幾本もの針が吸い寄せられるように影を襲い、悲鳴、続いて地面に落ちるどどん、という派手な音が響いた。

それを確認し、枝を蹴って音の源へ向かうと、地面に着地する。

そして、イテテと呻く人影を見て、呆れ顔になってしまった。

(やっぱり、こいつか)

腰に手を当てて見下ろすこちらを見上げ、そいつは口を尖らせる。「あつぶないなあ、姐さん。いきなり攻撃してくるこたないじゃないか」

「佐助。あんた、こんなところで何してるんだい」

地面にうづくまるのは、緑と茶のまだら模様を描かれた忍び装束に、狐色の髪を短く整えた、十四、五の子供だ。まだ痛みに顔をしかめながら、少年　佐助は立ち上がる。

「何って、姐さんの手伝いしようと思っただよ」

佐助の口調は軽快で屈託がない。一方、こちらは自然と不機嫌な声になってしまふ。

「……そんな事、頼んだ覚えはないよ。お頭があんたに命じたのかい？」

「いや。俺様の気遣いだよ。俺様、ちよーう気が利く男だからさー」

「……」
思わず、ふーっ、と大きなため息をついてしまふ。筋は良いのにこの少年は、勇み足がすぎる。あんた馬鹿かい、と蔑む言葉が口をついて出る。

「佐助、あたしは別命あるまで待機と言ったはずだよ。これが初仕事のくせに、あんたみたいなガキが、あたしの何を手伝えるって言うんだよ」

「あつ、それ差別だぜ、姐さん！　知ってるだろ、俺様、下忍の中じゃ一番なんだぜ。だからお頭だつて、今回の仕事を任せてくれたんだ。お前なら出来るはずだつて太鼓判押してさ。」

だからさ、ほら、姐さんはもつと俺様使つておこつよ、損はさせないって」

「……あんたねえ……」

まるで商人の口上のごとく、身振り手振り交えてまくし立てる佐助を、呆れ半分感心半分で眺める。

確かに、佐助の技術が若いしのびの中で際だっているのは本当だが、どうやら初仕事でずいぶん力が入っているらしい。

（早く手柄を立てたいってのも、分からなくはないけどね）

だからといって、こんな我が儘を見過ごすわけにはいかない。佐助がなおもまくし立てるのを、

「黙りな」

「えっ」

眼前に手を突きだして止めると、すっ、と気を張る。一転、刺すような気迫が体から吹き出し、それに圧されて、佐助は硬直した。虫を針で縫いつけるように、佐助をその場に張り付けたまま、

「命令一つ聞けない馬鹿を、ほいほい連れて歩けるわけないだろ。帰りに、今回だけは見逃してやるから」

ただし、と氷の声音で言う。

「次同じ事をしたら、今度は外さない。分かったね？」

「っ！」

手首をひねって針を掌中に生みだし、佐助の眼球に触れそうなほど、間近まで針先を寄せる。さあっと佐助の顔から血の気が引いた。こぼれ落ちそうなほど目を見開き、最近出てきた喉仏をこくり、と上下させ、

「わっ……分かったよ、桔梗姐さん。もう、こんな事しない。約束する。本当、本当だって！」

ひきつった声で答える。それを射すくめる眼差しでじいつと見つめた後、姐さんと呼ばれた女、桔梗は、針を引いた。脱力して胸をなで下ろし、ひええ、とため息をつく少年。

(全く、手のかかる奴だよ)

悪い子ではないのだ、ただ調子に乗りやすいだけで。愛嬌があるこの少年を気に入ってはいたので、桔梗は苦笑いすると、

「焦らなくても、必要になれば、嫌でもあんたを使うよ。それまで大人しくお待ち」

ぺちん、と少年の頬を一つ、軽く叩いた。そしてそのまま背を向け、

「ふっ」

一つ息を吐いて地面を蹴り、頭上高く生い茂る木々に向かって跳ぶ。

姐さん、と佐助の呟く声が、鋭く発達した桔梗の耳に届いたが、それもすぐに遠ざかっていった。

夜中駆け回っていた桔梗は朝方屋敷へ戻り、半刻寝た後、起きた。すぐに身支度を整えて、部屋を出る。

「鷹通様、お目覚めの刻限にございます」

そうして、途中あちこちに寄りながら、まだ人もまばらな廊下を通って行き着いた先は、屋敷の主の部屋だ。外から声をかけてから障子を開くと、広い部屋の真ん中にこんもり盛り上がった布団があり、

「う……むう……もう、朝か……」

もそもぞ動いたかと思えば、掛布の下から男がはいずり出てきた。ふああ、と大きなあくびをもらすその面相は、まるでヒラメのように目が細く、お世辞にも美男とは言えないが、いかにも人が良さそうだ。

「今日の朝餉は鮭が出るそうですよ。お早く、お起きになられてはいかがですか」

桔梗は部屋に入ると、てきぱき動いた。あぐらをかいた鷹通の前に水桶を添え、着替えをその側に置き、布団を畳む。

「鮭か、久しいな。ちょうど、そろそろ食べたいと思っていたぞ」

桔梗と対照的にのんびりした仕草で、鷹通は顔を洗い始める。手を水に浸しながら口にした言葉はしかし、

「それで、昨夜は如何した。鳴竹の様子は」

その悠長さには似合わない空気を纏っていた。桔梗は手を休めぬまま、淡々と答える。

「鳴竹はやはり近く戦をする算段のようです。特に秘するよう注意を払っておりましたが、城に武器や兵を続々と集めている模様」

「ふむ」

「さらには先日、観梅の宴と称して一族郎党を寄り集め、連判状を記したようです。決して裏切るまいと互いに誓い合い、固く結束を

結んだとか」

「それはいいよ、穏やかではないなあ」

鷹通は顔の水を拭い、立ち上がった。すぐさま桔梗が近寄り、その着替えを手がける。腕を上げた下でくるくる動く桔梗を平目で追いながら、鷹通は続けた。

「しかしそれならば、証拠が欲しいな。どこの誰それが荷担していると分かれば、よりよい」

「はい。近くまた集まりを持つようですから、その際に書状を手に入れましょう。昨夜はそこまで探れませんでしたので」

「うむ、うむ。頼んだぞ、桔梗」

鷹通は朗らかに笑い、桔梗の肩をばんばん、と叩いて労った。

「しのびの里でも特に腕が立つと聞いてはいたが、お前は本当に頼りになるな。助かるぞ、桔梗。近く戦になるやもしれんが、その時もまた、我ら佐久家を助けて欲しい。報償は望みのままに与えるでな」

その声は真摯で、優しさに溢れている。しかしそれは、自分に与えられるべき分を超えているものだ。鷹通の着替えを終えた桔梗は、恐れ多い事で、と静かに答えた。

「私は一介のしのび、命ぜられた事に応えるだけの草に過ぎませぬ。ご厚情は光栄に存じますが、過ぎた褒美にございます。なにとぞ、ご容赦を」

固辞すると、鷹通は残念そうに眉根を八の字にした。

「そうか？　そこまで厭わずともよかるうが……まあ、良い。わしは働きに見合ったものを与えたいのだ。気が変わったらいつでも言うがよい」

「はい、有り難く存じます。……では、今朝餉をお持ち致します」
深々と頭を下げた後、桔梗は鷹通の部屋を辞した。

(ふう……さすがに少し、疲れたね)

日が昇り、陽光が目刺さる。ほぼ徹夜の身には、さわやかな朝

の気配はやや荷が重い。そんな事を思いながら台所へ向かって歩いていると、

「おっ、桔梗ではないか。早いな」

庭の方から声がかかった。

さつとそちらへ顔を向けた桔梗が見たのは、庭先で諸肌を脱ぎ、木刀を手にした若い男だ。筋肉の引き締まった胸にびっしり汗をかきかき、朝から鍛錬をしていたらしいその男は、鷹通の息子、頼鷹よりたかだ。目が合うと、父と似ず男らしく引き締まった顔をニツと笑いに変え、

「朝に見るあだな美女というのも、乙なものだな。うーむ眼福、眼福」

からかいを口にする。調子のいい軽口に微笑して、桔梗も答えた。「頼鷹様は鍛錬にご熱心でいらっしやいますね。お水でもお持ちしましょうか」

「うむ、そこにあるので持ってきてくれ」
廊下に置きっぱなしになっている水筒を示されたので、桔梗は草履を履いてぱたぱたと頼鷹へ歩み寄った。どうぞ、と差し出したところで不意に腕を捕まれ、ぐいと抱き寄せられる。

「あつ、頼鷹様」

「うむ、今日も良い抱き心地だ。身に染みるわ」 そういつてぎゅとと抱擁するものだから、汗に濡れた分厚い胸板に押しつけられて、ぐつと息が苦しい。しかしそれで嫌だ、気持ち悪いと思わないのは、無駄な肉のない逞しい胸から匂い立つ男臭さに思わずくらくらしてしまうのと、頼鷹の抱き方が、不思議と嫌らしさを感じさせないからだ。

「つくづく、親父殿には勿体ない。どうだ桔梗、今日こそ俺と一夜の夢を見ようではないか、ん〜」

そんな事を軽い口調で言いながら、目を閉じて顔を近づけてくるのだが、

「お戯れはそこまですなさいませ、頼鷹様」

「むうっ」

その唇に水筒の吸い口を差し込み、桔梗が身を引けば、太い腕は容易くほどけて、決して無理強いしない。

「んぐ……なんだ、今日も連れないなあ。戯れではないというに」
水筒を抜いた口を尖らせる表情は、まるで拗ねた子供だ。思わず笑いを漏らして、

「それでは尚のこと、お心改めなさいませ。頼鷹様のお相手をつとめるほど、桔梗は身の程知らずではございません」

「親父殿の相手はするのにか？ 俺の方が良い男だろうに、変わった好みだなあ、お前は」

「さて……殿方の魅力とは、様々でございますから」

実際鷹通と理無い関係になっているわけではないが、男女の仲と勘違いされたほうが、しのび仕事には都合がいい。わざと誤解を招く物言いをすると、頼鷹は「むう、女心はわからんなあ……」と首をひねったが、それ以上しつこく絡んではこない。

(こつという嫌味のないところが、魅力的なお人なんだよねえ)

やや強引なところもありはするが、この優しさはやはり父親似なのだろう。言い寄られて悪い気もしないので、桔梗はつつい、親密なふれ合いも許してしまう。しかし自分は仕事でここにいるのだ。男につつつを抜かす訳にもいかない。

「それでは、鷹通様の朝餉を準備せねばなりませんので、失礼致します」

早々に下がろうとする。頼鷹はそうか、と気を取り直して笑いかけた。

「気が変わったらいつでも俺の床に来いよ、桔梗。待ってるからな」
最後にもそんな軽口を叩いて、しょうがないお人だ、と桔梗の笑いを誘うのを忘れずに。

「ううむ、たまらんなあ……」

きびきびと去っていく桔梗の後ろ姿を眺めやり、しみじみと呟く

頼鷹の姿を見下ろし、

「頼鷹様って、趣味悪いなあ……」

思わず呆れ声を漏らすと、

「おう、佐助か。お前、いつからそこにいたんだ？」

聞きつけて、頼鷹がこちらを見上げてきた。ようやく、気づいたか。松の上に腰掛けた佐助は、着物の裾をさばいて足を組み、頼杖をついた。

「頼鷹様が、姐ねえさんを抱きしめたところからだよ」

毎日毎日、良く懲りもせずちよっかいをかけるものだ。頼鷹は照れもせず、からから笑ってみせる。

「はは、そうかそうか。いやあ佐助、姉者は本当に良い女だな。お前は果報者だぞ」

「はあ、そうすかねえ」

城内で桔梗と佐助の正体を知るのは、城主鷹通のみ。他の者には女中とその弟という触れ込みで、桔梗は鷹通、佐助は頼鷹の側仕えをしているので、頼鷹は桔梗の弟として、自分を扱っている。

「ああそうだぞ。よく考えてみる、あの立派な胸、ありやあ他じゃ見られない逸品だ。抱きしめると、とろけるように柔らかくて、しかもつちりしていて、それがぎゅーっと俺の胸元でつぶれてむっちり広がるのが、本当にたまらん。

それにあの尻だ、きゅっとながっていて実に良い形だ。歩くときもこう、腰をふりふりさせていくのだから、いかにもそそるじゃないか。ぜひと一度、あの服の下の桃尻を拝謁したいもんだなあ。

あれは子を山のように産むぞ」

「……あのさあ……ちよーっと下品じゃないの？ 頼鷹様。仮にもお武家の若様がさあ」

手で桔梗の身体の線を再現までして、嬉々として語る頼鷹に、佐助はあーあ、と口を曲げてしまった。

筋骨逞しく男らしく、何事にも大らかな頼鷹に、佐助は親近感を持っており、小姓の身でありながら、こうしてうち解けた物言いを

許されるほど、親密になつてゐる。

が、しかし。大変な女好きで、しかも桔梗へ熱心に言い寄つてゐるところは、感心できない。

「なあに、貴賤問わず、男が女を語るのはいつも同じようなものよ。言葉でいくら繕つたところで、殿様も農民も、する事は同じ。ならば、気取るのも時の無駄というもんだ。」

なあ佐助、お前も姉者はたいそうな女と思つた事はあるだろう？」
それには苦笑して、そりやね、と佐助は肯定した。そらみると頼鷹は呵々大笑したが、「たいそうな女」の意味は、頼鷹のそれとは全く違うものだった。

（あんなおつかない女、そりや滅多にいないよ）

佐助の知る桔梗は、里でも一目置かれるほど腕の立つ中忍であり、その力量はお頭からも絶対の信頼を寄せられているほどである。

佐助が、実際に仕事をしている桔梗を見るのは今回が初めてだったが、なるほどその身のこなしい、佐助の動きを完全に縫い止めたあの殺気といい、噂に違わぬ凄腕だと再認識したばかりである。（あつちの姐さんを知つたら、頼鷹様もしつぽを巻いて逃げちまうかもなあ）

あるいは、戦場で鬼鷹と呼ばれているこの男なら、力づくで押さえつけられるかもしれないが。そんな事を思いながら見下ろす先で、頼鷹は水筒を干し、素振りを再開した。

「まあ、そのうち、口説き落とすさつ。ああいう、上玉を、この腕に、抱くことが出来ればつ、死してなお、悔いはないつ」

「またまた……そんな縁起でもない事を」

大袈裟に物を言うものだと呆れながら、地面に飛び降りた佐助が言う。冗談じゃあないさ、と頼鷹は顔を引き締めた。

「近い内に、鳴竹との戦が、起こりそうだから、なつ」

「えつ？」

どきつ、と心の臓が跳ねる。自分たちが佐久に雇われたのは、その鳴竹の動向を探り、戦に備える為だ。

しかしその詳細は桔梗と鷹通、そして家臣団が内々に語らつてい
るらしく、佐助はもちろん、頼鷹にさえ、まだ話は来ていない。
(なのに、何で知ってるんだらう)

自然と探る目になってしまったのか、頼鷹は素振りをやめ、おい
おいなんて顔だ、と笑った。

「親父殿らがなにやらごそごそ動いているからな。いま佐久に喧嘩
を売ってきそうなのは鳴竹に違いない。先の戦で俺が長男を殺した
から、今頃恨み骨髓で刃を研いでいるだらうよ」

そしてずかずか近づいてくると、

「わっ!？」

皮の固い大きな手で佐助の頭を掴んで、わしわし乱暴に撫でる。

「どんな戦だらうと、俺は死なん。だからそう案ずるなよ、佐助。
今度の戦とて、一番手柄を立てて親父殿を喜ばせて差し上げるさ」

「わ、わかった、分かりましたよ、だから離してっ」

ぐわんぐわんと振り回され、佐助は思わず悲鳴を上げた。軟弱な
奴め、と笑いながら佐助を解放した頼鷹は、

「おお、そうだ、佐助。お前に用があるんだった」

ふと思い出した様子で、廊下へ近寄った。そしてそこに置いてあ
る脇差しを手に戻ると、

「これをやるう、佐助」

無造作に差し出した。まだ目が回っていた佐助は意味が分からず、
「は、え? 何で?」

思わず無遠慮に問い返してしまふ。頼鷹は笑って、

「もし今度戦があれば、俺はお前を連れて行こうと思う。小姓とし
て俺の側にいろ、そして俺の活躍ぶりをその目に焼き付ける」

佐助の手にぎゅっと刀を押しつける。その重さによろやく我に戻
り、佐助は戸惑った。

「えっ、でもこんな……貰えませんかよ、こんな恐れ多い」

まさか愛刀を下されるとは思わなかったので、慌てて返そうとし
たが、頼鷹は受け取らない。腕を組んで拒み、笑う。

「佐助、お前は頭も、剣の筋も良い。お前の愛嬌も気に入っている。だから俺はお前を育て、ゆくゆくは近習に取り立てようと思ってるのだ」

「えっ……」

「男子たるもの、この戦国時代に生まれて名を成さぬなど、ありえぬことよ。佐助、お前は小姓などで終わる男ではない。もしその気があるのなら、本気で俺に仕えてみないか」

頼鷹の顔からはいつしか笑みが消え、怖いほど真剣な表情が浮かんでいる。佐助は戸惑い、脇差しに目を落とした。

（名を成すなんて、俺はそんな事）

考えたことがないかといったら、嘘だ。しのびとして育てられた身なれば、この初仕事で手柄を立て、上の者に早く認めてもらいたいと願っていた。

だが、これは好機ではないか。今のままでは自分を子供のように扱う桔梗の下で、いいように使われるだけかもしれない。それならば一か八か、戦へ出て己の腕を試すのも、一つの手ではないか。

胸を張って立つ頼鷹の威風堂々とした姿を前に、佐助はぎゅっと鞘を握りしめた。

「あの……か、考えさせてもらって、いいですか。その、姐さんにも、相談したいし」

かろうじてそう言くと、頼鷹はふっと顔を和らげ、

「うむ、そうだな。無理はいわん。だがもし望むのなら、俺は喜んでお前を迎えるぞ、佐助」

そういつてまた頭に手を置いてきたが、今度はただ置くだけで、包み込むような優しさを感じる。

「……ありがとうございます。頼鷹様」

佐助はその大きさと温もりに、どきどきと胸の高鳴る思いで、小さく礼を口にした。

小姓の仕事を終え、頼鷹の前から辞した後、人も寝静まった夜分、こつそり部屋を抜け出した佐助は、お気に入り入りの松の枝に陣取った。そして、頼鷹から下賜された脇差しを両手に握り、ゆっくりと鯉口を切る。

きい……ん……。

澄んだ音を立て、鞘を滑りながら刃が姿を現す。刃紋も見事な刀は使い込まれているが、手入れも十分にされており、刃の上に月の光を走らせて輝く。

するすると鞘を抜けた刃を縦にして、まじまじ見つめれば、佐助の顔が鮮やかに映し出されるほど、清かに美しい。

「……大層なもの、もらっちゃったなあ」

感嘆のため息を漏らしながら、佐助はしみじみ呟いた。いくら頼鷹の気前がよくても、簡単に手放すような代物ではない。

(どう、するかな)

落ち着かなく刃を返しながら、佐助は悩む。

手柄は立てたい。しかし、今のうちに桔梗の指示を待つばかりでは、早々活躍など出来まい。それなら頼鷹の申し出を受け、かの人を主と定め仕えたほうが、よほど芽がある気がする。

(でもそれって、抜け忍になるってことだよなあ)

しのびの掟は厳しく、決まりに背いた者への処罰は重い。分けても、里を抜けた者へは、死をもって購いを求めるのが普通である。それは己らの手の内が外に漏れるのを防ぐ為でもあるし、また、他のしのび達への見せしめでもあった。

(もしここで俺が抜けるっていつたら……討ち手はやっぱり、姐さんなんだろうな)

その状況を想像するも、佐助はぞつとして思わず体を震わせた。先だって命令を無視した佐助に、目を抉るといわんばかりに針を

突きつけて脅した桔梗の事だ。佐助の命など、蠟燭の火を吹き消すように容易く、奪ってしまうに違いない。

「じゃあ、どうすりゃいいのかなあ……？」

頼鷹の申し出は嬉しい、しかし桔梗が怖い。刀を鞘に納めながら難しい顔で呟いた時、

「何がだ、佐助」

「うわあっ！」

不意に声をかけられ、思わず叫んでしまった。ぱっと見下ろした先にいたのは、女郎花色の鮮やかな髪を長く伸ばし、黒地に星を散らしたしのび装束に身を包んだ少女だ。

「ああ、かすが か……あー、びっくりした」

桔梗で無かった事にほっとして、佐助は心臓の跳ね上がった胸を押さえた。少女しのび、かすがは、流麗な眉根を寄せて不機嫌な表情になる。腰に手を当て、

「何だ、その驚き方は。また企みごとでもしていたのか」

「いやだなあ、そんなのしてないって」

「どうだか。お前の事だ、どうせ好き勝手に遊びほうけて、桔梗ねえ様に迷惑をかけているんだろっ」

それは、あながち間違ってもいない。あははーと笑ってごまかした佐助は、隠すように脇差しを後ろ帯に差した。

かすがは、最近育ち始めた胸の前で腕を組み、フン、と鼻を鳴らす。

「お前が何をしようとする私には関係ないが、ねえ様の足手まといになる事は許せないな。お頭も、どうして今回の任務にお前などを選んだのか……」

「そりゃあ、俺様が優秀だからだろ？」

しれつと言いつつ、かすがの眉間のしわがぎゅーっと深くなる。かすがより佐助の力量が勝っているのは事実だが、それを否定出来ないのが悔しいらしい。佐助がこの仕事へ来る前にも散々拗ねていたし、今も「私だって修行を積みばお前になど……」とぶつぶつ唸

っている。

(負けず嫌いだなあ、本当に)

そういうところも可愛いと思ってしまうのは、惚れた欲目だろうか。佐助は地面に舞い降り、思いを寄せている少女のもとへ歩み寄った。

「それはともかく、かすがは何しに来たの。もしかして俺様に会いに来た？」

わざと間近に顔をのぞき込むと、かすがはカッと赤くなって後ずさる。

「ば、バカ言え！ 何でお前なんかに、わざわざ！」

「やだなあ、照れなくていいのに」

「照れてなどいないっ！ 私はお頭様の文をねえ様へ届けに来たんだ！」

「あ、そゆこと」

かすがは里のお頭と桔梗の連絡係をつとめており、たびたびこの屋敷に訪れている。かすがの姿を認めた時から、用件は見当がついていた佐助だが、つい雑談を楽しんでしまった。

「なら、早いとこ行った方がいいんじゃないの。遅くなると姐さんに叱られるぞ」

「お前が無駄話をするからじゃないかつ」

「話しかけてきたのはそっちだろー」

「どっちもどっちだね。あんた達、静かにおしよ」

「！」

「きゃっ！」

不意に滑り込んできた声に、今度はかすがと佐助二人して飛び上がってしまった。振り返ると、桔梗が足音も立てずにこちらへ歩み寄ってくるところだ。近くで足を止めると、

「こんなところでべらべらと、お喋りしてるんじゃないよ。人に見られたらどうするんだい」

呆れ顔で腕を組む。迫力ある存在感の胸が、ずっしりとその上に

乗るのを見て、佐助は思わず（なるほど、あれは逸品なんだろうな）と考えてしまった。……最近、どうも頼鷹に毒されている気がする。「も、申し訳ありません、桔梗ねえ様！ あの、お頭様より文をお預かりして参りました！」

慌てたかすがは畏まり、さっと書状を差し出した。

「ああ、ご苦労様」

それを受け取り、その場で開く桔梗。文に目を走らせる上司を前にして、がちがちに緊張するかすがと、頭の後ろで腕を組んで気楽に構える佐助。

（おい、しゃきつとしないかつ）

その不真面目さにかすがは目をきつくして、こちらのわき腹をつついたが、佐助は気にしない。さてお頭は何を言ってきたのかな、と気楽に構えていたが、

「……………」

文面を追う桔梗の表情が徐々に厳しくなっていくのを見て取り、ざわりと胸が騒いだ。

（何だ？）

今まで何度もお頭からの文が来ているが、桔梗がこれほど深刻な表情をしているのは初めて見る。何が書いてあるのだろう、と気にかかり、佐助はつま先立ちになり、気づかれないようにのぞき込もうとした。しかし、

ポッ！

不意に音を立てて文に火がついた。橙色の光はあつと言う間に紙を飲み込み、跡形もなく燃やし尽くしてしまう。

「かすが」

残った灰を払い落としながら顔をあげた桔梗の表情に、先の深刻さは影も残っていないかった。

「お頭に了解したとお伝えしておくれ。手ばかりはない、ともね」「はいっ、分かりました！ ではねえ様、失礼致します！」

勢いよく返事をしたかすがは身を翻し、あつと言う間に姿を消し

てしまう。

(あらら、つれないなあ)

「姐さん、お頭は何だつて？」

もう少し語りたかったのに、と名残惜しく思いながら尋ねる。桔梗は一瞬間をおいた後、ひよいと肩をすくめた。

「そろそろ戦が起こりそうだから、つとめを果たせと発破をかけてきたよ。全く、口うるさい事だね」

(嘘だ)

先の深刻さに見合わない軽口に、佐助は直感的に不審を覚えた。ただ活を入れる為の文を、頭がわざわざ送って寄越すはずがない。それを見て、桔梗が難しい顔をするはずもない。

(きつと、何かある)

頼鷹も、近々戦があるだろうと言っていた。頭が何か命令をしてきたのであれば、きつとそれについてだろう。

「あの、姐さん。俺に何か出来ることありますか」

言葉遣いも改めて言うと、屋敷に戻ろうと背を向けた桔梗が足を止めた。肩越しに振り返り、口を開き、しかし、

「……佐助。その腰のものは、何だい」

全く違う事を問い返してくる。

「あつ」

脇差しのことをすっかり忘れていた佐助は、ハツとして柄に触れた。そうだ、まずこれの事を話さなければならなかったのに。

「これは、その……頼鷹様に、いただきました」

「頼鷹様が、どうしてあなたに？」

言いよどむ佐助に対して、桔梗の声は落ち着いたもので、それがかえって怖い。攻撃の意志ありと取られてはかなわない、と佐助は刀から手を離し、唾を飲み込みながら答える。

「……今度、戦が起きた時、俺を連れて行く、と仰ったんです。その……ご自分の従者に取り立てたいと」

「それは、これから先もずっと側仕えさせたい、って事かい」

「……はい」

叱られるだろうか。いやそれくらいならまだいい、佐助自身もこの話に引き寄せられていると桔梗が知ったら、この場で手打ちにされるかもしれない。

緊張に全身の神経を張りつめ、桔梗がもし打ちかかってきても、せめて一太刀は返したいと、密かに身構える佐助。

「……」

その前で桔梗は、黙って佐助を見つめた。ざあ、と風が吹き抜け、緩く束ねた髪をふわりと撫でていく。

長いまつげに縁取られた目を細め、静かに、まっすぐこちらを見つめてくる様子は、まるで精緻に作られた人形のように美しく、それでいて、どこか空恐ろしい。

「……っ」

どこにも隙のないその立ち姿につい気圧され、佐助は目をそらしてしまった。だめだ、とても敵う気がしない。こちらが怖じ気づくのと同時に、桔梗が口を開いた。

「そうかい。頼鷹様がお望みなら、仕方ないね」

「……えっ？」

思いがけない言葉に再度視線を向けると、桔梗はもう一度肩をすくめた。

「そういう事なら、あなたは頼鷹様に随行するんだ」

「え……いい、いいの？ 姐さん。だって、頼鷹様に仕えるなんて事になったら、俺、里を出なきや……」

と、桔梗が目丸くして、顎に手を当てて笑う。

「おやま、あんた抜け忍になるつもりだったのかい？ そりゃ何の断りもなく自分で主を決めちゃあ、お頭だって放っておかないだらうけどさ。きちんと契約を結ぶのであれば、構わないだろ」

「……あ、そうか……」

桔梗と対しなければならぬのでは、という事しか考えていなかったが、確かにそれなら問題はない。

「なら、頼鷹様からお頭をお願いしてもらえば……」

「そいつは、後におし」

ほっとして胸をなで下ろした佐助に、桔梗がぴしゃりと言った。
ついでくっつきとしてしまうこちらを冷めた目で見やり、

「近々、大仕事がある。身の振り方を決めるのは、その後にするんだね」

「……大仕事？ って何なの、姐さん」

「そいつは、いずれ分かる。……それまでは、あなたの素性を鷹頼様に秘しておきな。もしあんたが里に帰る事があれば、正体を知ってる人間は少ない方がいいからね」

「あ……はい」

確かに、もしここで雇われないのであれば、身元が無闇に知れると、今後の仕事に障るかもしれない。

納得して頷く佐助に対し、それからもう一つ、と桔梗は言葉を続けた。その声の温度が不意に、すう、と下がる。

「情を抱くのは、おやめ」

「え？」

「あたし達は人じゃない、草だ。草に情はいらない。あんたがこれから先もずつとしのびであり続けるつもりなら、人の心は捨てな」

「……姐さん」

全く血の通わない言葉に、冷たい寒気が走る。だが、同時に反発も覚える。

桔梗だつて頼鷹とは仲良くしているではないか。城主の鷹通にだつて、ずいぶん気に入られているようだし、桔梗も誠意をもって尽くしているではないか。

（あれが情じゃないっていうなら、何なんだ）

「分かったね。肝に命じておくんだよ」

しかし桔梗は、佐助に発言を許さなかった。遮るように言い捨て、声をかける間も無く去ってしまう。

一人残された佐助は、

「……何だよ、それ。そんなのおかしいだろ」

釈然としない思いで呟き、視線を下げた。

腰に差した脇差しはずしりと重く、それはそのまま頼鷹からの信頼の重さのように感じられる。それを嬉しいと思うことも許されな
いなんて、納得できない。佐助は桔梗の去った方角を睨み、ぎゅっ
と口を横に引き結んだ。

桔梗のもとへお頭の文が届いてから、二週間後。鷹通により陣觸れがなされ、物々しい空気が城内を包み込んだ。

「今回の初手は、奇襲作戦だ。鳴竹が打って出るより先に、まずこちらが先手を打つ」

甲冑の着込みを手伝う佐助に頼鷹が語るのは、こうだ。手の者に調べさせたところ（これは桔梗の事だろう）、鳴竹は佐久の城より北方へ兵を伏せ、気取られぬよう密かに進軍させて、一気に城を攻め落とす算段らしい。

鳴竹に和した友軍はその援護にまわり、こちらの退路を塞ぎ、一兵たりとも逃すつもりはないようだ。しかしそれを翻せば、鳴竹の軍が崩れれば、小国同士が利をもってつながっている友軍はちりぢりになるはずだ、とは桔梗の弁である。

「佐久の城は兵糧はまだしも、水が乏しい故、籠もるのには向いてはおらん。一度籠城戦に追い込まれば、座して死を待つようなもの。なればこそ、佐久はこれまですべて、野戦で勝ちを得たのだ」
身につけたばかりの籠手の具合を確かめ、腕を曲げ伸ばししながら、頼鷹は続ける。

「俺もこんな狭苦しいところでじっとしているのは、性に合わんかな。連中が佐久の地に足を踏み入れる前に蹴散らして、かえって向こうの城を落としてやる腹積もりよ」

「またまた……いくら少数精鋭といたって、城一つ落とせるわけないでしょーが」

分厚い胸板に纏った胴の紐を、背伸びして締める佐助が言うと、頼鷹はかか、と笑った。

「おう、鬼鷹を舐めるなよ、佐助。その気になれば城の一つや二つや三つ、いくらでも落としてやるわ」

「へいへい。じゃあ俺様は、一步下がってついていかせてもらいま

すよ。……ほい、終わりつと」

軽口を叩いて頼鷹の肩に袖をつけて、下がって改めて見る。

元々体が大きく見栄えの良い頼鷹だが、甲冑を身につけるとなるほど、鬼鷹の名に相応しく、威風堂々として凜々しい。男の佐助も惚れ惚れとするような武者姿だ。

「うむ、よし。佐助は手際が良いな」

着付けの具合を確かめて、満足そうに頷いた頼鷹は、佐助を見下ろした。そして、

「では次はお前の番だ、佐助」

にと笑ってそう言ったので、

「……へ？」

佐助は何のことかと目を丸くしてしまった。

朝靄のかかる道中、息を潜めるようにして男達が行く。

鎧がこすれ合う音がちりちり鳴り、馬と人の足がじめついた地面に密かな足跡を残していく。

無言のまま進む軍の中心にあるのは、一際大きい葦毛の馬に乗った頼鷹。常ならば陽気な笑みが浮かぶその表情は引き締まり、鋭い眼光は霞がかつた道の先を油断無くにらみつけている。

その脇を固める近習もまた、険しい表情で歩を進めていたが、中に一人、年若い少年兵が混じっており、その顔は緊張と困惑でこわばっていた。

（あー、まさかこんな事になるとはなあ……参った、具足ってこんなに動きにくいもんなのか）

その少年　佐助は、着慣れない鎧でこすれた首をさすり、ため息をもらしていた。

桔梗の言いつけで、佐助は己の身分をまだ、頼鷹へ明らかにしていなかった。それ故に随行するならば、とこれまた頼鷹から下賜された鎧一式を、身につけざるを得なかったのだ。

（これじゃあいざって時、うまく働けないかもしれないな）

しのびの身上は身軽さであって、こつも防具を着込んで意味がない。

武士ほど剣術に優れているわけでも、頼鷹のごとく鍛え抜かれた体を持っているわけでもないのだから、いざ戦となれば命取りにもなりかねないだろう。

(しゃーない、その時は紐を切つちまうか)

着付けの際も多少紐を緩めたので、いざとなれば紐を断ち切れれば、何とかすぐ脱げるはずだ。

いただきものを即座に破棄するのも気が引けるが、命には代えられない。そこで正体がばれたとしても、それは致し方ない事だろう。そんな事を思いながら、佐助は周りに習って黙々と歩き続けた。

夜も明け切らぬ時分。

鳴竹へ続く林道は静まりかえり、霞で見通せないのもあって、どこか現世と切り離されたような感がある。これから戦に向かうとは思えないような静寂の世界を歩き続けていると、だんだん集中も途切れがちになっていく。

戦慣れした頼鷹達はもちろんこの程度で緊張を欠くような事はないが、これが初陣の佐助は気の張りつめっぱなしで、いささか疲労を感じてしまう。

(鳴竹まで、あと半刻ってところかな)

頭の中に地図を描き、佐助はふっと息を吐いた。しのびの自分であればこの程度の距離、とっくに走破している。どうせならさつさと正体を明かして、斥候として先を行った方が、役立てるのではなかろうか。

そう思い、佐助はちらりと頼鷹を見上げた。鞍上の将は厳しい表情を崩さず、まっすぐ前を見据えて黙々と馬を進めている。

(どうせ戦場に行けば、ばれちまうんだ。今ここで俺様がしのびだと知れても、早いか遅いかだけの違いじゃないのかな)

頼鷹に言ってみようか。自分はしのびだ、先の様子を見てこようか、と。

だが、今は頼鷹の部下が周囲を固めている。正体を明かすにしても、それを知る人間が多いのは好ましくない。出来れば頼鷹のみに伝えたい、それならば目的地にたどり着いてからの方がいいかもしれない。

しかしその時、

……ひゅっ……

細く風を切る音が佐助の耳に届いた。

「！」

考えるより先に体が動き、佐助は頼鷹の馬に体当たりした。

ヒヒインー！！

「うおっ！」

驚き竿立ちになった馬の上で、頼鷹は足を締め、かろうじて落馬を逃れる。そしてその頭があったところに、風を切つて矢が走つた。

「なに！？」

「敵襲だ、上に弓兵がいる！」

それをはじき落とした近習の叫びに振り仰いだ先。左手にそびえ立つ切り立った崖の上に、きらりきらりと光が見え、そうと思った時には矢の雨が頭上から降り注ぐ。

「ぐあああっ」

「うぐっ」

避ける間もなく矢に射抜かれ、ばたばたと幾人が倒れる。動揺し暴れる馬を何とか御しながら、

「この霞だ、連中が頼りにしているのはこちらの音だけに違いない、速やかに進め！」

頼鷹が声を低めて指示を出す。しかし部下達が落ち着きを取り戻す前に、再度矢が襲いかかり、

ヒヒインー！！

再度悲鳴を上げ、頼鷹の馬が人を蹴散らし、めちやくちやに走り始めた。

「頼鷹様！」

馬の尻につきたった矢を認め、佐助は叫んだ。あのままではいつか振り落とされてしまう、そうでなくとも隊から離れた頼鷹一人のところを敵に襲われては、いかな鬼鷹といえど、苦戦するに違いない。

(構ってる暇はない！)

佐助は覚悟を決め、走った。水切りの石のごとく飛び飛びに地を蹴りながら、手中に握り込んだ小刀で素早く紐を切り、次々と鎧を脱ぎ捨てていく。

(ごめんな、出番も待たずに捨てちゃってさ)

がらんがらんと音を立てて後ろに転がっていく鎧に謝りながら、佐助の目は先を走る頼鷹の姿のみを捕らえている。冷たい霞を切り分けるように駆け、

「頼鷹様、無事か!？」

ついに横へ並んで名を呼ぶと、腕の筋肉を盛り上げ、全力でもって馬を押さえようとしている頼鷹が、驚きの声を上げた。

「佐助、お前か？　こんなに足が速かったのか、知らなかったぞ！」

「んな事いいから！　早くそいつをどうにかしないとやばいでしょうが！」

なにを悠長な、と思わず声を荒げてしまう。しかし暴走馬の上にながら、頼鷹はあろうことが笑って、

「案ずるな、じゃじゃ馬の扱いには慣れておるわ！」

ぐい、と大きく手綱を引き絞った。鼻面を引っ張られ、馬はなお苦しそくに首を振った。

「どーう、千影ちかげ、どーう！」

さらに胴体を締めて、胴間声で興奮する馬を圧する頼鷹。びりびり空気を震わせる大声に馬はびくんとし、しかしそれで我に返ったのか、徐々に速度を緩めはじめた。暴走が収まりつつあるのを見て取った頼鷹は林道をぐるりと方向転換させ、来し方に向けて道を走らせる。

「佐助、皆はどうした、無事か」

馬の尻に刺さった矢に気づいて労りの眼差しを見せながら、頼鷹は脇を走る佐助に問う。知らないよ、と佐助は答えた。

「俺様は頼鷹様の後をすぐに追ったから。まさか全員倒れたってことはないだろうけど」

「当たり前だ、俺の部下だからな」

言葉は強いが、語調は苦い。頼鷹は道を戻りながら、くそつと唸った。

「何であんなところに伏兵がいたんだ。鳴竹に悟られぬよう、十分に注意を払ったというのに」

（そういえばそうだ。どうして待ち伏せされてたんだ？）

頼鷹の言葉に、佐助も疑問を抱く。先手を打つべく、鷹通はこっそり戦の準備を進めていたし、その間、鳴竹の動向にも特に注意を払っていたはずだ。すべて手抜き無く、慎重に進められていたはずなのに、なぜ奇襲を受けたのか。

（まさか、どこからか情報が漏れた？）

この戦の世、どこに裏切り者が紛れているかわからない。特に秘していたとしても、内通者がいればそれもご破算だ。

「とにかく一度退かねば。こちらの動きが知れているのなら、奇襲などかなわぬわ」

佐助と同じ考えに至ったのか、頼鷹はきっぱり言い放った。確かに、これでは畏の口に兎が飛び込むが如くだ。佐助は馬を早めようとする頼鷹に、

「頼鷹様、そういう事なら、俺が先に行って様子を見てきます。もう帰り道も塞がれてるかもしれない」

そういつて止めた。む、と速度を緩めた頼鷹は改めて佐助を見下ろす。

「佐助、お前はしのびか」

「……はい」

そりゃ普通の人間に馬と並んで走るなんて芸当は無理だろう、ばれてしかるべきだ。さてどんな言葉が降ってくるかと身構えたが、

「……そうか」

頼鷹は一つ頷いただけで馬を止めた。「とつとつ……頼鷹様？」
行きすぎて地面をこすりながら足を止め、振り返る。頼鷹は汗だくの馬を労るように首へ手を置きながら、佐助をじつと見つめていた。

「ならば行け、あいつらを連れて戻ってこい」

「頼鷹様。……俺は、」

「お前には、俺の側でやってもらいたい仕事が山のようにあるでな、早く戻って来いよ」

「……っ」

穏やかな言葉をかけ、それとは正反対に精悍な笑みをニツと浮かべてみせる。迷いのない笑顔にどきりとして、佐助は息を詰まらせた。

正体を言わず、騙していたのに、しのびなんて怪しげなものなのに、咎め立ての一つもなくお前を使うという。

(……この方を、無事に帰さなければ)

こんなところで死んで良い人じゃない。己の命をかけてでも、守らなければ。

「了解！」

己の胸中にこみ上げる感情に突き動かされるように、佐助はその場から駆けだした。

早く、早くあの人の元へ戻る。ただ一心にそれだけを思い、疾風となつて駆けた。辿った道はすぐに尽き、佐助は先ほどの襲撃場所へたどり着いた。

だがそこで見たものは。

つい先ほどまで共に歩いていた兵達皆倒れ伏し、絶命している光景と。

その中にただ一人立つ、黒の装束に身を包み、黒の無面で顔を隠したしのびの姿だった。

「えっ……姐、さん……？」

どうしてここに、桔梗がいるのか。それも、戦いの時だけ纏う面を身につけて。

驚いて思考が麻痺した佐助の耳にその時、
パー……ン……

乾いた破裂音が、遠くから響き聞こえた。

（鉄砲の音!?）

佐助はぎくりとして振り返った。頼鷹を残してきた方から、さらに銃声がいくつも重なる。

（頼鷹様!）

体を氷に貫かれたような寒気が走り、佐助は取って返そうとした。しかし、

「お待ち、佐助」

背中から刺すような鋭い声が、動きを縛り付けた。

「お前が行く必要はないよ。あたしらの仕事は、仕舞いだ」

死体を避けながら、桔梗が近づいてくる。吹き付けてくる殺気に気圧され、佐助はごくり、と唾を飲み込んだ。かすれた声を何とか絞り出す。

「仕舞いって……どういう意味だよ、姐さん」

「そのままの意味さ。いいから、お前は一緒に来るんだ」

そういつて、桔梗はすつと手を伸ばした。それが佐助の肩に下ろされる瞬間、

「……………!!!」

佐助は地面を抉る勢いで飛び出し、先に倍する速さで頼鷹の元へ駆けた。道を走り抜け、もう少しというところで、どっ、と人の喚き声が霞の幕の向こうから聞こえてくる。

（頼鷹様!）

明らかに複数の男達によるものと聞き分け、佐助は手に苦内くないを滑り込ませた。そしてその場にたどり着いた時、靄にかすむ山道には、どこに潜んでいたのか、鉄砲を手にした兵十数人と、今し方黒馬から降り立った一人の男が居た。

「なに奴!」

「佐久の手の者か!」

佐助の登場に警戒の声を上げ、銃をこちらに構える兵達。しかし佐助はそれらは目にも耳にも入らず、ただ男の足下を見て息を飲んだ。

そこには地に伏した馬と、武士の姿がある。

先刻、己の手で着付けた鎧をかいま見て、それが確かに頼鷹だと認識した瞬間、

「頼鷹様！」

佐助は黒い影となって男に襲いかかった。

向けられた銃口が火を噴く。しかし弾丸は残像をむなしく撃ち抜く。

「ぬっ！」

眼前に現れた佐助に驚き、男は刀を構えようとした。しかし佐助の手が目にも留まらぬ速さで走り、刀を弾き飛ばす。

(殺す)

その一念にのみ突き動かされ、佐助は手にした苦内を深く抉るように突き出した。その先端が男の目に突き刺さる、と思われた時、

ドスドスドスッ！

「がつ！」

背後から衝撃が襲いかかり、手足に激痛が走った。ついでわき腹に重たい打撃、視界がぶれ、風景が線となってとびすさり、

「ぐはっ……！」

次の瞬間には体が木に叩きつけられていた。そのまま根本に崩れ落ちた佐助は、げぼげぼと激しくむせて血を吐いた。吐く度に腹から胸にかけて、割れるような痛みが駆け抜ける。

(なん……だ、今の……)

なにが起きたのか分からない。かろうじて顔を上げた佐助は、自分の背中に針が刺さっており、ついでその先に、黒装束の桔梗が立っているのを見つけた。

「姐……さん……」

針は桔梗の武器だ。では、今自分をなぎ払ったのは、桔梗なのか。問いかけようとしても言葉は声にならず、目眩と吐き気で視界がぶれる。

「……桔梗、それは何だ。貴様の部下ではないのか」

そんな佐助の前で、男が桔梗に語りかけた。佐助を見ていた桔梗はすかさず膝をつき、

「はっ、この者はこたびが初仕事でありまして、いささか気を逸らせました。ご無礼を致し、真に申し訳ございませぬ」

恭しく謝罪する。男はふん、と鼻をならした。

「己が部下の面倒もみれぬとは、腕利きのしのびが聞いて呆れるわ。桔梗、この非礼は見逃せぬぞ。そのわっぱ、首を切つてよこせ」

居丈高に言い放つ。桔梗はわずかに肩を揺すり、しかしみじんも動揺のない声で、

「それはお許しを、九朗様。いささか血気盛んではありますが、この者はいずれ御身の役に立ちましょう。こたびの責めならば、この桔梗が負いまする」

淡々と答える。男は目を細め、絡みつくような視線で桔梗を見下ろした。

「……よかるう、始末は後ほどな。今はこちらが先よ」

部下が拾い差し出した刀を取り、足下にしゃがみ込んだ。佐助からは桔梗が壁になって良くみえないが、手を伸ばして何かを掴んだようだ。

「鬼鷹も、種子島にはかなわなんだな。五発六発と食らってなお生きていたのは化け物かと思うたが、鬼というても所詮人の子よ」

(よりたか、さま)

男が掴んでいるのが頼鷹の体と知り、佐助は呻いて起きあがろうとした。しかし桔梗の針はいかな作用か、佐助の手足の自由を奪い、身動き叶わない。

「この日を幾夜夢見たか……鬼鷹よ、これが貴様に殺された我が子の無念と知れ」

男は嬉々として叫び、太刀を振り上げる。ぎらりと輝くその刃が向かう先に何があるのか。佐助は戦慄し、

「やめ……やめろおっ……!!」

声を絞り出して叫んだが、

「貴様の首、鷹通めに送りつけて、わしと同じ苦しみを味合わせてやるわ!!」

白刃は何に遮られる事もなく、そのまま、勢いよく、振り下ろされた。

.....

戦の勝利に、城内はどこへいっても沸き立っていた。長年の宿敵をついに倒した喜びに兵達はもちろん、軍を束ねる将達も浮かれ、酒に食に女にと、そこかしこで騒ぎを巻き起こしている。

泥酔した兵達が絡んでくるのをすりすり避け、自室へと戻ってきた桔梗は、中に入ってふすまを閉め、ようやく一息ついた。

(やれ、酒臭いこと)

宴の手伝いになり出されたおかげで、衣にも髪にも、酒のにおいが染み着いている。自分で楽しむならまだしも、人の飲む酒の香りなど、うれしいものではない。

(さっさと着替えるかね)

するりと帯をといて着替えを始めた時、

「……………」

部屋の暗がり、人のうめきが微かに聞こえた。桔梗はそちらへちらりと目をやり、手を休めないまま、

「目が覚めたかい、佐助」

声をかけた。灯りのない部屋の中でも楽に見通す桔梗の目に映るのは、手足を拘束された佐助の姿だ。壁にもたれた佐助は身じろぎし、こちらの姿を認めた途端、

「姐さんっ…………どういう、事だよっ…………」

しゃがれた声で叫ぶ。まあ、訳が分からないだろうね。そう思いながら、闇の中で素肌を晒した桔梗は、衣桁にかけた着物に手をかけた。

「どういう事って、何がだい」

聞きたいことを分かっているながら、わざと問い返す。佐助の苛立ちが増す。

「決まってるだろうっ……なんでっ……頼鷹様を、裏切ったんだ……！」

しゅ、と袖を通した小袖は布が荒い。九朗の下されものだが、しのびの者と侮られた故だろうか。ざらざらした感触に顔をしかめつつ、桔梗は答えた。

「裏切る？ そいつは違うね、佐助。あたしらは、はなから佐久の味方じゃない」

「な……に……」

「あたしらを雇ってるのは、鳴竹だ。佐久を落とす為にあちらへ潜っていただけで、こうなるのは最初から決まっていたんだよ」

どん、と重たい音がしたので振り返ると、佐助が畳の上に横たわり、自由の利かない体を引きずるようにして、こちらへにじりよっている。

桔梗が蹴り飛ばした時の怪我がまだ激しく痛むだろうに、大したものだ。帯を締め、無表情のまま評価する桔梗に、佐助はひきつった顔を上げ、

「そんなのっ……俺は、聞いてないっ……」

「頼鷹は察しの良い男で、お前がいくら隠しても、言葉の端々から何事か探り出すかもしれない。お前は何も知らないまま、頼鷹の動きをあたしに知らせる、それが今回の役目だったんだよ」

「……っ……」

「佐久の中で頼鷹が一番の難物だったからね。あんたが色々語ってくれたおかげで、ずいぶん助かったよ。ま、最後に九朗様へ襲いかかったのは、ちよいとよけいだっただけ」

「ふざつ……けるなあつ……！」

ずり、とこちらの足下まで近づき、佐助がにらみつけてくる。それを見て、桔梗は目を細めた。膝をつき、佐助の顎をくい、と持ち上げ、顔を近づけ、囁く。

「言っただろう？ お前が嫌でも、必要な時は使っつて。……良かつたじゃないか、お役目は見事果たしたよ」

「……っ！」

ざらりと目に怒りが燃え、佐助が唾を吐いた。びちゃ、と頬にかかったそれを、桔梗はしかめ面で拭う。

そしてもう片方の手を翻して、掌中に針を生み出すと、

「明日には里に帰す。ご苦労だったね」

トツ、と首筋を刺した。ぐう、と喉を鳴らし、佐助はその場で意識を失う。

「……………」

無念に歪むその顔を見下ろし、桔梗はふ、と短く息を吐いた。

(心なんて捨てちまいな、佐助)

呼びかける言葉は決して声にならず、ただ桔梗の心中にのみ沈んでいく。

(そんなものがあっても、無用の苦しみを背負うだけだ)

その脳裏によぎるのは、佐久で過ごした日々のこと。桔梗を評価し、信頼の笑みを向ける鷹通。惚れたと戯れてしきりに口説き、一方で佐助に目をかけ可愛がっていた頼鷹。だがそのどちらも、先に見た光景に上書きされる。火に包まれる佐久の城と、息を引き取り、首を取られた男の姿に。

(……草に心はいらない)

桔梗は目を閉じ、開いた。開いた時にはもう、佐久の情景は心の奥底に押し込められ、沈んで見えなくなる。

力なく弛緩した佐助の体を持ち上げ、再び奥へ戻した桔梗は、静かに部屋を出た。

人目につかぬよう廊下をひたひた進み、屋敷の一番奥まった部屋

まで来ると、

「九朗様。桔梗、お召しに従い、参上致しました」

主の部屋の前に座し、密やかに来訪を告げる。間をおいて、

「うむ。入れ」

横柄な声が答えた。感情の無い顔をすつと上げた桔梗は襖を開き、その先にある無明の闇の中へと、静かに身を滑り込ませた。

ふ、と目を開くと視界が明るかった。今は夜ではなかったかと混乱したが、すぐにそれが夢だったのだと気づく。

(……ああ……)

鼻がつんと痛い。頬に触れた指先が水滴に濡れたので、朝顔は吐息を漏らした。

(昔の夢を見て泣くなんて)

図々しいにも程がある。あれはすべて、己で成した事。それを認めこそすれ、悔やむ権利など、自分には無いというのに。

(何であれを、思い出したかね)

重苦しい気持ちで涙を拭った朝顔は、すん、と鼻をすすりながら、周囲に視線を走らせた。

今朝顔がいるのは、どうやら屋敷の一室　それも、これまで起居していた部屋のようだ。

あのまま土牢で過ごすのかと思っていたが、どうやら移動させられたらしい。しかもまたもや、清潔な着物に着替えさせられ、あれだけ熱を放って痛みを訴えていたわき腹のけがも、改めて治療されているようだ。

(ひとまず生かされたらしい)

伊達にしてみれば、まだ探るべき情報を持っているかもしれない侵入者を、あのまま死なせるわけにはいかなかったのだろう。

(でも、する事はしてる、か)

朝顔は目だけ動かして、障子を見やった。ちゅん、ちゅんと雀の可愛らしい鳴き声が聞こえる。朝の柔らかい光が障子紙を通して差し込んでいるが、黒い影も二つ、映っている。

(そして、上に二人)

屋根裏からこちらを見張る気配も容易く感じ取れる。その内の一つがふっと消えたのは、こちらが気づいた事に察した為だろうか。

(さすがに、お客様待遇とはいかなくなつたね)

いくら手負いとはいえ、しのびを一人放置しておくほど、伊達もお人好しではないという事だ。こうしたあからさまな警戒をするのは、下手な真似をすればただではおかない、という警告でもあるのだらう。

(……当然、そうあるべきさね)

国主の腹心たる小十郎が、素性の知れないしのびを警戒するのは当然だ。生かされてるだけで、感謝しなければならぬのだらう。

しかしそう考えた途端、皮肉な笑みが浮かぶ。朝顔はひそり、と呟く。

「……あのまま死なせてくれりゃ、良かったのに」

あのまま死ねれば、あんな夢を見ず、こんな苦しい気持ちにならず、全てを投げ捨てる事が出来たのに。

筋違いとはいえ、恨みがましい気持ちでつぶやき、目を閉じた。

やはり体力が落ちてきているのだろうか、緩慢な眠気がそりりとしのびより、そのままとうとう寝入りそうになる。

しかし、その眠りはすぐに遮られる。寝入りかけた朝顔の耳が遠くの足音を聞きつけた。それはまっすぐにこの部屋に向かってきている。

(これは……稲尾の先生だね)

小柄な老人の軽い足音を聞き分け、朝顔は目を開けて訪れを待った。ほどなくして、

「朝顔さん、目を覚ましたそうだね。入っても構わないかな？」

障子に小さな影が映り、穏和な声がかけられる。どうやら上の一人は、朝顔の目覚めを伝えにいったらしい。音もなく戻ってきた気配を感じながら、朝顔は答える。

「ああ構わないよ、先生。どうぞ」

「では、失礼しますよ」

稲尾老人は静かに部屋の中に入ってくる。障子の向こうに、強面の兵が仁王像の如く居座っているのが見えたが、すぐに障子が締め

られて見えなくなる。

「さて、具合はどうですか、朝顔さん」

稲尾はおっとりとした口調で問う。以前とは異なる警戒態勢にこの大げがだ、朝顔がただの旅人ではないと分かっているだろうに、態度に変化はない。医者故に、多少のことには動じないのだろうか。「また世話になっちまったようだね、先生。おかげさまで、だいぶ良いよ」

物柔らかな対応に少しほっとして微笑むと、稲尾も頬を緩める。

薬箱を開け、

「それは良かった。今、薬を処方します。それを飲んだら、消化によいものを用意してもらいましょう。食欲はありますか？」

「ああ……そうだね、軽いものなら、お願いしたいよ」

「分かりました。……もし、もし」

稲尾は再び障子を開け、廊下の男達に声をかけた。お手数ですが、粥を一杯頼みます、と丁寧をお願いされ、相手は躊躇したが、やがて腰をあげる。ありがとうございます、と礼を言ってからこちらに向き直り稲尾は、朝顔の肩にとん、と触れた。

「今、持ってきてもらいますからね。少しお待ち下さい」

その声に、表情に、労りを込めて言う。優しさに満ちた稲尾の態度は、それ自体が薬であるかのように、ささくれ立つ心にしみ入るようだ。

（いやだ、泣いちまいそうだよ）

「ああ、ありがとうございます、先生」

照れつつ礼を言うと、稲尾は何の何の、と朗らかに笑って、薬づくりを始めた。静かな所作で作業する稲尾の気配に落ち着きを感じながら、朝顔はふと、問いを口にした。

「先生。あたしは、どれくらい寝てたんだい？」

「さて、かれこれ八日ほどでしょうか」

「八日も……」

道理で。怪我のせいもあるだろうが、全身がやけに重い。昔なら

こんなに長いこと寝込まず、三日もあれば起きあがる事が出来ていたというのに。やはり、石田三成の剣閃をまともに食らってしまったのはまずかった。

（自分じゃそのつもり無かったけど、かなり鈍ってるみたいだね）
すでに怪我をしていたせいもあるだろうが、しのびとして仕事をしていた頃ならば、敵の間合いに正面から突っ込むなんて無様な真似はしなかっただろう。

（いつまでも若い頃のつもりじゃいけないって事かねえ）

まさかしのびに戻りたいとは思わないが、時の経過と共に失ったものを思うと、なかなか受け入れがたいものがある。つい渋い顔をしていると、稲尾が薬草をすりつぶして溶かした薬湯をすつと差し出してきた。

「さ、少し起きられますか、朝顔さん。これを飲んでしまいましょう」

「ああ……ありがとうございます」
手を借り、体のあちこちの痛みにイテテと呻きながら身を起こした朝顔は、湯気を立てる茶碗にそつと口をつけた。するりと飲めば、苦い味が口の中に広がって、思わず顔を歪めてしまう。

「まずい……」
「良薬口に苦し、と申しますからね。それを飲めば、今よりもっと楽になれるはずですから、がんばってください」

口調は優しいが、有無を言わせない。見かけによらず怖い先生だねと思いつつ、朝顔は何とかそれを飲み干し、深いため息をつきながら再び床についた。

「では、今度は腕を看させてもらいますよ。そろそろ代え時ですから」

そういつて稲尾は掛布をめくり、包帯の巻かれた朝顔の手を取る。朝顔は素直になすがままにされていたが、そこへ先ほどの兵が戻ってきた。

「先生、もう少ししたら、粥ができあがるそうです」

がっしりした体格の男がこちらをのぞき込み、むすりと言う。稲尾が「そうですね、ありがとうございます」と礼を言うとすぐに引っこ込み、しかし同僚の方へ身を寄せ、

「おい、聞いたか？ 筆頭が徳川と、同盟なさるおつもりらしいぞぐつと声を絞って囁きかけた。常人であれば聞き逃してしまっほど小さな小さな声だが、朝顔の耳はたやすく拾い上げる。興味を引かれ、上の者達に悟られないようあくまで自然に横たわったまま、朝顔はその話に集中した。相方もぼそぼそと小さな声で応える。

「……何だつて？ この間申し出をお断りになったと聞いていたが」「それが、徳川は石田と相對する事になりそうだな。敵の敵は味方、という事らしい」

「そうか。ではまた、近く戦があるやもしれんな」

「だろつよ。ああ、腕が鳴るな。石田に殺された者達の為にも、目に物見せてくれるわ」

(……伊達が徳川と、同盟……)

天井を見つめ、朝顔は目を細める。

織田の侵略から立ち直ったばかりの伊達が、単独で石田軍に立ち向かうは難しい。なれば敵の敵は味方、徳川と手を組もうとしているのか。

伊達政宗の案か、はたまた小十郎によるものかは分からないが、しかしその同盟のきっかけとなったのが、領地を荒らした石田への意趣返しであることは、想像に難くない。

(もしそうなら……石田をこの地に呼び込んだ、あたしのせいじゃないか)

領民を死なせただけでなく、この国を戦に駆り立てる事になるなんて、空恐ろしい。事の大きさに驚き、

「先生、右目の、」

旦那を呼んでおくれ。そう言おうとした朝顔はしかし、最後に見た小十郎の姿を思いだし、残りの言葉が喉に詰まった。

『信じられねえな』

どんな言葉も信用すまいというようにとがった声。

『うるせえ！ 俺はそんな話をしにきたんじゃねえ、軽口はそれまでにしる！』

強い不信と、警戒心にみちみちた、あの眼差し。

それは以前の、堅苦しく不器用だが、芯から優しかった小十郎とは、まるで別人だ。

嫌われて、疑われるのは当然だ。そうあるべきだ。自分は元とはいえ、しのびなのだから。

理性はそう結論づけるが、一方で思う。

嫌だ、あんな恐ろしい目で見ないで欲しい。あの優しい人に、下賤の者と蔑まれたくはない。

(だめだ、とても顔を合わせられない)

怪我で気が弱くなっているのか、あるいはあんな夢を見たせいか。相対した時、自分に向けられるだろう小十郎の怒りを思うと、震えるほどに、怖い。朝顔はたまらなくなつて、空いた腕で目を覆った。「朝顔さん？ どうしました、痛みますか？」

それに気づいた稲尾は治療の手を止めて、心配そうに声をかけてくる。

「何でもないよ、先生……何でも、ない」

唇から漏れた声は自分でも驚くほどに、弱々しい。

所詮自業自得でしかないのに、こみ上げてきた恐怖と悲しみは重くのしかかってくるようだ。朝顔は胸の息苦しさに耐えかね、きつく目を閉じた。

「……ふう」

ようやく最後の書類を終えた小十郎は大きく息を吐いて、目のあたりを指でぐりぐりともみほぐした。さすがに日がな一日筆を握っている、疲れる。

石田との対決に備えて徳川との同盟が成ったはいいが、各諸侯のとりまとめはいつものごとく手間取り、なかなか難儀な仕事だった。

政宗によって統一がなされた奥州ではあるが、その内部にはいまだ火花が残っている。隙あらば寝首をかこう、あるいは少しでも己の利を多く勝ち取るうとそろばんを弾く者も少なくなく、小十郎は政宗の傍らでそれらを抑え、協力する体制に持つて行くのにたいそう骨を折った。

あちらでは戦後の褒美を約束し（始まってもないのに何を言うかと小十郎は秘かに苛立ったが）、こちらでは不穏な家中の仲裁をつとめ、はたまたそちらでは難しい裁判の舵取りをしてやり……。何しろ神経を使う仕事が続ぎ、さすがの小十郎も、のしかかってくる疲労に耐えかねてため息がでるほどだった。

（その甲斐あって、ようやくまとまったのは万々歳だがな）

すっかり血が固まった体をほぐすべく、立ち上がって肩を回しながら、障子を開ける。ひゅう、と冷風が頬を撫で、目が細くなる。

一日部屋にこもっていたので気づかなかったが、もう夜が明けようという時分。暗い空の向こう側が群青色に変わりつつあるのを見て（体が固いな。少し歩いてから、一眠りするか）

小十郎はあくびをかみ殺しながら、静かに歩き出した。向かう先は、己が丹誠込めて手入れをしている、丘の上の畑だ。

空気はひんやりとされていて、じわじわと身に染みるようだ。しか

し風は春の温もりを帯びていて心地よい。

すでに朝の仕事をしている者達と挨拶を交わしながら、小十郎はゆっくりした足取りで農道を歩む。疲れを感じてはいるが、その頭の中では、己の抱える仕事で埋め尽くされている。

（徳川は日々勢力を拡大しているが、石田の方も侮れるもんじゃねえ。先だって小早川と毛利が、奴と同盟したらしい。裏で大谷が蠢いての同盟なのかもしれねえが、どちらも大大名で、抱える軍勢は万を数える）

歩きながら険しい表情になっていく小十郎に、行き合った村娘がびくつとして、慌てて道をあける。それに気づいた小十郎は苦笑いで、すまねえな、と謝りながら通り過ぎた。自分の面相はどうも女子供に受けが悪い。もっとも、小十郎も、それらの相手をするのは苦手なのだ。

先を進みながら、思索は続く。

（しかし、徳川はまだしも、寄り集まって出来たばかりの石田軍については、分からない事も多い）

石田について細かい情報を捕らえきれないのは、あの男の憤怒に従うがごとく、石田軍が敵を全滅せしめ、手がかりの一つも残さない故だ。後に残るのは焼け野原、恐ろしげに語られる凶王の名だけだ。

（まるで、織田信長の再来だな）

全てを焼き尽くそうとでもいうように、情け容赦なく襲いかかってきた魔王軍に屈した過去を思うと、どうしても渋面になってしま

う。
（とにかく、情報が欲しい。無手で立ち向かって、二の舞はごめんだからな）

途中、井戸に立ち寄った小十郎は水を汲み上げると、固くこわばった顔をばしゃばしゃと洗った。ぼけた頭が少しはすっきりしたと、少し早足になって道を進む。

『石田の情報なら、あいつが知ってるんじゃないのか』

評定でこの話題が上った時、政宗は喧喧とわめきあう将達に聞こえぬよう、自分にそう囁いてきた。あいつとは、もちろん朝顔の事だ。

(しかし、どれだけ役に立つものか)

豊臣時代に離反したと言っていたから、現在の石田の情勢は分からないかもしれない。しかしそれでも、少しは手がかりを得られる可能性に賭け、朝顔が目覚めて後の七日間、小十郎は尋問の続きを行っていた。

とはいっても、自身が尋問しているわけではない。己が行えば、どうしても私情が混じってしまいそうな気がしたので、朝顔についての一切は今、他の者に任せていた。

朝顔の媚態に軽々しく惑わされるような若者ではなく、年のいった老家臣にその役目を託したのだが、しかし考えていた以上に、朝顔は非協力的だった。

どれほど言葉を重ねようと、どれほど時をかけようと、朝顔は相手の言葉をのりくらりと交わすばかりで、いっこうに語らないのだという。

(あるいは、大した情報を持っていねえのかもしれないが……)

何しろ出会った途端に、殺し合いを始めるような相手だ。深く縁を持つわけではなく、逆に憎み合っているようなら、朝顔が石田について知っている事も、少ないのかもしれない。しかし、

(……信用ならねえ)

一度芽吹いた不信はいまや大木となり、小十郎の心にずしりと根を張っていた。丘へ続く道を上っていきながら、その表情はいよいよ厳しくなっていく。

(あの女は俺を、政宗様を謀^{たばか}っていた。今度がそうじゃねえとはかぎらねえ)

『朝顔に騙されたのが、よほどShockだったらしいな』

不意に政宗の言葉が耳によみがえり、小十郎は拳を握りしめた。違う、朝顔に騙されたのが悔しいのではない。ただ素性の知れない

怪しい相手を易々と政宗のそばへ近寄らせてしまった、己の不甲斐なさを許せないだけだ。

強く言い聞かせるその一方で、そうじゃない、己をごまかすなど囁く声が聞こえて、息が苦しくなる。

(くそつ。あいつの事になると、どうしてこうなる)

思うだけで心が乱され、必死で自分を律しなければ、ついあの女を許してしまいそうになる。しのびの過酷な生を思い、どれほどつらい思いをしてきたのだらうと、つい同情してしまいそうになる。

(駄目だ、考えるな)

あの戦いから二週間。少しは怪我が良くなったのだろうか、と案ずる心を振り払い、小十郎は土を噛むようにして最後の道を登り切った。

視界が開け、ざあつと風が吹き寄せる。手で遮り、片目を閉じて風が吹き去るのを待った後、小十郎は腕を下ろして畑を見渡す。

日々丹誠込めて世話をしている畑は、このところ多忙で、親切な村の者に世話を任せきりになってしまっている。久しぶりに土をいじれるか、と心が浮き立つ思いがしたが、しかしそこに人影を見つけて、足を止めた。

(誰だ……)

村人ではない。女だ。こちらに背を向け、風に吹かれるまま、眼下に広がる田園地帯をじつと見つめているようだ。朝焼けの中に浮かぶその立ち姿に、小十郎は息が止まるかと思うほど驚いた。

(まさか)

そんなはずはないと否定しようとしたが、間違いない。思わず踏み出した足が地面をすり、ざつと音を立てる。それを聞きつけたのか、女がゆつくりとこちらへ顔を向けた。

束ねた髪が風に吹かれ、緩く広がる。白い肌が淡い陽光を纏い、黒々とした深い色の瞳が輝く。庇うように手で自分の体を抱いて立つ姿は頼りなく、どこまでも儂げだ。声をかけたら消えてしまうのではないか、と言葉が出ない小十郎の代わりというように、柔らか

そんな唇が動き、

「……右目の旦那」

静かに言葉を紡ぎ出す。耳に届いたそれは、確かに幻聴ではない。それでようやく目の前の女が夢幻ではないと実感し、小十郎は目を睜って唸った。

「朝顔……てめえ、なんでここに……！」

小十郎の問いにすぐに応えるでもなく、朝顔は吹き抜ける風で乱れた髪を手で押さえた。着物の袖が滑り、露わになる腕の半ばに、包帯が覗く。

（あの怪我で、そう簡単に動けるわけがねえ）

稲尾からは全治数ヶ月と聞いている。いくら何でも、二週間で起きられる訳がない。しかし朝顔は怪我などしていかないかのように、自然な動作で小十郎に向き直り、口の端をあげた。

「おや、旦那じゃないか。朝も早くから見回りかい、ご苦労な事だね」

落ち着いた声音は以前とまるで変わりにない。その落ち着きがかえって癪に障り、小十郎は拳を握りしめた。

「聞こえなかつたのか。てめえが何でここに……！」

怒りを含んだ低い声が地を這う。朝顔は腕を組み、微笑んだ。

「なに、部屋に閉じこもりきりも、飽きちまってね。ちよいと散歩に出てきたのさ」

「見張りの連中がいたはずだが」

「長の仕事で疲れてたのかねえ、皆気持ちよく眠ってたよ」

そんなはずはない。おそらくこの女がしのびの術を使って、見張りの者達に何かしたのだろう。警戒した小十郎は腰に手をやったが、慣れ親しんだ刀の重みが無い事に気づいた。しまった、部屋に置きざりのままだ。その仕草を見て取ったのか、朝顔は口元に手を当てて微笑む。

「そう怖がらなくても、何もしゃしないよ、右目の旦那。朝から切

つた張つたなんて、無粋じゃないか」

顔を横に向け、眼下の景色を見晴るかす。

「奥州は良いところだね、旦那。穏やかで、豊かで……ここから見ていると、あんまり綺麗な景色なもんだから、つい時を忘れちゃうよ」

雲を蹴散らして上ってきた太陽の光が、辺りを照らし出していく。ここからは屋敷を中心とした田畑を見渡す事ができ、大層眺めが良い。遙かに広がる田園風景は奥州の豊かさを象徴する光景で、小十郎もここに来るたびに、見事なものだと惚れ惚れするほどだった。桔梗が感嘆するのも無理はない。

しかし今、朝日に照らされた朝顔の肌はやはり色が白く、いや青ざめていて、どこか病的だ。怪我で長いこと寝付いていた故だろうか、その横顔は疲れて健やかさに欠け、体も縮まってしまったかのような錯覚を感じさせる。

(情けをかけるな)

つい大丈夫か、と言いそうになってしまい、小十郎は奥歯を噛みしめた。強いて険しい顔を作り、

「くだらねえ事を言うな、部屋に戻れ。勝手に出歩いていいなんて許した覚えはねえ」

強い口調で命じる。朝顔はゆっくりと顔をこちらに戻した。

(……何だ、こいつは)

以前とまるで違う、抜け殻のようなその表情に小十郎はぎくりとする。いつも微笑を口元にため、時に声をあげて笑い、豊かに表情を変えていた朝顔とは、全くの別人だ。まるで人形のように生氣のない立ち姿は、いずれその体を釣る糸が切れて、地面に崩れ落ちるのでは、と夢想するほどに危うい。

「あ……」

さがお、と名を呼ぼうとした時、ふと女が動いた。音も立てずにするりと、瞬きの合間に小十郎の前まで近づき、

「戻ってあげてもいいよ、旦那。もし旦那が、あたしを抱いてくれ

るんなら」

滑り込むように腕の中へ入ってきた。とん、と寄りかかれ、小十郎は硬直した。全く思いがけない接近に思考が停止し、身動きがなわない。

「っな、」

今何と言ったのか。舌が回らなくなり、疑問も吐き出せない。しかし朝顔は正しく質問を理解していた。こちらを見上げるその面差しは、先の人形めいたそれではなく、瞳が濡れたように輝き、ふっくらとした唇は口吸いを請うように突き出される。

「旦那がどんな風にあたしを見てるか、知らないと思ってたのかい？ いつでもその目で、あたしに触りたい、触りたいって言ったじゃないか、……こんな風に」

「！」

不意に腕をさらわれ、手が朝顔の胸に押しつけられたので、小十郎は総毛立った。すぐに振り払わなければと、ほとんど恐怖に近い思いで考えたが、しかし服の上からでもはっきり分かるほど、張りのある柔らかくもしっかりした感触に手がかえって張り付き、引きはがせない。

「よ、よせ……」

近づくだけでも動揺してしまうのに、これは刺激がすぎる。どっどっどっ、と鼓動が速まり、熱が急激に高まった全身から汗が噴き出す。

「よせって何を？ あたしは何もしちゃいないじゃないか、旦那」

背伸びをした朝顔は、小十郎の首筋に囁きと共に息を吹きかけた。擲擲するような口調に、カッとなって手をはがそうとしたが、ぴくりと指を動かした時、朝顔が小さく声を漏らした。

「あんっ」

(っー)

吐息混じりの、短くも紛れもない嬌声に、ぐらりと目眩がする。己の息が上がり、ますます手が柔肉に吸い付くのを感じながら、小

十郎は熱の渦巻く身体の変化を無視出来ず、とうとう、認めた。

(ああそうだ、俺は確かに、この女が欲しい)

初めて出会った時からその姿に見惚れ、語らうほどに心惹かれ、ふとした拍子に近づき触れる体に、息が出来なくなるほど焦がれた。流れ落ちる髪に指を絡め、柔らかい笑みを浮かべる唇を貪り、呼吸のたびに上下する豊かな胸を、こうして己の手で包み込んで愛撫し、何よりもこの蠱惑的な身体を隅々まで味わいつくし、全て忘れて、心ゆくまで睦み合いたい。

「……ね、二人で愉しもうよ、旦那……」

するりと首に手を回し、朝顔は小十郎の顔を引き寄せて微笑む。

長いまつげで影の落ちた瞳に映るのは、小十郎だけだ。

「朝顔……俺、は……」

果てしない闇に引きずり込まれるように、小十郎は弾む鼓動に息を荒げながら、空いた手で朝顔の腰を引き寄せた。夢つつつのまま顔を傾け、互いの息が触れるほど近づき、唇と唇が重なり合う瞬間、『今のお前に、俺の背を守れるのか?』

雷のごとく脳裏を走った政宗の言葉が、小十郎を撃つ。

「……!!」

ハッと我に返った小十郎は、とつさに朝顔を突き飛ばした。

「きゃっ」

女の体はあっさり吹っ飛び、そのまま畑の上に転がる。土に汚れたその姿を見て、小十郎の情欲はたちまち激怒にすり替わった。

(俺は何度こいつに騙されるつもりだ!)

女はしのびだ。その体は武器だと言っていた。ならば小十郎を誘惑し、いいように操る企みをしてもおかしくはない。

(俺が守るべきは、政宗様ただお一人だというのに)

こんな女に己の欲望を見透かされてつけこまれるなど、屈辱の極みだ。誘惑されかけた分、自身の意気地のなさにも怒りを覚えた小十郎は、鬼の形相で女を睨み下ろした。

(殺すか)

激情のあまり、殺意が先走る。その小十郎の鬼気を感じているのかどうか、朝顔は身を起こし、鼻で笑う。肩についた土を払い落としながら、

「乱暴なお人だね、それじゃ女にもてやしないよ、旦那」

「戯れ言は仕舞いにしろ。てめえにはやはり、あの牢が似合いだ」

「冗談だろ？ あんなところに閉じこもってたら、息が出来なくなっちゃうよ。どうせ閉じこめるなら、旦那の部屋にしてほしいね。そうすればいつでも好きな時に、お互い楽しめるともんじゃないか」

まだそんな軽口を叩くか。カツとなり、小十郎は朝顔の胸ぐらをつかんで、無理矢理立たせた。抜き身の刃のごとき鋭い眼差しで睨み付ける。

「てめえがこの世にただ一人の女になろうと、俺はてめえを抱かねえ。自惚れるのも大概にしる」

首が締まるほどきつく掴んだため、「うっ……」朝顔はしかめ面になって呻いたが、しかし次の瞬間、

ボンッ！

突然白い煙が視界を隠し、手ごたえがずるりと抜ける。

「!?!」

しのびの煙玉と即座に判じた小十郎は口と鼻を手で覆い、後ろにとびすさった。立ち上る煙の幕から抜け出してすばやく視界を見回すと、丘の端に立つ朝顔の姿が目映る。

「朝顔、てめえ！」

急ぎ駆け寄るが、

「あたしだって、旦那みたいな役立たずは御免だよ。少しは楽しめるかと思っただけど、期待はずれもいいとこだ」

朝顔はフツと顔を歪めてあざ笑い、地を蹴った。

「待て!!」

朝顔の姿が丘の向こうに消える。下に落ちたかと戦慄して端まで駆け寄ったがしかし、どこにも女の姿が見えない。

「逃がしたか……！」

手負いであろうと、元であろうと、しのびはしのび。一度囲みを抜けてしまえば、身を隠すのはお手のものだろう。目の前、しかも一時は己の腕の中にまでいながら、逃がしてしまうとは。

「くそっ！」

まだ遠くにまでは行っていない。身を翻して屋敷への道を駆け戻りながら、

（なんて醜態だ……仮にも竜の右目の名を頂戴した片倉小十郎景綱が、女一人にこの様か！！）

小十郎は情けなさで怒りで胸がいっぱいになり、ぎしりと歯を食いしばった。

太陽は登り切り、頂点に差し掛かりつつある。陽光が差し込む木々の合間をすり抜けるように、朝顔は森の中を跳んだ。足が痛むので、力を加減しながら枝から枝へ飛び移り、先へ先へと進んでいく。(参ったね、このまま行くわけにもいかなさそうだ)

奥州を早く出ようと、包帯だらけの体に無理を強いて移動していたが、そろそろ限界が来ている。枝に着地した時、足先から全身に痛みが駆け上ってきて、思わず歯を食いしばる。

(国境も越^くしたし、もうそろそろ、下でもいいかね)
そう思いながら眼下の道へ視線を走らせた時、視界の端に影が映った。

「!」

己と同じく樹上を移動するそれに気づいた瞬間、朝顔は振り返りもせず、その手から素早く針を放った。

「おっと!!」

影が声をあげ、動きを止める。それを見届けてから朝顔は枝に舞い降りた。背後に向き直り、

「こそこそ人の後をつけてくるんじゃないよ。何の用だい」

声を張って呼びかける。それに応えて、

「だからいきなり攻撃するのはやめようよ、姐さん。命がいくつあっても足りないじゃん」

軽快な口調で正面の木に姿を現したのは、昔と同じく、まだらのしのび装束に身を包み、しかし中身はずいぶん成長した佐助だった。指の間の針を得意げにひらひら振ってから、ひゅっとこちらへ投げ返してくる。

「でもどうしたの、姐さん。ずいぶん動きに切れがないね」

「……ちよいとしくじって、身体を痛めちまったんだよ。あんたに針を止められちまうなんて、あたしもよっぽど腕が鈍ったかね」

走る光をぱしつと受け止めて仕舞い込み、朝顔は肩をすくめた。
はは、と佐助が乾いた笑いを漏らす。

「まっすぐ目を狙ってきておいて、良く言つよ……。どっちかって
ゆーと、俺様の腕が上がったって方が正しいっしょ」

「おや、そうかい。図体がでかくなつても、減らず口がそのままだ
から、つい昔のつもりになつちまったよ」

「あー、年を取ると、昔の事もつい最近のように感じるっていうね
ー」

「へーえ。自分の未熟さを棚に上げて、人を年寄り呼ばわりすると
は、ずいぶん偉くなつたもんだね、佐助」

「いやいや、とんでもない。なんなら手合わせでもして、俺様の成
長ぶりを確かめてみる？ 姐さん」

佐助は腰を沈め、大手裏剣を手にして構える。確かに昔とは違い、
殺気を高めるその姿のどこにも、隙がない。あの子供がよくもここ
まで育つたものだ、と朝顔は目を細めて笑つた。やめておくよ、と
首を振る。

「あいにく、本当に調子が悪いんでね。そういうお遊びにつき合う
つもりはないよ」

「……ふーん？」

佐助は構えを解き、まじまじと朝顔を見つめてきた。黒装束をま
とつた体を上から下まで見て、ふんふん、と嗅ぐ。

「血の臭いがするね、姐さん。どっかで一仕事してきたとか？」

「ま、そんなところだね」

多分傷が開いているのだろう。他人事のように思いながら、肩を
すくめる。

「もうしのびは廃業したんじゃないかっけ」

前の戦が終わった時、佐助と別れる際には確かにそう宣言した。

それがこうもあっさり覆されるとは、朝顔自身も思っていなかった
のだ。皮肉なものだと苦笑し、

「この仕事が終わったら、今度こそ本当に、未来ある若者へ道を譲

るつもりさ」

「そんな事言つて、いつまでも立ちふさがつてそうだけどね。……で、次は何をするつもりなのか、聞いてもいいかな？ 姐さん」

「あたしの仕事を、あなたに話す必要があるのかい」

「んー、姐さんは結構とんでもない事やらかすだろ？ それで、真田や武田に火の粉が飛んでくるとやばいからさ、俺様も姐さんの動きは知っておきたいわけよ。」

それにほら、豊臣征伐の時に、うちのお館様と渡りをつけてあげただろ？ あの時の借りを返すと思つてさ、ね、このとーりっ！」

顔の前で手を合わせ、どこか芝居がかった口調で頼み込んでくる。それに絆されたわけではないが、

(まあ……いいか。邪魔にはならないだろ)

立ちっぱなしもつらいので、朝顔はストツと枝に腰掛ける。そして、動きを止めた途端、じくじくと痛みを訴えてくる全身の怪我に顔をしかめながら、

「大阪へ行くつもりさ」

さらり、と答えた。

.....

「政宗様！」

夜が明けたばかりだというのに、伊達屋敷の中は騒然としている。落ち着かなくざわめく者達を押し分け、朝顔の部屋へ入った小十郎は、そこに政宗の姿を見いだした。

「……小十郎か」

どうやら負傷したらしい見張りの兵としのびが、うめき声をもらしながら、手当を受けている。これはおそらく朝顔が脱走する際に倒していったせいだろう。

その部屋の中央に立つ政宗は眉間にしわを寄せて、手にした書から顔を上げた。小十郎を見ると、低い声で語りかけてくる。

「あの女が逃げたらしいな」

「は……面目もございません。先ほど私の前に姿を現したのですが、逃がしてしまいました。この失態の償いは必ず致します。今はまだ国を出てはおりませまい、すぐに追跡を……」

女の色香に惑わされ、結果こんな失態を晒すとは、不忠に過ぎる。すぐに挽回をせねばと身を翻しかけたが、

「待て、小十郎。これを見る」

政宗が引き留め、書状を差し出してきた。丁寧に折り畳まれた紙束は妙に分厚く、流麗な手跡で何事か、事細かに書き込まれている。

「政宗様、これは？」

見覚えのない筆跡に眉根を寄せて尋ねると、政宗は渋い顔のまま、「朝顔からだ。石田について、これでもかとびっしり書いてあるぜ」
「なっ……!？」

目を見開き、小十郎は慌てて手紙を広げた。焦ったお陰で重なつた束がばさりばさりと開き、その端が床にまで届く。

(これは……!)

息を飲む小十郎の目に飛び込んできたのは、政宗の言うとおり、石田や大谷など旧豊臣勢に関する情報の数々だった。

石田と大谷麾下の兵がどれほどか(これは豊臣時代のものだと注釈がある)、彼らに味方するもの、敵対するものは誰か、あるいはその拠点である大阪城の図面、兵糧の備蓄量、大砲や鉄砲隊の規模、豊臣軍のもつからくり・天君の設計図など、その内容は驚くほど多岐に渡っている。

「政宗様……これは、どういう……」

一体いつの間に、こんなものをしたためたのか。あまりにも思いがけない事にほとんど呆然として呟くと、主はもう一通の文を持ち上げて見せた。宛名は政宗となっており、筆跡からしてそちらも朝顔によるものらしい。

「あの女、どうやら一人でやるつもりらしいな。石田とは戦うな、自分が始末をつけると言っただけだ」

「……馬鹿な、それも虚言でしょう!」

先に顔を合わせた時、朝顔は一言もそんな事は言っていなかった。これもまた、朝顔の騙しの手じゃないのかとつい叫ぶ小十郎だが、政宗は肩をすくめた。

「そいつが正しいかどうかを確認するのは、お前の仕事だろ。どうこう言うつもりはねえが……」

そして小十郎の脇をすり抜けながら、ぽん、と肩に手を置く。

「お前にLove letter一つ書かず、こんなもんを残していったあいつの気持ち、ちったあ考えてやったらどうだ。……これ以上奥州の民を傷つけさせない、とよ。泣かせるじゃねえか」

「……っ」

主の言葉に、小十郎は声もなかった。

(……何をするつもりだ、朝顔……っ!)

混乱して全身がわななき、力を込めたその手中で、文がくしゃり、と音を立てる。

.....

日が頂点に達し、昼飯とばかりにりすが木の実を抱えて駆け抜けていく、その脇で。

「……ええ? じゃあ姐さん、一人で殴り込みかける気なのか?」

話を聞いていた佐助が素っ頓狂な声をあげて身を乗り出す。朝顔は肩をすくめて、

「そうだよ。何かおかしいかい」

「おかしいかいつて、そりゃあ……」

途中で言葉を飲み込み、佐助はまたもまじまじとこちらを見つめてくる。好奇心と驚きに充ち満ちたその眼差しに耐えかね、あんまり見るんじゃないよとそつぽを向くと、

「なんか……本当に変わったなあ、姐さん。昔だったら任務でもないのにそんな事、しやしなかつただろうに」

しみじみした口調でそんな事を言う。それには、（同感だね）と朝顔も秘かに思った。確かに『桔梗』であれば、己の感情にのみ突き動かされるなど、あり得ない事だ。

しゃがみこんだ足に頬杖をつき、ふうん、と口を曲げる佐助。

「坊主憎けりや袈裟までつて奴か。姐さんがそんなに豊臣嫌いだったとはね。豊臣を滅ぼしただけはあきたらず、残党も一人残らず狩るつもりだったりして」

「まさか。そんな事してたら、きりがないじゃないか。それに」

目を細めた朝顔の脳裏によみがえるのは、あの日の事。

血にまみれた石田三成の、己の主以外を認めようとはしない冷たい瞳。

死に瀕して全てをあきらめた己の目に映った、死体の山。

「あの男が作り出すのは、死の世界だけだ。そんなもの、誰も望んじやいない」

そんなもの、決して認めてはならないのだ。すう、と頭が冷えて、冷たい殺意が手足にまで満ちていく。

「石田三成だけは、誰かが止めなきゃならないんだ。その誰かをあたしがやれば、戦にならずに被害は最小限に抑えられるってもんじやないか」

「……姐さん、あんた……」

こちらの覚悟を察したのか、佐助が目を見開き、言葉を失った。

しばし沈黙が落ち、さわさわと優しい葉擦れの音だけがゆっくりと積もっていく。風に揺れた枝の合間から陽光が差し込み、気まぐれのようにしのび達を照らし出しては過ぎ去った。

やがて佐助が立ち上がり、ぼりぼりと頭をかいた。

「……まあ、姐さんが石田を殺したいっていうなら、止めやしないよ。うちの大将も、あいつには悩まされてるからね」

「武田の殿様が？」

「あ、違う違う、真田の旦那の方だよ。お館様はほら、今病で伏せってるんだけど、石田は主の仇は殺すって公言してるもんだからさ。」

『お館様の命を奪おうなどと、不届き千万！ 石田殿の宣戦布告はこの真田源二郎幸村が、正々堂々お受け致す！』って大騒ぎさ」
わざわざ声色まで真似て、武田の若大将の言葉を告げる佐助に、そりゃそうか、と朝顔も納得した。

豊臣秀吉の息の根を止めた武田信玄を、石田は骨の髄まで恨み抜いている。その信玄の弟子である真田にしてみれば、とても見逃せぬ敵に違いない。

「真つ向勝負すりゃ、大将の気は晴れるだろうけど、正直ちょっと分が悪い。石田だけならまだしも、今は毛利や小早川が向こうについて、どうやっても大合戦になりそうだからね。そうなる前に、姐さんが石田を止めてくれりゃ、それに越したことはない」

その辺りの打算的な計算も出来るようになったらしい。しのびらしい言い分に、朝顔は口の端をあげた。

「ならあんたは、真田の旦那がこれ以上暴走しないように、抑えておくんだね。始末は全部、あたしがつけるからさ。……話はこれで仕舞いだ。そろそろ行くよ」

立ち上がった朝顔はそのまま跳び去ろうとしたが、姐さん、と佐助が声をかけてくる。

「前の時はどさくさに紛れて、聞き損ねたけどさ。……姐さんがどうしてそこまで豊臣が嫌いなのか、聞いてもいいかい？」

「……………」

朝顔は背を向けていた事にほっとした。今の自分はきつと、憎しみと悲しみとで、かなり複雑な表情になっているに違いない。

自分が手塩にかけて育ててきた弟子に、そんな顔を見せたくはない。

「……………それほど大層な理由じゃあないよ。ただ……………」

説明しようとしたが、不意にこみ上げてきた懐かしい感情で、言葉が詰まる。それを払うように朝顔は頭を振り、

「ただあれ以上、心を捨てさせたくなかっただけさ」

それだけ言い残して、枝を蹴る。

(早く……早く、止めなきやならない)

固く決意し、痛む身体を押して、先へ、先へと進もうとするその胸に去来するのは 最後に仕えた主、豊臣秀吉の威風堂々たる、それでいてどこかもの悲しい姿だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7974v/>

花のうへの露（戦国BASARA）

2011年10月10日03時18分発行